

# 新潟医療福祉大学 教職支援センター年報

第7号〔2022年度版〕

Annual Report 2022〔NO.7〕

Niigata University of Health and Welfare

Teaching Career Support Center



# 目 次

## 研究ノート

オランダにおける初任者研修（吉田 重和）	1
----------------------	---

## 実践報告

### 取組紹介

保幼小教育の円滑な接続と養護教諭を目指す学生の学びに関する取り組み — 保育園への保健指導ボランティア活動を通して —（丸山 幸恵）	8
令和新時代の私立大学教職課程の教員養成の在り方 — 全国私立大学教職課程協会教職課程運営に関する研究交流集会資料を基に —（脇野 哲郎）	12
バレーボール指導実習の実践報告（久保 晃）	19

### 実習報告

栄養教育実習報告（健康栄養学科 石井 杏奈）	28
栄養教育実習報告（健康栄養学科 清水 瑳羅）	30
教育実習報告 [小学校]（健康スポーツ学科 小林 乃愛）	32
教育実習報告 [小学校]（健康スポーツ学科 高橋 和希）	34
教育実習報告 [中学校]（健康スポーツ学科 田中 優麻）	36
教育実習報告 [中学校]（健康スポーツ学科 若井 潤）	38
教育実習報告 [高等学校]（健康スポーツ学科 川下 希恵）	40
教育実習報告 [高等学校]（健康スポーツ学科 庭山 蒼太）	42
養護実習報告（看護学科 遠藤 睦実）	44
養護実習報告（看護学科 吉田 柚理）	46

### 教員採用試験受験報告

教員採用試験受験報告（健康栄養学科 木戸浦 涼葉）	48
教員採用試験受験報告（健康栄養学科 久保田 涼香）	49
教員採用試験受験報告（健康スポーツ学科 山下 真緒）	51
教員採用試験受験報告（健康スポーツ学科 谷井 翔）	53
教員採用試験受験報告（看護学科卒業生 池上 悠）	55

### 活動報告

教員養成連絡協議会開催報告（吉田 重和・若月 弘久）	56
----------------------------	----

## 自己評価

### 教職課程アンケート集計結果

（森泉 哲也・久保 晃・佐藤 裕紀・杵渕 洋美・丸山 幸恵）	58
令和4年度教職課程自己点検評価報告書（新潟医療福祉大学）	62
令和4年度教職課程自己点検評価報告書（新潟医療福祉大学大学院）	77
教職支援センター運営委員会の総括 （吉田 重和・杵渕 洋美・渡辺 優奈・針谷 美智子・高田 大輔）	97

## 資料

教員養成理念（全学・健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科）	99
教員免許取得状況および教員就職状況	104
教職課程在籍者数	105
教職課程実習修了者数	105

教職課程活動記録 .....	106
教職課程科目担当者一覧 .....	107
教職支援センター利用状況 .....	116
教職課程アンケート .....	118

## 刊行物

教職支援センターニューズレター第10号 .....	121
『新潟医療福祉大学教職支援センター年報』刊行規程 .....	125
執筆担当者一覧、編集委員一覧 .....	126
編集後記 .....	127

# オランダにおける初任者研修

吉田 重和

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

## 〈概要〉

本稿では、TALIS2018を中心とした国際比較調査の結果を整理することで、オランダの初任者研修の現状を概観している。結果として、受講義務を伴う初任者研修を制度として持たないオランダであるが、教員の早期離職を防ぐために初任者研修に工夫が加えられていることや、初任者を含め研修に参加した教員の反応は概ね肯定的であることが確認された。また養成段階を含め、教員が求められている資質能力を獲得し成長するための方策として、メンタリングが積極的に活用されている可能性が示唆された。

## 〈キーワード〉

初任者研修 教員研修 オランダ メンタリング

### I. はじめに

教育制度の設計方針や子どもたちの学習成果について肯定的に評価されることが多いオランダであるが、近年、慢性的な教員不足に苦しんでおり、教員の質の低下が危惧されている。教員不足の要因は複合的であろうが、Helms-Lorenzetal.は、1980年代から指摘されている教職をめぐる様々な問題状況、すなわち生徒指導の困難さ、業務負担の重さ、支援の不十分さなどが、今日に至っても解決されていない点を問題視している<sup>1)</sup>。またオランダの初任教員の25%が5年以内に教職を離れている<sup>2)</sup>とされるが、先に示した問題状況は、教職の早期離職にも大きな影響があると考えられている。このような状況下において、初任者の質を担保すべき初任者研修がオランダにおいてどのように捉えられ、また展開されているかを確認することには、初任者研修の在り方を検討する上で、一定の意義があると思われる。

上記の問題意識を背景としながら、本稿ではまず、吉田<sup>3)</sup>及び吉田<sup>4)</sup>を下敷きとして、オランダの教員養成や教員採用、教員研修の概要を確認する。その後、「ITP研究カントリーレポート」や「TALIS (Teaching and Learning International Survey; 国際教員指導環境調査) 2018」などの報告書の内容に言及しながら、オランダの初任者研修の現状を整理する。そして最後に、オランダの教員の資質能力を支える方策として、養成・研修の双方において重視されているメンタリングに着目することで、オランダの初任者研修をめぐる状況を複眼的に捉えることとしたい。

### II. 養成、採用、研修の概要<sup>[1]</sup>

#### (1) オランダの教員養成

オランダにおいて初等教育及び前期中等教育段階の教員養成は、実践的な高等職業教育を提供している職業大学 (Hoger Beroeps-onderwijs) を中心に行われている。一方後期中等教育段階の教員養成は、原則として研究大学 (Wetenschappelijk Onderwijs) での学修後に、1年間の教員養成課程を追加履修する形式で展開されている。すべての教員養成課程は、フルタイム、パートタイム、実務経験と組み合わせたデュアルコースで履修することが可能である。なお教員養成のカリキュラムについては2021年度から大きく変更されており、教科が統合され、「評価に学生の学びや成長が見えるような工夫 (Feedback reflection) が取り入れられる<sup>5)</sup>」ようになっている。

上述したデュアルコースとして、近年、「専門職への横からの参入 (zij-instromer in het beroep)」と称される取り組みが、特に初等教育段階の教員養成において積極的に活用されている。これは、他職種従事者を教職へと導くための実践的な取り組みである。学歴や就業経験など一定の条件を満たした教職志望者は、この取り組みに協力している自治体や学校で実際に教員として勤務し給与を得ながら、教員養成機関や学校において専門性を高めるための講義や指導を受ける。取り組みに参加した教職志望者は2年以内に適性試験<sup>[2]</sup>に合格することが求められており、合格した場合、教員免許に代替する適性検査合格証 (getuigschrift bekwaamheids-



onderzoek) が授与され、教職としてのキャリアを正式に開始することができる。

2006年以降に開始されたこの取り組みは概ね好意的に捉えられており、たとえばこの取り組みの状況を調査・分析したInspectie van het Onderwijsは、教職志望者の熱意やこれまでの知識・経験を高く評価し、教員不足の解決策になるだけでなく、学校に新たな文化をもたらすと期待を示している<sup>6)</sup>。他方で事前に十分な情報が提供されていなかったり、個別の状況に対応できていなかったりする事実も確認されることから、教職志望者、学校、教員養成機関の間で明確な合意を得るなど、状況の改善に努めることが重要だと指摘している。

## (2) オランダの教員採用

オランダの教員は、学校を管轄する教育委員会や学校経営理事会と雇用関係を結んでいる。すべての教員に対し、勤務校の設置主体の別を問わず、勤務開始日、職位、給与体系、任期の有無、勤務時間数、職場の位置、給与などの諸条件が規定された雇用契約書が作成される<sup>7)</sup>。

教員不足の状況からも明らかのように、現在のオランダにおいて、教職は必ずしも人気がある職業ではない。坂田は、教員養成機関担当者への聞き取り調査から、「近年では就職対策も養成校に求められる大きな課題であり、このことは入学者の確保という点からも非常に重要となってきている<sup>8)</sup>」ことを示唆している。このことから、オランダにおいても、養成と採用の接続をどのように考え、また誰が主体となり対応していくかが課題となっている状況が窺える。

## (3) オランダの教員研修

オランダでは、教員個人に対し研修を受ける法的な義務は課されていない。また研修の内容や研修時の利用施設についても、法令により何らかの特定がなされることはない。他方で、教員を雇用する教育委員会や学校経営理事会に対しては、各種の法令により、教員に求められている資質能力を維持・向上させるための措置を講ずる義務が課されている。

オランダにおいては、前述したように、教員の質の低下が問題視されている現状がある。この点を踏まえオランダ政府は、教員研修の一環として、教員対象の進学助成制度を設け、教員が修士課程や博士課程に進学し、適切な資格とより高い専門性を身に付けることを奨励している。このようにして獲得さ

れた資格や専門性は、昇任や給与と連動して評価され、教員が研修を受けるインセンティブの一因となっている。また学校に対しては、教員それぞれの資格や能力を記録しておくことが義務付けられている。

以上の点を踏まえて整理すれば、オランダの教員研修は、教員個人としては自身の専門性向上とキャリアアップのために、また学校にとっては進学助成制度などを通じて教員の質を高めるために機能することが期待されている、といえる。

## Ⅲ. 初任者研修の状況

### (1) オランダにおける初任者研修の位置づけ

前節にて言及した通り、オランダでは教員個人に対し、研修を受ける法的な義務が課されていない。この点は初任者もしくは初任者を対象とした研修においても同様であるため、本項以下の記述内容については、各国における法定かつ／もしくは受講義務を伴う初任者研修とは法制度的な位置づけが異なることに留意されたい。

研修を受ける義務が課されていない一方で、初任者を含む教員に対しては、法令にて定められた7つの資質能力、すなわち対人関係能力 (Interpersoonlijke competenties)、教育指導能力 (Pedagogische competenties)、専門的・教育的能力 (Vakinhoudelijke en didactische competenties)、組織運営能力 (Organisatorische competenties)、同僚と協力する能力 (Competenties in het samenwerken met collega's)、保護者への対応能力 (Competenties in het samenwerken met de omgeving)、反省し向上する能力 (Competenties in reflecteren en ontwikkelen) を獲得することが求められている。教員として成長するにあたっては、キャリアの早期にこれらの資質能力を獲得することが重要であるが、初任者研修を公的な制度として持たないオランダにおいては、メンタリングを通じてこれらの資質能力が獲得され、成長が促されていると考えられる。初任者に対する支援として重要な位置づけにあるメンタリングについては、Ⅳにて整理することとしたい。

なお教員に対する研修の受講義務が存在しない一方で、雇用主である教育委員会や学校経営理事会に対しては、教員が資質能力を獲得・維持できるような措置を講じ、これを記録する義務が課されている。たとえば以下に示したように、初等教育法 (Wet op het Primair Onderwijs) では、教員の資

質能力の獲得及び維持の方法を学校計画 (schoolplan) に含めるよう規定することで、各学校の責任を明確に示している。

#### 初等教育法第12条「学校計画」

- 1 学校計画には、学校で行われる教育の質に関する方針が記載されており、いずれの場合も教育方針、職員方針、質保証システムなどが含まれている。(略)
- (略)
- 3 教員の人事に関する記述は、いかなる場合においても以下を含むものとする。
  - a. 教員の資質能力の獲得及び維持の方法。
  - b. 指導的地位にしめる女性の割合。
  - c. 教育方針の策定及び実施に貢献する職員に関する方策。
  - d. 教員の教育上・指導上の対応に関する方策。

#### (2) オランダの初任者研修の現状：「ITP研究 カントリーレポート」の内容を中心に

本項では、Brouwer et al.が整理した「TALIS初任教員養成 (Initial Teacher Preparation; ITP) 研究カントリーレポート (TALIS Initial Teacher Preparation Study Country Background Report: The Netherlands) の内容を中心に<sup>9)</sup>、オランダの初任者研修の現状を確認する。

初等教育段階の教員を対象とした初任者研修は、初任者の教育学的・教育方法的技能の向上、すなわち教育指導能力の向上を監督することに重点を置きながら、学校単位で実施されている。研修の内容だけでなく方法も各学校に一任されているが、有効性が確認された方法を用いることが求められており、近年では教室での授業等を観察する方法が多く使用されている。

初任者研修が地域単位で導入されている事例も一部にあるが、十分な制度化には至っていない。何らかの研修や支援を受けている初任者の割合は2014年以降微増しており、初等教育段階では、初任者の80%が研修に参加している。他方で雇用契約の別により支援の性質が異なることも報告されており、常勤契約の初任者のほうが、非常勤契約の初任者よりも研修を受けている者が多く、かつ受けている研修の質も高い傾向がある。

中等教育段階では、「初任者の支援 (begeleiding startende leraren)」プロジェクトが2014年から実施されている。このプロジェクトは初任者の早期離

職を食い止め、かつ教員としての資質能力の獲得を促すために立ち上げられたものであり、教育・文化・科学省が運営資金を拠出している。このプロジェクトにおいて、職業大学などの教員養成機関が研修プログラムを開発・実施し、パートナーシップ契約を結んだ学校における初任者研修を支援している。プログラムの中には、初任者の不安を低減することを目的としたセッションのほか、業務量削減の仕方、学校文化を高める活動、専門能力の向上、協働授業の準備、メンタリングを含む教室での観察と報告など、多岐にわたるセッションが含まれている。効果の持続性を確保するために、学校は、このプログラムを人事計画に組み込む必要がある。2016年現在、中等教育学校の42%がこのプロジェクトに参加している。

上記の全国的なプロジェクトに加えて、地域的なプロジェクトも複数存在する。たとえば「アムステルダム準教員ポジション (junior leraarschap Amsterdam)」というプロジェクトは、アムステルダム市内の学校に勤務する初等教育・中等教育の初任者を対象として、基礎能力・専門能力の向上を支援することを目指して運営されている。

#### (3) オランダの初任者研修に対する評価：「TALIS2018」の内容を中心に

本項では、OECDにより実施・報告された「TALIS2018」及び同調査におけるオランダの特徴をまとめた「TALIS2018カントリーノート (Results From TALIS2018 Country Note: Netherlands)<sup>10)</sup>」の内容から、前期中等教育段階の教員に焦点化し、オランダの初任者研修の内容と評価を見ていく。

まずオランダの教員集団の全体的な特徴を確認する。教職を第一志望にしていた教員は全体の53.4%に留まっており、TALIS参加国平均の68.9%より15ポイント以上低い数値となっている。一方で教職に就いた理由としては、TALIS参加国平均より低い数値であるものの、少なくとも80%の教員が子どもの成長に影響を与えたり、社会に貢献したりする機会があることを重要な動機として挙げている。この結果から、相対的に教職志望度が低い（あるいは低かった）教員が一定数いるものの、教職の意義や重要性を主たる動機として就業している教員の割合は少なくない、と推定される。

オランダの教員の平均年齢は42.9歳である。年代別にみると、50歳以上の教員が全教員の32.2%を占めているのに対し、30歳未満の教員が占める割合は

14.5%である。これらの数値はTALIS参加国平均（平均年齢43.4歳、50歳以上の教員の割合31.4%、30歳未満の教員の割合11.5%）と同様の水準であり、オランダでは今後10年以内に、教員の3人に1人程度が入れ替わることになる。また教員としての勤務年数の平均は11.1年であり、TALIS参加国平均（10.2年）に比べやや長いものの、その差は1年以内である。他方で教職以外の仕事に勤務した年数は4.8年であり、TALIS参加国平均の3.1年よりも1.5年以上長くなっている。この結果から、オランダでは、他職種を経て教職に就いた教員の数が相対的に多いことがわかる。

オランダでは「(新たな赴任校において)研修がない<sup>[3]</sup>」と回答した教員が全体の0.9%、「初めて教職に就いた者のみに公式な研修がある」と回答した教員が全体の5.0%に留まっている。同内容の質問に対するTALIS参加国平均の回答はそれぞれ13.4%、19.8%であることから、「ほぼすべての教員が新たな赴任校で何らかの研修を受けているが、初任者のみを対象とした公式な初任者研修は一般的ではない」状況にあるといえる。

上述の状況は、別の回答結果からも確認できる。オランダの教員にとって、定期的に研修に参加することが一般的であるのは、調査前の1年間に少なくとも1回以上研修に参加した教員が98.2%に上っていることから明らかである（TALIS参加国平均94.4%）。通算勤務年数5年以下の教員の参加率も97.2%（TALIS参加国平均93.4%）であることから、初任者もそのほとんどが研修に参加できている状況だと考えられる。また教員養成機関等により用意された対面式の講座やセミナーへ参加する研修はどの国でもよくみられるが、オランダでも88.5%の教員がこの形態の研修に参加している。また約半数にあ

たる49.6%の教員が、同僚の観察・助言やコーチング活動に基づく研修に参加している。

オランダの教員の82.3%が、自らが参加した研修を肯定的に評価している。この割合はTALIS参加諸国平均（82.5%）と同程度であるが、評価するポイントと通算勤務年数の多寡に着目したとき、表1に示した5つのポイントに特徴がみられる。すなわち、TALIS参加国平均との比較でみたとき、初任者を含む通算勤務年数5年以下のオランダの教員にとって、参加した研修は「個人的な成長のニーズに合っており、長期間にわたり実施される。一方で、研修の構成が一貫しておらず、共同学習やフォローアップ活動の機会に乏しい」と整理することができる。また研修に肯定的な評価を下しているオランダの教員は、自己効力感や仕事への満足度が高い傾向にあることから、研修の評価と業務への取り組みには正の相関があると考えられる。

表2は、参加した研修に含まれていた内容について、通算勤務年数5年以下のオランダの教員の回答が特徴的な箇所を整理したものである。表2から明らかのように、通算勤務年数5年以下のオランダの教員は、生徒の行動や学級経営などについてTALIS参加国平均より多く研修で接している一方で、生徒の評価や指導用ICT（情報通信技術）技能、保護者との協力などについては、接している頻度が相対的に少なくなっている。

#### IV. 初任者支援として機能するメンタリング

オランダを含め、質の高い教員をいかに養成し確保するかが各国の教育政策における重要事項であり続ける中で、教員の力量形成におけるメンタリング

表1 参加した研修に対する評価ポイント

評価ポイント	オランダ		TALIS 参加国平均	
	通算勤務 5年以下	通算勤務 5年以上	通算勤務 5年以下	通算勤務 5年以上
	個人的な成長のニーズに合っていた	<b>90.4%</b>	90.7%	79.3%
研修の構成が一貫していた	<b>53.9%</b>	55.3%	77.1%	77.8%
共同学習の機会を与えられた	<b>69.4%</b>	61.8%	76.3%	77.5%
フォローアップ活動があった	<b>44.9%</b>	40.2%	54.9%	57.2%
長期間にわたって実施された	<b>61.5%</b>	51.7%	42.3%	42.0%

(出所：OECDウェブサイトより筆者作成)

表2 参加した研修に含まれていた内容

研修に含まれていた内容	オランダ		TALIS 参加国平均	
	通算勤務	通算勤務	通算勤務	通算勤務
	5年以下	5年以上	5年以下	5年以上
生徒の評価方法	<b>58.6%</b>	51.7%	69.0%	71.3%
指導用の ICT (情報通信技術) 技能	<b>52.5%</b>	62.6%	61.0%	63.4%
生徒の行動と学級経営	<b>67.5%</b>	56.1%	59.5%	55.9%
生徒の評価の分析と利用	<b>27.2%</b>	27.8%	53.2%	55.4%
教員と保護者間の協力	<b>39.4%</b>	27.4%	43.8%	43.5%

(出所：OECDウェブサイトより筆者作成)

(mentoring) の重要性が国際的に認識されている。TALIS2018では、メンタリングを「経験のある教員が経験の少ない教員を支援する校内の仕組みのこと<sup>11)</sup>」と定義しており、指導教員（メンター）がつくことにより、初任者（メンティ）がキャリアの初期段階を安定的に過ごせると評価している。

同様の効果は養成段階においても認められている。オランダでは、実習生が行為と省察を繰り返し自らの力量を高めていく過程において、メンターによるメンタリングの存在が前提となっている<sup>12)</sup>。メンタリングでは、教職の専門的な文脈に即し提起された「ALACTモデル」に整理されたような行為や省察が行われており、螺旋的・重層的に力量形成がなされると理解されている。

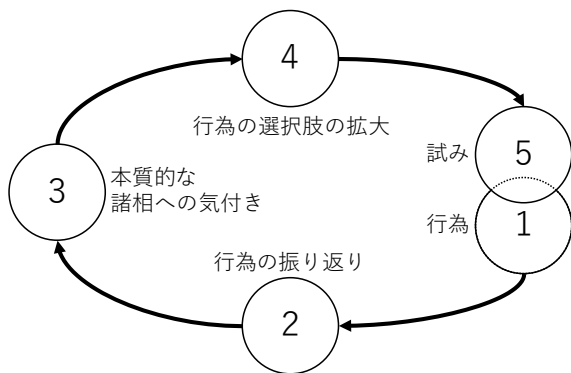


図1 ALACTモデル  
(コルトハーヘン 2010 : 54)

ALACTモデルは経験を基盤とした教員の学習モデルであり、学習時に発生するフェーズが具体的に示されている。ALACTモデルにおいて、教員の学習フェーズは「1. 行為」「2. 行為の振り返り」「3. 本質的な諸相への気づき」「4. 行為の選択肢の拡大」「5. 試み」に区分される。このうちメン

ターの積極的な関与が期待されるのは「2. 行為の振り返り」から「4. 行為の選択肢の拡大」までである。オランダにおいては、養成・研修を通じた教員としてのキャリアの最初期の段階、すなわち実習生や初任教員の時期において、メンタリングを通じた成長が一つのかたちとして期待されているといえる。

メンタリング研究の主導者であるKramがメンタリングを「先輩や上司であるメンターと経験の浅いメンティとの垂直的關係間に結ばれる発達支援関係<sup>13)</sup>」と整理して以降、メンティのキャリアや心理・社会的側面における有用性は、職種や分野・領域の枠を超えて幅広く認められている。オランダの教員養成・研修におけるメンターの介入に関し実証的な研究をしたJaspers et alも、メンターが、個人の価値観と経験に基づきメンティの授業等に意図的に強く介入していることを明らかにしたうえで、介入時には、メンティと児童生徒の双方に役立つ内容を明示的に強調することが、メンティの成長を促進する可能性があることを示している<sup>14)</sup>。

表3及び表4は、TALIS2018において示されたオランダの教員のメンタリングをめぐる状況である。表3からは、通算勤務年数が5年以下の教員の4割にメンターがついていたり、通算勤務年数が5年以上の教員の4人に1人が他の教員のメンターを務めていたりするなど、学校でのメンタリングが一般的であることがわかる。また表4に示されている校長の評価ポイントからは、オランダの教員に対するメンタリングでは、教員の知識を増やしたり、教員同士の連携を深めたりするというよりも、メンティの指導力全般の改善が期待されている状況が窺える。

表3 メンタリングへの参加状況

参加状況	オランダ		TALIS 参加国平均	
	通算勤務 5年以下	通算勤務 5年以上	通算勤務 5年以下	通算勤務 5年以上
支援してくれるメンターがいる	40.8%	7.1%	25.1%	8.1%
他の教員のメンターを務めている	11.2%	24.6%	7.6%	14.8%

(出所：OECDウェブサイトより筆者作成)

表4 メンタリングに対する関する校長の評価ポイント

評価ポイント	オランダ	TALIS 参加国平均
教員の指導力の改善	82.7%	70.2%
教員の職業上の自覚の強化	54.5%	59.8%
教員同士の連携の改善	53.6%	66.7%
指導力の少ない教員への支援	73.6%	77.9%
教員の主な担当教科等に関する知識の伸長	20.9%	48.6%
生徒の一般的な学習成果の改善	57.3%	59.9%

(出所：OECDウェブサイトより筆者作成)

## V. おわりに

本稿では、TALIS2018を中心とした国際比較調査の結果を整理することで、オランダの初任者研修の現状を概観した。結果として、受講義務を伴うような初任者研修を制度として持たないオランダであるが、教員の早期離職を防ぐために初任者研修に工夫が加えられていることや、初任者を含め研修に参加した教員の反応は概ね肯定的であることが確認された。また養成段階を含め、教員が求められている資質能力を獲得し成長するための方策として、メンタリングが積極的に活用されている可能性が示唆された。これらの現況や可能性については、今後現地調査を実施するなどして、その適否や程度を明らかにする必要があると思われる。

## VI. 謝辞

本稿の初出は、吉田重和：オランダの初任者研修、初任者研修の育成と支援に関する国際比較研究（研究代表者 長島啓記）令和元年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（B）課題番号19H01644）研究成果報告書，55-64，2023です。転載をご快諾いただきました研究代表者 長島啓記先生に心より御礼を申し上げます。

## 引用文献

- 1) Helms-Lorenz M, van de Grift W, & Maulana R.: Longitudinal effects of induction on teaching skills and attrition rates of beginning teachers, *School Effectiveness and School Improvement*, 27 (2): 178-204, 2016.
- 2) CentERdata.: De toekomstige arbeidsmarkt voor onderwijspersoneel 2013-2025. Tilburg: Tilburg Universiteit, 2013.
- 3) 吉田重和：オランダの教員研修，平成28年度～平成30年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究課題番号16K13537）中間報告書 21世紀型スキルに対応した教員研修の在り方に関する国際比較研究（研究代表者 長島啓記），39-50，2018.
- 4) 吉田重和：オランダの教員研修動向—制度改革と研修プログラムに着目して，平成28年度～平成30年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究課題番号16K13537）研究成果報告書 21世紀型スキルに対応した教員研修の在り方に関する国際比較研究（研究代表者 長島啓記），49-58，2019.
- 5) 谷哲弥：オランダにおける教員養成の取り組み—オランダ教育視察から，大谷大学真宗総合研

- 究所研究紀要, 39 : 300, 2021.
- 6) Inspectie van het Onderwijs: Zij-Instroom in het Beroep van Leraar in het Primair Onderwijs. Utrecht: Inspectie van het Onderwijs, 2021.
  - 7) 市川昭午：オランダ・ドイツの教育はどうなっているか，国民教育文化総合研究所，2012年度オランダ・ドイツ調査報告，22，2012.
  - 8) 坂田哲人：オランダの教員養成の取り組みと地域学校連合の動向が教員採用に与える影響，東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター，教員養成と採用の接続に関する国際比較研究プロジェクト報告書，23，2014.
  - 9) Brouwer P, Klaijnsen A, Bijman D. et al.: OECD TALIS Initial Teacher Preparation Study. Country Back-ground Report: The Netherlands, 2016.
  - 10) OECD: Results From TALIS2018: Country Note, Netherlands, 2019.
  - 11) 国立教育政策研究所：教員環境の国際比較 OECD国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018報告書—学び続ける教員と校長，ぎょうせい，東京，192，2019.
  - 12) コルトハーヘン（武田信子監訳）：教師教育学—理論と実践をつなぐアリスティック・アプローチ，学文社，東京，2010.
  - 13) Kram K, E.: Mentoring at work, Developmental relationship in organizational life. Glenview, IL: Scott Foresman, 1985.
  - 14) Jaspers W, M, Prins, F, Meijer P, C. et. al.: Mentor teachers' intended intervening during student teachers' lessons, A vignette study in Dutch primary education, Teaching and Teacher Education, 117: 103342, 2022.
  - 15) 国立教育政策研究所：前掲書，183，2019.

#### 引用ウェブサイト

OECD, Retrieved February 19, 2023, from <https://www.oecd-ilibrary.org/sites/fa24224den/index.html?itemId=/content/component/fa24224d-en>.

#### 註

- [1] 本節の内容は、吉田<sup>3)</sup>及び吉田<sup>4)</sup>の内容を再構成し、大幅に加筆したものである。
- [2] 「初等教育及び中等教育において横から参入した教員に関する決定 (Besluit zij-instroom

leraren primair en voortgezet onderwijs)」第5条において、教員として獲得することが求められている7つの資質能力(2.(1)参照)が検査時の指標として示されている。

- [3] TALIS2018において初任者研修は、公式・非公式を問わず「初任者に対する教職への導入を支援したり、又は経験がある教員に対する新しい赴任校への導入を支援したりする研修<sup>15)</sup>」と定義されている。

# 保幼小教育の円滑な接続と養護教諭を目指す学生の学びに関する取り組み —保育園への保健指導ボランティア活動を通して—

丸山 幸恵

新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科

## 〈概要〉

養護教諭はその設置基準が学校教育法により規定され、主に小・中学校、高等学校、幼稚園に勤務している。養護する対象となる子どもの成長・発達は連続性の中で育まれるが、個人差も大きい。養護教諭の勤務がない保育園での保健指導ボランティアを計画し、子どもの成長・発達への理解と幼児教育と小学校教育の接続への一助となり得る学生ボランティアへの取り組みについて報告する。

## 〈キーワード〉

連携教育 保健指導 ボランティア活動

### I. はじめに

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）のより一層の具現化を目指し、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に取り組むことが求められている<sup>1)</sup>。またこのことは、「小1プロブレム」の課題への対応を図る上で重要な視点であるとされる<sup>2)</sup>。

養護教諭の職務は「児童生徒の養護をつかさどる」である。子どもの成長・発達は常に連続性の中にあり、未就学児～小学校入学段階においても途切れることはない。よってこの期の子ども理解を深めるためにも保育園児への保健指導を経験することは、養護教諭を目指す学生にとって有用な機会になる。また、全国的に保育士の数が不足とされる保育園における学生のボランティア活動がお互いに有効な取り組みに発展し得るのではないかと考えた。

本報告では、養護教諭を目指す学生を対象にした保育園における保健指導ボランティアの活動について報告する。

### II. 活動の概要

#### 1. 参加した学生

教職課程（養護教諭）在籍する3年次の希望者6名。活動内容を伝え、参加意思を示した学生。

#### 2. 活動期間

2022年度前期。

### 3. 目的

保育園での保健指導を実施に向けて指導内容の検討、指導案の作成、教材の工夫・作成をグループで行い、ボランティア活動の実施を目指す。

### 4. 実施対象保育園

新潟市内の保育園2園。

### III. 方法

#### 1. 保育園への訪問

未就学児への理解を深めることを目的として参加者6名と担当教員で保育園での観察を実施する。観察後に、フリートークで感想と保健指導にあたっての留意や工夫したい点を挙げ、活動に反映していく。

#### 2. 保健指導テーマの設定

参加学生6名を3名ずつの2グループに編成した。メンバー編成は学生間の話し合いによって行う。指導内容については、グループごとに話し合いにより決定した。15分間の保健指導とした。

#### 3. 未就学児の成長・発達段階の理解

事前自己学習を行った後、学習内容を共有する機会を持った。また、保育園の見学の後、コース担当教員より補足説明と指導を行った。

#### 4. 保健指導案・教材の作成

各グループで保健指導案と教材の検討、作成を行った。担当教員が日程調整を行い、90分×3回を設定した。その他、グループごとに必要に応じて自主的に時間を設けるよう指示した。

#### 5. 模擬指導の実施・検討会

指導者役と園児役をグループで分担し、互いに模擬指導を実施した。模擬指導の後、指導者・観察者・園児役の学生で検討会を行った。

#### 6. 活動振り返りシートによる振り返り

シートへの記入を行い個別に振り返りを行った。

#### 7. 保育園での保健指導

(新型コロナウイルス感染症対策のため実施時期が延期となった。)

### IV. 結果

#### 1. 保育園への訪問後の感想 (図1・2)

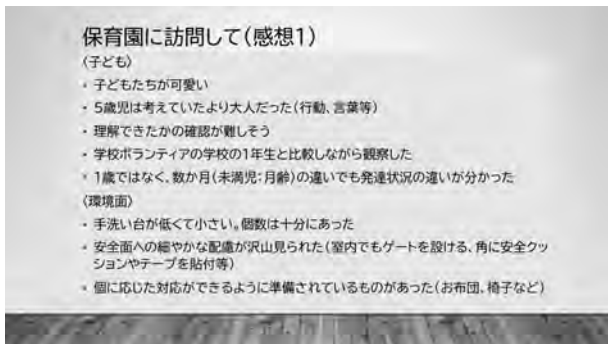


図1：訪問後の感想1

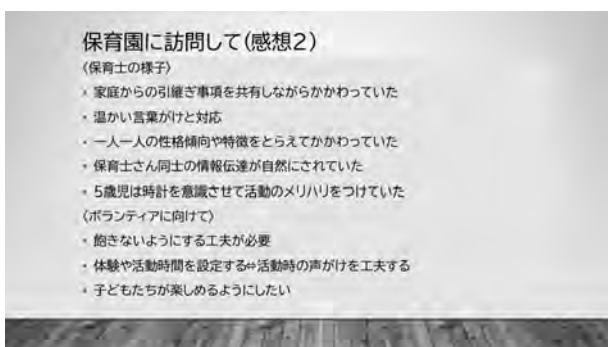


図2：訪問後の感想2

図1・2に主な感想を示した。感想を基にしてさらに話し合う中で、「保育園児にインパクトを与えるためにマスコットキャラクターを作成し使用したい」「参加したごほうびを手作りで作成したい」「使

用する言葉、話す時のスピードや量は特に子どもたちの理解に沿うように工夫する」「動きは大きく伝わりやすくしていく」等の意見が挙げられた。

- ・作成したマスコットキャラクター (図3)



図3：手作りのパペット

#### 2. 指導テーマの設定

コロナ禍にあり感染予防対策の観点と小学校入学後にも継続される保健指導という観点から学生が意図して設定した。

Aグループ：「むし歯予防のためのブラッシング」

Bグループ：「効果的な手洗いの仕方」となった。

#### 3. 未就学児の成長・発達段階の理解

担当教員から乳児期以降未就学児までの成長・発達段階とその特徴、周囲や家族等のかかわり・関係性、幼児教育の様子についての説明の時間を設けた。その後、学生間の意見交流を図った。学生から小児看護領域の既習事項や領域別実習での経験、学校ボランティアの際の小学校の子どもの様子等を交えながら話す姿が見られた。その他、「学校ボランティアの時と比較すると、保育園での子どもを観察する注意点が違った。指導することを意識したからだと思う」「就学児健康診断を受ける5歳児への対応をイメージした」等の言葉が聞かれた。

#### 4. 保健指導案・教材の作成

保健指導案の概要は以下に示す。また、教材については、保育園への見学の経験から手作りで温かみを感じられること、子どもたちが視覚的に効果を実感できることに重点を置き準備していた。



Aグループ：「めざせ！はみがきめいじん」

〈目的〉

・ブラッシング指導により、①歯や口の役割を知り、歯の大切さに気付く、②むし歯の予防法を知る、③歯みがきの楽しさを感じ習慣化を図る。

〈学習活動〉

- ・お口の中をみてみよう
- ・なぜ、むしばはできるのか？
- ・しょくじのときのしせいとだえき（だえきのかつやく）
- ・はみがきをしてみよう  
（1ほんのはをぴかぴかにしてみよう）
- ・はみがきはまいにちつづけようね

〈教材・準備するもの〉

- ・鏡
- ・歯ブラシ
- ・ブラッシング指導用人形と歯ブラシ
- ・おやつと砂糖の量
- ・ブラッシング用イラスト
- ・ごほうびメダル



図4：模擬指導の様子

Bグループ：「てあらいですっきり」

〈目的〉

・正しい手の洗い方を知る  
（汚れが残りやすい部分を知り、手洗いを丁寧に行う意識を持つことができる）

・手洗いが必要な場面が分かる

〈学習活動〉

- ・ブラックライトでなにがみえるかな？てをみてみよう  
\*（お芝居をしながら恐怖感を持たせないように配慮）
- ・よごれがのこりやすいばしょはどこかな
- ・しっかりとてをあらうばめんはいつでしょう
- ・てあらいをしてみよう  
たのしくあらって、ぴかぴかになってなるう
- ・きれいなてはきもちもすっきり

〈教材・準備するもの〉

- ・手洗い指導用ブラックライト
- ・タオル
- ・ハンドソープ
- ・汚れが残りやすい部分のイラスト
- ・生活場面のイラスト
- ・手洗い絵本（手作りで作成）



図5：手洗い実験（ブラックライト）の様子

### 5. 模擬指導の実施・検討会

実際にグループで1回ずつ模擬指導を行った。実施後の検討会では、子ども役の学生からの意見やアドバイスも挙げられた。その内容を生かしながら使う言葉や資料の細部等まで修正する姿が見られた。（図4・図5）

### 6. 振り返りシートへの記述

振り返りシートで個別に活動を省察する場面をもった。シートへの記入は、（1）この活動の目標、（2）特に配慮したこと・工夫したこと、（3）保健指導を行う際に必要と感じた知識や情報、スキル、（4）ボランティア活動をグループで実施することについて感じたこと、（5）保育園との連携の視点・連携するために必要だと感じていることの5点とした。記述から抜粋したものを挙げる。

（1）について

- ・子どもの発達段階に合わせた目標・内容とする
- ・実践力につながるよう工夫する
- ・子どもに伝わる言葉や資料を選定する
- ・目標を明確にするために話し合いを多く行う
- ・健康行動を継続する気持ちを持たせる、行動化
- ・子どもが体に興味を持てるような指導を行う

（2）について

- ・子どもの興味・関心を高める工夫（キャラクターの設定、大きなイラストを活用等）
- ・指導用資料を絵本形式にして楽しさを重視した
- ・「なぜ」「どうして」子どもが疑問や好奇心を持つようにする
- ・ブラックライトなどで子どもが恐怖を抱かないように配慮した

(3) について

- ・子どもの視点から物事を考えること
- ・発達段階に応じた教材の工夫
- ・活動の客観的評価
- ・分かりやすく適切に伝えること
- ・発想力や表現力
- ・子どもとのコミュニケーションスキル
- ・情報収集力（対象の状況や発達段階・個性等）

(4) について

- ・グループで考えると視点が広がる、指導方法の工夫が図れる、アイデアが共有できる
- ・準備が分担でき、負担になりすぎない
- ・話し合いから子どもへの声かけを学べた
- ・お互いに得意なことを生かし不得意はカバー

(5) について

- ・保育士との情報共有（子どもの様子、配慮が必要な子ども・事項、子どもの実態）等
- ・保育園の1日の流れを把握しておく
- ・打合せの重要性、確認したいことは予め整理しておく
- ・事前訪問や訪問回数を増し子どもに慣れてもらう、保育士ともコミュニケーションを図る
- ・子どもと一緒に遊ぶ
- ・保育士が健康課題と感じていることを聞く
- ・保健指導以外のボランティアも行う

## V. まとめと今後の課題

### 1. まとめ

学生の取り組みの様子から今回の活動からの気づきを以下にまとめる。

- ・少人数グループでの取り組みにより一人一人が主体的に取り組む様子が見られた。
- ・「保健指導を行う」という明確な活動目標があったため、学生は取り組みやすさを感じていた。
- ・就学前の子どもの成長・発達、健康課題を具体的に考え、意見を交流していた。また、幼児教育の現状と背景にも目を向けていた。
- ・これまでの看護領域や教職・養護教諭・学校保健の学びを生かしながら子ども理解に努めていた。
- ・学生自身が活動を楽しむ姿が見られた。
- ・ボランティア活動に対して取り組みやすさを感じていた。（自分たちにできることを提供する、子どもに接することができる、保育園で活動できる等々）

### 2. 今後の課題

今後の課題として2点を以下に挙げる。

- ・通年の保育園へのボランティア活動の設定は困難である。回数や実施時期、学年等を考慮しながら年間の中での位置付けを図りたい。
- ・今回の参加者は全員3年次までに学校ボランティア活動の経験したことがある学生であった。学校ボランティア活動の経験が他のボランティア活動への参加意識にもよい影響を与えていることが考えられる。低学年からの学校ボランティア活動への参加を今後も促し参加に繋げていく。

## VI. まとめ

養護教諭の設置は学校教育法で規定されている。今回は養護教諭の設置規定がない保育園での保健指導ボランティア活動を計画し取り組んだ。この活動を通して学生が未就学児の成長・発達に目を向ける機会となり、さらに学びを深めたいという意欲的な面も見られた。参加者は3年次の学生であったため、これまでの保健教育の学びを活動に生かせ、活動もスムーズであったと考える。

「小1プロブレム」への心身の健康面に養護教諭が積極的に対応していくために、幼児教育と学校教育の接続を学生が体験的に学んでいく場の確保も有益であろうと考えられる。

今後も工夫改善を図りながら取り組みを進めたい。

### 引用参考文献

- 1) 文部科学省、中央教育審議会初等中等教育分科会・幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会、学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～、[https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_youji-000028085\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_youji-000028085_2.pdf) (2023年7月24日アクセス), 2023.
- 2) 大前暁政：小1プロブレムに対応する就学前教育と小学校教育の連携に関する基礎的研究，人間学研究，15，19-32，2015.

## 令和新時代の私立大学教職課程の教員養成の在り方

### —全国私立大学教職課程協会教職課程運営に関する研究交流集会資料を基に—

脇野 哲郎

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

#### 〈概要〉

今後求められる私立大学教職課程の教育養成について整理し、それをふまえて本学教職課程の在り方を明らかにすることを試みた。

その結果、「理論と実践の往還をより一層充実させるための教育実習の見直しや学校体験活動の単位化」「本学教職課程の特色である3学科合同授業の充実」「特色ある教員育成に向けた副免取得可能な教育課程の検討」などが特に重要である。

#### 〈キーワード〉

令和の日本型学校教育 求められる教師の姿 理論と実践の往還 私立大学教職課程の特色

#### I. はじめに

「令和の日本型学校教育」というキーワードに象徴されるように、今、改めて学校教育の変革が求められている。加えて、教員採用試験の倍率が低下するなど教師の質を高める、育成する面の課題もより多くなっている。

このような状況の中、私立大学教職課程の教員養成は今後どのように進めていくべきなのかを整理したいと考えた。そこで、一つの手がかりとして2023年度全国私立大学教職課程協会教職課程運営に関する研究交流集会(2023.5.24)での資料と協議を基に、今後の私立大学教職課程の教員養成の在り方を整理した。

最後に、整理した内容をふまえて本学教職課程の教員養成の在り方をまとめることを試みた。

#### II. 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について

「令和の日本型学校教育の」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について(令和3年12月中央教育審議会諮問)の答申について文部科学省総合教育政策局の後藤教至 教育人材政策課長の講演の内容を整理した。

アンダーラインの箇所は資料の中で特に重要ということで強調されている部分である。

##### 1. 概要

・ 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実さ

せる → 主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

つまり、個別最適な学びと協働的な学びが一体となり、どちらも充実することを求めている。それが、主体的・対話的で深い学びにつながる。しかし、これまでも教師はこのどちらも大切にしようとして取り組んできている。したがって、改めてその重要性を強調していると言える。タブレットに代表されるICTの活用が以前よりも加速度的に整備されたこともあり、よりこの両立が実現しやすい環境になった、実現させてほしいという期待もあると考える。

・ 特に重要となる「求められる教師の姿」

◇ 子供一人一人の学びを最大限に引き出し主体的な学びを支援する伴走者

◇ 多様な人材の確保と質の高い教職員集団の育成

◇ 教師が創造的で魅力ある仕事であることが再認識されること

上記の3点から、伴走者であるという意識と能力を高めること、多様な人材を採用と研修の充実による教職員の力量向上、教師の仕事の創造的な部分がクローズアップされることが重要であるということになる。特に3つ目の教師の創造的な部分が注目されるためには、教師の働き方の改革も強く関連してくる。現職の人の実感なくして外へ

の発信の効果は期待できないからである。しかし、現実はなかなか厳しく、教育実習であまりに忙しい先生方の姿を見て、教師になることをためらう学生が少なくないのも事実である。

- ・上記の2点をふまえて、教師の養成・採用・研修等の在り方を次の5点を提示している。
  - ①求められる教師の資質能力を再定義する。
  - ②優れた人材確保のための採用の在り方、強みを伸ばす育成・キャリアパス・管理職の在り方を見直す。
  - ③教員免許・教員免許更新制の見直しをする。
  - ④教員養成だいがく・学部、教職大学院の機能強化・高度化を進める。
  - ⑤教師を支える環境整備、教師の学び等の振り返りを支援する仕組みを構築する。

本学を含め、多くの私立大学は特に①をふまえ、②の優れた人材確保のためにどれだけ特色のある教育課程が編成でき、専門性の高い学生を育成できるかが重要となる。

## 2. 新たな教師の学びの姿の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の育成のポイント

- ・子供と社会の変化とこれまでの取組
 

子供と社会の変化は、子供の多様化、教師の長時間勤務、高校の「情報Ⅰ」の開始、臨任等の教師不足などである。それを受けてこれまで取り組んできたことは、新学習指導要領の実施、教職員定数の改善、GIGAスクール、学校の働き方改革などである。
- ・教員の養成・採用・研修の制度及び現状
 

養成：国立教員養成大学の教員就職率は66.9%、小学校の教員養成課程を有する私立大学は10年で3割増

採用：採用倍率低下、新卒受験者数は全体的には減少（小学校のみ微増）、年齢構成の偏りの地域差、学校種差は大

免許：普通免許状は中高で減少、小学校で横ばい、特別支援学校で増加

研修：自治体ごとの教員育成指標に基づく体系的な教員研修計画の策定、各自治体と関係大学等で編成される協議会による検討

国立教員養成大学の教員就職率は今後も低下傾向

になると予想される。本学の存在価値を上げるチャンスにはなる。とりあえず免許だけ取得するという学生も減少傾向になると予想される。

教師不足、教員採用試験倍率低下などに対応するため、より一層、文部科学省はもちろん、各自治体と大学が連携していく必要がある。本学が中心となり、新潟県内私立大学教職課程協議会を2020年からスタートし、新潟県及び新潟市の教育委員会と隔年で協議会を開催して3年目となっている。新潟大学等の国公立大学も含めて今後どのような連携が行われていくのか注視するとともに、本学教職課程として実際にどのような連携が可能なのか検討していく必要がある。

## 3. 改革の方向性と具体策

3つの改革の方向性は次の3点である。

- ①新たな教師の学びの姿の実現
  - ・教師自身の学び（研修観）の転換
  - ・「理論と実践の往還」の実現
- ②多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成
  - ・教員一人一人の専門性向上と、多様な専門性・背景を有する人材の組織内への取り込み
  - ・心理的安全性の確保
  - ・「学校の働き方改革」の推進
- ③教職志望者
  - ・多様な教職志望者に対応した教職課程の柔軟化
  - ・入職後のライフサイクルの変化を踏まえた採用・配置等の工夫

上記の方向性を受けた具体策は次の5点である。

1. 教師に求められる資質能力の見直し
  - ・①教職に必要な素養②学習指導③生徒指導④特別支援⑤ICT、情報・教育データの活用
  - ・理論と実践の往還を重視した教職課程への転換＝「教育実習」の柔軟化、学校体験活動の積極活用など
2. 多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成
  - ・強みや専門性（データ活用、STEAM教育、障害児発達支援、日本語指導、心理、福祉、社会教育、語学力、グローバル感覚）を身に付ける活動との両立のための、特例的な教職課程の開設

- ・ 小学校専科指導に対応した特例的な教職課程の開設
- ・ 教員採用の在り方検討（早期化・複線化など）
- ・ 多様な専門性を有する人材の積極的な取り込み（特別免許状の運用見直し、教員資格認定試験の拡充）
- 3. 教員免許の在り方
  - ・ 改正教育公務員特例法による「新たな教師の学びの姿」の策定
  - ・ 教師の資質向上に関する大臣指針の改正等
  - ・ 小学校教諭と中学校教諭の両免併有の促進
- 4. 教員養成大学・学部、教職大学院の在り方
  - ・ 学部と大学院との連携・接続の強化・実質化
  - ・ 教育委員会との連携強化、人材育成の好循環
  - ・ 教員就職率の向上、組織体制の見直し
- 5. 教職を支える環境整備
  - ・ 研修高度化、学びの振り返りを支援する仕組みの構築
  - ・ 教師を支える環境整備（失効・休眠免許保持者の円滑な入職の促進、働き方改革の一層の推進）

学校体験活動を活用した教育実習は理論と実践の往還という点からも現状の4年生の教育実習は何等かの見直しが必要である。これまでのボランティア活動でカバーしていた面があるが、正式に授業とし、単位化することの価値は教員養成の面、学生にとっても大きい。

このことは教員の働き方改革とも関連する。受け入れ先の実習校に配慮しつつ良好な関係を継続するための工夫も求められている。

#### 4. 理論と実践の往還を重視した教育課程への転換

前述の内容の中で、特に重点的に説明があった内容を整理した。さらに、本学に関係する方策として次の2点がある。

- ・ 「教育実習」等の在り方の見直し（履修形式の柔軟化 等）
- ・ 「学校体験活動」積極的な活用（学習指導員、放課後児童クラブやNPO等で課題を抱える子供たちへの支援等も含む）

この方策が必要な主な理由として次の2つを挙げている。

- ①教師としての総合的な資質能力を高めるための体系的な教職課程の編成が求められる。そのためには、教職課程のそれぞれの理論中心の授業科目と、現場での体験や実習における実践的な科目を相互に往還し、学びを深めていく「理論と実践を往還」の視点を十分に踏まえた教職課程になっているか、自己点検・評価のプロセスも活用しながら確認する必要があるからである。
- ②学生の多様化や民間企業等の採用活動の早期化等の理由により、教育実習について、教職課程の終盤に長期間まとめて履修することが困難になっている。こうした状況を踏まえて、これまでのように一律に教職課程の終盤に教育実習を履修する形式を改め、取得を目指す免許状の学校種の違い等も考慮しつつ、それぞれの学生の状況に応じた柔軟な履修形式が認められるべきである。

学習指導員、放課後児童クラブなどは教育実習と比べれば学生にとっては取り組みやすいと考えられる。やり方によって学びは十分に得られる。現場での体験活動を早い段階から積極的に実施していくこととその活動と理論を中心とした授業を強く関連付けていく工夫が求められると考える。つまり、理論と実践がつながるように往還する仕組みが重視されている。

教育実習の柔軟化の例としては次のようなものを挙げている。

- ・ 短期集中型に加え、通年で決まった曜日に実施する教育実習、早い段階から「学校体験活動」を経験し、教育実習の一部と代替する方法がある。
- ・ 教育実習と学校体験活動を合わせて4単位とする（学校体験活動は2単位まで代替可能）。上記の例は、現行制度上で可能であり、各大学の創意工夫により、教職科目と学校現場の教育実践を相互に関連付けながら学びを深める取組を進めることが重要である。

以上のことから、現在、本学で行っている4年次に集中して行う教育実習は見直しを検討する必要がある。

特に、教員採用試験を受験する学生は3年生までに教育実習または「学校体験活動」を行う必要があ

る。現状では、教員採用試験を目指す学生の多くは学習支援ボランティアに行っている。新潟市内、新潟県内の受け入れの実績もここ5年間で着実に積み上げている。しかし、単位化するまでには至っていない。今後は、現在行っている学習支援ボランティアの単位化などを検討する必要がある。それにより、教職科目と教育実習が相互に関連付けながら学びを深める教職課程に変えていくことが可能となると考える。

### 5. 学習指導員等の配置（文部科学省）

令和5年度の文部科学省の学力向上を目的とした学校教育活動支援の事業である。

予算額：36億円 人数：11,000人

この事業は、児童一人一人にあったきめ細かな対応を実現するため、教師や学校教育活動を支援する人材の配置を支援する。また、教職に関心のある学生の積極的な活用を促進することで、教職への意欲を高めることを目的としている。

既に新潟市はこの事業に取り組んでおり、本学も「学習支援ボランティア」という名称で教職支援センター養成部会が担当し、新潟市内の小・中学校と希望する学生とをつなぐ役割を担い、着実に成果を上げている。前述したように、今後はこれまでの取組を生かし、学習支援ボランティア活動を生かし、「学校体験活動」の単位化につなげていくことが実現可能な方策の一つとして考えられる。

### 6. 教職課程における多様な専門性を有する教師の育成と優れた人材を確保できる教員採用等の在り方の検討

- ・強みや専門性（データ活用、STEAM教育、障害児発達支援、日本語指導、心理、福祉、社会教育、語学力、グローバル感覚など）を身に付ける活動との両立のため、4年制大学において最短2年間で必要資格が得られる教職課程の特例的な開設・履修モデルを設定する。
- ・小学校の専科指導優先実施教科（外国語、理科、算数、体育）に相当する中学校教員養成課程を開設する学科等における小学校教員養成課程の設置
- ・中学校二種免許状等における「教科に関する専門的事項」の必要科目の見直し
- ・教員採用試験の早期化・複線化を含めた多様な入職スケジュールの協議
- ・特定の強みや専門性を有する者に対する特別採用

### 選考試験等の実施

- ・専科指導優先実施教科に対応した小学校教員養成の促進

令和4年度から小学校高学年における教科担任制が本格的に導入され、新潟市でも複数人の配置がある。このことから、小学校と中学校の両方の免許状を有する学生を増やしていくことで本学の特色ある取組になる可能性がある。小学校の免許をもった中学校保健体育教師は今後より一層価値が高まる可能性がある。現状でも、小学校免許を持って中学校保健体育の採用試験において加点されている。小学校免許取得を目指す学生の人数がどの程度増やせるのかなどについて今後検討していく必要がある。

また、例えば、中学校・高等学校の保健体育の免許を二種取得とし、その分を特別支援学校教員の免許取得を目指すカリキュラムなども長期的展望をもって検討していくことなどが考えられる。

### Ⅲ. 大学3年生前倒し選考の導入—東京都教育委員会の例—

東京都教育委員会の栗原 健 東京都教職員研修センター研修部長の報告を整理した。

2023年度実施の東京都の具体的な試験内容としては、

3年生：教職教養、専門教養＝一次選考

4年生：論文、二次選考（面接）

※4年生での負担減

※3年生の一次選考で不合格になった場合でも4年生で再度受験できる。

→4年生：教職教養、専門教養、論文、二次選考（面接）

東京都ですら、令和4年度採用選考の倍率は全体2.1倍、小学校と特別支援学校では1.4倍であり倍率低下は深刻である。既卒者の受験者数が減少していることなどが倍率低下につながっているのではないかと分析している。

教員養成大学への期待として、東京都は次の4つの力とし、3つの活動を重視してほしいとしている。

4つの力

- ・コミュニケーション能力
- ・統率力
- ・組織貢献力

・課題解決力

その育成のためには次の3つの活動のどれも大切にしてほしいとしている。

学生生活 + 学習ボランティア + 社会体験 等

ここでも、学習ボランティア活動、社会体験などが重視され、大学の授業だけでなくより幅広い学びを重視していることが分かる。繰り返し出ているように、教職科目と学校現場の教育実践を相互に関連付けながら学びを深める取組を求めている。

#### IV. 国立教員養成大学の事例—東京学芸大学のカリキュラム改定と教育創成科目の取り組み—

小嶋茂稔 東京学芸大学副学長 の報告をまとめた。フラッグシップ大学として先進的な取組をしているため、本学ではすぐに同様の取組はできないが、今後目指すべき一つのモデルとして学ぶ必要がある。

##### 1. 教育組織の改編とカリキュラム構造の改定

- ・中等教育専攻の学生が副免許として小学校教諭一種免許状取得を促進する。※教職課程認定基準4-8 (1) i③ (いわゆる「義務教育特例」) を積極的に活用する。
- ・授業内容を精選し、開設科目数のスリム化を行うことによる、複数免許取得を促進する。
- ・上記の2点を実現するために、カリキュラム構造(教養科目、教育基礎科目、専攻科目)を見直し、新たに「教育創成科目」を新設する。

##### 2. 教育創成科目の特質

教員養成フラッグシップ大学として掲げる2つの教育者としての目標とそれに関連性が深いと考えられる5つの資質能力を設定し、5つの資質能力の育成に関わる授業科目を設定・開発する。

教育者としての目標と5つの資質能力

目標1：変化が激しく予測困難な時代へ対応できる力と新たな価値を創造できる力を子供育成することができる教育者

資質能力①：「探求力、想像力、他者・社会と協働できる力」を育成する力

資質能力②：子供が置かれている多様な環境への対応力

目標2：学校や社会をより良くするために教育者自身がどのような力を身に付けるべきか

資質能力③：学び続けるために自己をマネジメントする力

資質能力④：学校教育のより良い変革に資する基盤となる探求力、想像力

資質能力⑤：学校内での共同・社会との連携をマネジメントする力

特例として取り組んでいる大学であるため、本学にはすぐに活用できない内容が多いが成果を生かしていくには必要はある。特に目標と資質能力の内容はすぐに参考にできる。

#### V. 他大学における教育実習の見直しに向けた現状と今後の見通し—慶応義塾大学、東京理科大学、帝京短期大学の事例より—

関東地区私立大学教職課程研究協議会2023年度第1回研究懇談会(2023.7.16)において3つの大学の事例発表があった。ここでは、教育実習や学校体験活動の在り方についての内容を中心にまとめた。

##### 1. 慶応義塾大学

- ・現状としては、教員免許取得する学生はここ数年は約100名程度であり、そのうち教員に就職する学生は25名程度である。教員就職先はほとんどが私立中・高である。
- ・教育実習は4年次前期に実施しているが、民間企業の就活開始が6月になって以降は国家公務員の省庁周りの時期とも重なりかなり厳しい状況である。そのほかにも実習校が2週間しか受け入れができない場合などに対応するため、慶應義塾一貫教育校における「学校研究実習」(2単位)を特設している。
- ・教育実習の時期の見直しについては現段階では考えていない。理由は、学生のニーズがあまりないからである。前述のように一貫教育校における実習の可能であるし、教員採用試験を受験する学生が少ないからである。また、主たる就職先(私立中・高等学校)から教育実習の前倒し実施の要望はないこと、教員志望者が増える見通しがない中でカリキュラムを変更するという大変な作業をする必要性が少ないことなども見直しをしない理由である。
- ・「学校体験活動」等の科目設置や単位化は実施していないし、現状では実施する予定はない。学生・私立学校のニーズは少なく、学生の負担やカリキュラムの現状からみても実施するメリットが少ないからである。

- ・課題としては、学士課程と教職課程の両立が困難になっていることである。文部科学省による改革はよいことであるが、総合大学内で教職課程を安定的に運用するのが一層困難になっている。

## 2. 東京理科大学

- ・教員免許取得者は250人程度（全卒業生・修了生の10%程度）、教員就職者数は70～90であるが減少傾向にある。
- ・教育実習は現在は4年次5月～6月あるいは9月～10月。
- ・学校インターンシップ実習（40時間）は2021年度から既に実施している。3年生以上 1単位。実習先により8時間×5日間、4時間×10日間、2時間×20日など多様である。課題としては、専門科目の履修との兼ね合いで履修したいができない学生が少なくない。また、コンスタントに学生を実習校に送ることが困難な場合があることなどである。
- ・教育実習の時期の分散は、3年次1週間、4年次2週間の案で検討している。

## 3. 帝京短期大学

- ・2年制。養護教諭二種、栄養教諭二種、幼稚園教諭二種。
- ・教育実習は、8月末から10月初めの3週間で実施している。
- ・「学校体験活動」の単位化は既に実施している。通年開講で1単位。
- ・教育実習の見直しの予定はない。教員採用試験と重ならない時期に実施しているため。
- ・課題としては、まず、現在行っている学校体験活動を教育実習と同等の効果になる仕組みを検討する必要がある。通年で決まった曜日などに実施する教育実習も検討しているが、現状でも授業でコマが埋まっているので難しい。これはどこの短期大学でも難しいと思われる。今回の文部科学省の方針は短期大学の学生にとっては厳しく、4年生大学卒業生との不均衡はより大きくなる。

以上、3大学の現状と今後の見通しから、東京理科大学のように一歩進んでいる大学、慶應義塾大学のように公立校の教員を目指す学生が少ないなどの理由により教育実習見直しの必要性が低い大学がある。さらに、帝京短期大学のように教育実習の見直しを行いたくてもカリキュラムの変更が非常に難しいため困難な大学もある。

本学も健康スポーツ学科、看護学科、栄養学科で

は対象となる学生の人数に大きな差がある。また、教員免許以外に取得する必要のある資格等も違うため、学科の特徴に合わせて十分検討する必要がある。

本学では2023年6月に教育実習の見直しの指針を作成し、既に見直しを進めている。本学の学生が少しでも教員採用試験に有利な状況になるように、先進的に進めている大学の取組を参考に、早急に対応していきたい。

## VI. 自己点検評価の概要

全国私立大学教職課程 田中保和 副会長・特別委員会委員の報告をまとめた。自己点検評価は当然、各大学の今後の教職課程の在り方に直結する。特に、点検項目や点検の結果について注目した。

### 1. 観点別評定

次の7項目を設定している。

- (1) 【大学としての取組】 大学として教職課程の自己点検評価を実施している。
- (2) 【教職課程の運営・自己点検評価の体制】 教職支援センターや教職課程委員会等、教職課程の円滑な運営を統括する組織が構築され、教職課程自己点検評価の実施、取りまとめが効果的に行われている。
- (3) 【自己点検の実施】 基準領域に沿った自己点検評価が行われ、具体的な記述はなされるときともに、根拠データや資料が提示されている。
- (4) 【改善の方向性の明示】 自己点検評価の結果を教職課程の改革改善に結び付ける方策（アクションプラン）が示されている。
- (5) 【私立大学らしい特色、特徴の発見】 自己点検評価を通じて開放性をとる私立大学教職課程の強み、特色を自覚し、明らかにしている。
- (6) 【ポリシー。大学評価】 3ポリシー（DP、CP、AP）、大学評価との関係が明記されている。
- (7) 【全体評価】 教職課程の質の向上を図るため、主体的な取組が実施されていると評価できる。

### 2. これまでの審査の概況

上記1) に示した7項目を基に審査した結果を良かった例と改善すべき例の2点で報告している。

良かった例

- ・私立大学としての特色・取り組みを明記してい



- る例…(5)【私立大学らしい特色、特徴の発見】
- ・教職支援センター的な組織を中心に学内連携が密にでき、学生へのキャリア支援や地域連携が充実している例…(2)【教職課程の運営・自己点検評価の体制】
- ・教職課程委員会等、各委員会の役割を明確に記載している例…(2)【教職課程の運営・自己点検評価の体制】
- ・基準領域に沿っての取り組みが整理され、課題に対する今後の方向性が記載されている例…(4)【改善の方向性の明示】

#### 改善すべき例

- ・取り組み上の課題がほとんど記載されていない。…(4)【改善の方向性の明示】
- ・取り組み上の課題は記載されているが、検討するとの記述だけで、今後の方向性まで述べられていない。※今後に向けた改善が自己点検評価の目的である。…(4)【改善の方向性の明示】
- ・根拠となるデータが明確で無い。…(3)【自己点検の実施】
- ・教職課程の質の向上を図るため、主体的な取組が実施されていると評価できる例が少ない。…(7)【全体評価】
- ・同じ内容の記述や資料が何度も記載され、文章量が増大し、整理が必要となっている。

当然のことながら、先の文部科学省の「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方」の内容と関連する部分が多い。

特に、私立大学としての特色、根拠となるデータに基づく成果と課題の明確化、課題に基づく改善の方向性や具他愛的な改善策などが重視されていることが分かる。

## VII. まとめ

### 1. 理論と実践の往還

「児童生徒の伴走者としての意識と能力の向上」「多様な人材」「創造的な仕事」などのキーワードに象徴されるように教師にもとめられる資質能力はより高くなっている。特に、理論中心の授業だけではなく、学校現場での体験や実習における実践的な科目をより重視し、理論と実践的を相互に往き来し、学びを深めていく「理論と実践を往還」の視点がより重視されている。本学もその視点で教職課程を見直していく必要がある。

### 2. 特色ある取組の強化

本学では、3学科が連携して取り組んでいる活動がいくつかある。各学科の特色や特徴を重視しながら教職支援センターを中心として、今後も連携を工夫していく必要がある。

### 3. 特色ある教員の育成

私立大学であるからこそ特色ある人材育成をしたいところであるが、現状では、免許を確実に取得し、教員採用試験に合格させることで精一杯である。しかし、特色ある教員の育成が採用に有利に働く可能性は今後も広がると予想される。

例えば、小学校免許をもつ中学校志望者を育成することは特色の一つになりうる。小学校の教科担任制の流れから専門性の高い学生の育成が求められている。教科なら外国語、理科、算数、体育、など内容なら、データ活用、障害児発達支援、日本語指導、心理、語学力 などである。本学で言えば、健康スポーツ学科で小学校免許取得する人数をさらに増やしていくなどが考えられる。今年度13人という過去最高の人数で指導やサポートがどの程度できるのかは、今後の一つのバロメーターになると思われる。

### 4. 教育実習の見直し

育成面と教員確保の両面から教育実習を教員養成系国公立大学が実施しているような形にすることを求めている。

そのために、学校体験活動を単位化するという案がある。現状では本学教職課程においてはこの方法を活用するのがよいと考える。現状の各学科のカリキュラムを大きく変更せずに対応することができるからである。これは特色づくりにもつながる。教育実習の時期の見直しは多くの私立大学が「実現させたいが簡単ではない」と考えているのが現状である。カリキュラム変更は容易ではないので、長期的な展望をもって取り組んでいかなければならない。特に、健康スポーツ学科は今年度中に提案する必要がある。

## 引用参考文献

- 1) 一般社団法人全国私立大学教職課程協会 第42回研究大会 資料, 2023.
- 2) 関東地区私立大学教職課程研究協議会 2023年度第1回研究懇談会 資料, 2023.

## バレーボール指導実習の実践報告

久保 晃

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

### 〈概要〉

本授業では、新学習指導要領に示されている「対話的で主体的な学び」や、「指導と評価の一体化」のための学習評価の実践を通じた学びに関する学生の自由記述を報告する。

### 〈キーワード〉

対話的で主体的な学び 指導と評価の一体化 グループ学習

### はじめに

本授業の目的は、バレーボールのゲームを行う上で必要な基礎技術をより高いレベルまで応用させるための指導法を実践するために、コーチング理論を実際に計画を立て、演習形式で実践しながら習得していく。また、4年次での教育実習に向けて的確な指導が行えるよう基礎技術を習得することである。

本授業の履修者は、対面授業における出席率90%以上の学生17名（3年生13名、4年生4名）の内、バレーボール部所属の学生は5名（29.4%）である。12名（70.6%）は、体育授業以外での経験はない学生であり、バレーボールに対する知識や技能の差が大きい集団である。

また、新中学校学習指導要領は2021年度に全面実施されている。そして、新高等学校学習指導要領は、2022年度入学生から年次進行で実施されており2024年度には、全ての校種で全面実施となるが、本授業の履修者は、中学校と高等学校の在学中に「対話的で主体的な深い学び」を実現する授業改善や「指導と評価の一体化」のための学習評価などを目指している新学習指導要領は適用されていない。

以上のことを踏まえて本授業では、生徒を対象とした「対話的で主体的な学び」や「指導と評価の一体化」のための学習評価を体験する機会として授業を展開する。

### I. 授業計画

全授業15時間をオンデマンド授業6時間、対面授業を9時間に配分し、概要は次のとおりである。（詳細は、資料1を参照）

### 1. 学習形態

#### 1) 個人学習（オンデマンド授業）5時間

バレーボールの個人・集団技能の行い方や用語、学校体育における評価方法など対面授業の円滑な運営のため基礎的な内容を学ぶ。

#### 2) グループ学習（対面授業）4時間

- ・4～5人組（バレーボール部員1～2名を含む）のグループを4つ編成する。
- ・個人技能の理解と習得（パス・レシーブ・スパイク・サーブ・三段攻撃・ミニゲーム）
- ・オンデマンド授業の振り返りや授業の課題設定・自己評価などワークシートとグループ学習の過程を通して、対話的で主体的な学びを体験する。



【レシーブ練習の様子】

#### 3) チーム学習（対面授業）6時間

- ・8～9人（バレーボール部員2～3名を含む）のチームを2つ編成する。
- ・集団技能の理解と習得（3段攻撃、フォーメーション、ゲーム）
- ・オンデマンド授業では、ゲームに必要な攻撃や守備のフォーメーションの知識と理解を深め、

対面授業では、課題の発見や解決策の検討などワークシートやミーティング等を活用して、対話的で主体的な学びの過程を体験する。

## II. 授業の実際

第14回の対面授業を報告する。

### 1. 授業の流れ

#### 1) 導入 (10分)

- (1) 準備体操
- (2) グループリーダーと教師の打合せ
- (3) ワークシートと評価基準表等の説明  
※詳細は、資料2、資料3を参照
- (4) ワークシートの記入  
・前回授業の振り返りと本時の課題設定



【ワークシート記入の様子】

#### 2) 展開 (ゲームなど) : (75分)

- (1) 第1ゲーム
- (2) 第1ゲームの振り返り  
・課題の発見と解決策の検討、自己評価



【ミーティングの様子】

#### (3) チーム単位の活動

- ・サーブレシーブフォーメーションの確認



【フォーメーションの確認の様子】

- (4) 第2ゲーム
- 3) まとめ (5分)  
振り返り：課題の発見、自己評価など

### 2. ワークシート

バレーボール部員以外の学生の記述を紹介する。

#### 1) 本時の課題

・ポジションと役割をしっかりと果たす
・空いている空間をカバーしてレシーブする
・ボールを相手のコートに空いている空間に打つ

#### 2) ゲームの振り返り

##### (1) 学習の評価基準 (知識・技能)

○評価基準	
①ポジションの役割に応じて、拾ったり繋いだり打ち返したりすることができる	
○自己評価	
第1	ポジションごとの役割はできたが、カバーできなかった
第2	ポジションの役割を果たすことができた

○評価基準	
②ラリーの中で、味方の動きに合わせて、拾ったり繋いだり打ち返したりすることができる	
○自己評価	
第1	空いている空間はカバーできたが、ボールを上にはげれなかった
第2	空いている空間を見つけカバーすることができた

○評価基準	
③連携プレイのための基本的なフォーメーションに応じた位置に動くことができる	

## 取組紹介

○自己評価	
第1セット	動くことができたが、カバーはできなかった
第2セット	動いてカバーすることができた

### (2) 学習の評価基準 (思考・判断・表現)

○評価基準	
①作戦などの話合いの場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えている	
○自己評価	
第1セット	声掛けをしっかりと行うことができた
第2セット	話合いに積極的に参加できた
第2セット	声掛けがしっかりとできた

○評価基準	
②チームで分担した役割に関する成果や改善すべきポイントについて自己の活動を振り返っている	
○自己評価	
第1セット	振り返ることができた
第2セット	振り返ることができた

### (3) 学習の評価基準(主体的に学習に取り組む態度)

○評価基準	
①相手を尊重するなどのフェアなプレイを大切にしようとしている	
○自己評価	
第1セット	凄いプレイには、敵見方関係なく尊重できた
第2セット	全員で楽しくプレイしながら褒め合うことができた

○評価基準	
②作戦などについての話合いに貢献しようとしている	
○自己評価	
第1セット	色々なアイデアを出せるようにする
第2セット	アイデアを共有し、貢献できた

## Ⅲ. 学生による授業評価 (自由記述より抜粋)

授業の最終日にワークシートを用いて、授業全体

をとおしての授業評価を行った。その結果、オンデマンド授業について「対面だと忘れることも少なくなると思う」との意見が1件あった他は、それぞれの学びに対して有効性を示す内容の回答であった。

以下に、バレーボール部員の記述を□印に、部員以外の記述を○印として紹介する。

### 1) オンデマンド授業

□ バレーボールを指導する上で必要な評価の方法や自己の活動の振り返り、バレーボールのルールや技術の名称、フォーメーションなどを詳しく知ることができた。教師になった時に必要となる指導案の作成や教員採用試験に出てくる虫食い問題など、将来に役立つ課題ができて良かった。

○ ビデオを見てバレーのルールや歴史などについて学んだことで対面授業が楽しみになりました。バレーの知識をつけることで、自分がどの役割なのかを理解することができた。

○ バレーボールを見たことはあったが、詳しいルールなどを理解したことはなかったため、オンデマンド授業で初めて知ることも沢山あった。色々な反則行為や審判の動きにはこういった意味があるなど、これからバレーボールに関わる中で詳しくなれた気がする。教える立場としてもっと細かい所まで覚えないと分かりやすく説明することが難しそうだった。

○ オンデマンド授業で、バレーの指導方法やルール等の知識を身に付けることができました。これから中学校教員を目指しているので、正しい指導方法を見つけていきたいです。評価もしっかり行いたいです。

### 2) 対面授業

□ 教える側としてこの授業に参加して、教えることの難しさと共に、教師としての考え方にも触れる事が出来た。ゲームや練習をする中で、ボールを返球する時のコントロールや空いた場所への動き方、声を掛けるかなど、評価の観点と成り得る点を見ながら学生と関わられた。ゲームでは、頼もしい同級生と優しい先輩方と一緒にゲームが出来て、すごく楽しかった。上手な人達が多くて、私のミスもカバーしてくれたり、大事な時に決めてくれる選手が沢山いて素晴らしい。また、このメンバーでバレーがしたい。

- バレーボールをやったことがない人がほとんどの中で、これだけの成長を見られたり、自分が実際に少し指導する立場に立ったことで、指導する難しさや楽しさ等が少しだけ理解できた気がする。今回バレーボールだけでなく、バスケットボールを用いたアップやトレーニング等、これから指導する際に生かすことが出来ることが多く学んだことは非常に参考になった。
- 段階を踏みながら、最終的にゲームを行いとても楽しくプレーすることができました。良いプレーができたらみんなで喜び、ミスがでても励まし合うことができていたと思いました。サーブを狙うところやスパイクのコースなど作戦を立てながらゲームをすることができました。個人的にもっと他の人に良いアドバイスを積極的に行っていたらもっと良かったと思いました。対面授業では、実際にバレーを行うことができるのでオンデマンドよりも良い内容になっていると思いました。
- 今までのバレーボールの授業の中で1番楽しくできた。比較的みんな上手で楽しそうにバレーをしている姿を見て、教えるのも楽しかった。単体のレシーブ、スパイクはできても、試合になると相手にまかせちゃったりスパイクの助走を踏めなかったり、バタバタしてしまった。惜しい試合もあったけど、最後にミスで終わることが多かったから、最後までチーム一つになれたらもっと良かったと思う。
- オンデマンドで学んだ事を実際に行うことで、レシーブやトス、スパイクのコツや、意識するポイントなどが分かって楽しかった。また、試合ではチーム内で課題を見つけ、それを克服するために案を出し合ったり試合中、声を出し合ったりして盛り上げながら行うことができ楽しかった。
- 対面授業では、基礎的な練習から専門的な練習を行って、試合を行うことに成長していることが実感することができた。最後の試合では、仲間とのチームプレーを楽しむことができ、指導する立場になっても意識できることが増えた。
- 授業前半でしっかりと基本的な動作の練習ができ、それが試合の中で発揮できると感じる事が多く、バレーボールの技術が上がったと思う。毎回同じチームのメンバーとプレーすることで、チームワークが生まれ、より楽しいと感

じることができた。

- 基本練習も、試合もかなり楽しかった。特に試合では、授業とは思えない緊張感で楽しくプレーすることが出来た。同じチームの人とコミュニケーションをとることができてその部分も楽しかった。
- バレーに苦手意識がありましたが、今回の授業を通して楽しく試合をすることができました。周りに上手な人が多かったこともあり、しっかり3段攻撃に繋げることができました。
- バレーボールを真剣に取り組んだことがあまりなかったので、考えたり、本格的なプレーを見たり、行えたりして良かった。

#### IV. まとめ

今回の授業は、バレーボールの知識や技能の個人差の大きい集団であったが、「対話的で主体的な学び」や「指導と評価の一体化」のための学習評価を目指したワークシートやグループ学習などの体験を通して、それぞれの競技レベルにおいて、学習効果を示す自由記述が多かった。

授業展開では、守備や攻撃のフォーメーションを理解し、ボールに触れない学生も、決められたポジションにスムーズに移動することができるようになった。また、ゲームのラリー中に声を出し合ったり、ポイントを獲得した時にチーム全体で盛り上がるなど、チームワークの育成と履修者全員の当事者意識の高まりも感じられた。

さらに、ゲームの結果を踏まえて、チーム毎の課題別練習が見られるなど、グループでの「対話的で主体的な学び」も確認できた。

しかし、「指導と評価の一体化」では、学習の評価基準をワークシートの自己評価に示したことで、学生自身の意欲的な授業参加に一定の効果はあったものの、学生自らが生徒の学習評価を行うという認識が伺える記述は非常に少なく、課題を残した。

最後に、本授業の成果の一端として、学生の言葉で締めくくりたい。

「今日は2セットゲームを行い、全員がすごく上達していて物凄く楽しいゲームができて良かった。皆それぞれがバレーボールに対しての意欲的な発言や戦略的な声掛けができており、とても良かった。」

#### 引用文献

- 1) 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説, 2017, 高等学校学習指導要領(平成

## 取組紹介

30年告示) 解説, 2018.

- 2) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター, 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 保健体育, 2020.3.
- 3) 公益財団法人日本バレーボール協会, コーチングバレーボール基礎編, 2017.

【資料1】授業計画

授業回	学習形態	授業計画・学習主題	備考
1	個人学習	○目標とする指導者像 ○グッドコーチに向けた「7つの提言」	・履修目的の調査
2		○バレーボールの歴史と競技特性	・バレーボール歴の調査
3		○バレーボール競技のルールと審判法 ○中学校学習指導要領 E 球技 「第1学年及び第2学年」の生徒の学習指導に関わる留意事項	・バレーボール競技のルールと中学校学習指導要領球技（ネット型）指導上の留意事項の理解
4		○バレーボールの評価方法	・中学校1年生のバレーボールの評価基準の作成
5		○学校体育におけるバレーボール指導の留意点	・ボールを持たない時の動きの例の理解
6	グループ学習	○個人技能 ○自己申告（診断）等シート	・バレーボール技能の個人技能の自己申告と授業評価（自己評価・相互評価）の理解
7		○個人技能 ○グループ学習	・本時の課題の設定、個人技能の理解と実践 ・オーバーハンドパス、アンダーハンドパス ・学習（自己・相互）評価の実践
8		○個人技能 ○グループ学習	・本時の課題の設定、個人技能の理解と実践 ・四角パス、スパイク ・学習（自己・相互）評価の実践
9		○個人技能 ○グループ学習	・本時の課題の設定、個人技能の理解と実践 ・三段攻撃、ミニゲーム ・学習（自己・相互）評価の実践
10	チーム学習	○集団技能 ○振り返り学習（中学校学習指導要領 球技（ネット型）の学習内容について	・本時の課題の設定、集団技能の理解と実践 ・ボールを持たない時の動きの例の理解と実践 ・授業（自己・相互）評価の実践
11		○集団技能（チーム） ○観点別評価	・本時の課題の設定、集団技能の理解と実践 ・ボールを持たない時の動きの例の3観点別評価の理解と実践 ・学習（自己・相互）評価の実践
12		○バレーボール競技の用語 ○集団的技能：3段攻撃、ブロックフォーメーション、マウンドフォーメーション	・バレーボール競技のポジション・フォーメーションの名称・役割の理解と実践
13		○集団技能（ゲーム1） ○観点別評価	・本時の課題の設定、集団技能の理解と実践 ・単元別評価の理解 ・学習（自己・相互）評価の実践
14		○集団技能（ゲーム2） ○試合：観点別評価	・本時の課題の設定、集団技能の理解と実践 ・単元別評価の理解と実践 ・学習（自己・相互）評価の実践
15		○集団技能（ゲーム3） ○試合：観点別評価	・本時の課題の設定、集団技能の理解と実践 ・単元別評価の理解と実践 ・学習（自己・相互）評価の実践

取組紹介

【資料2】第14回授業ワークシート

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

- I 本時の課題の設定  
本時の課題を設定（確認）し、グループで共有する

--

- II ボールや用具の操作（※平成29・30年学習指導要領解説より）

中学校3年生 高等学校入学年次	高校 その次の年次以降
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サービスでは、ボールをねらった場所に打つこと</li> <li>③ ボールを相手側のコートの空いた場所やねらった場所に打ち返すこと</li> <li>① 攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にボールを上げること</li> <li>・ ネット付近でボールの侵入を防いだり、打ち返したりすること</li> <li>② 腕やラケットを強く振って、ネットより高い位置から相手側のコートに打ち込むこと</li> <li>④ ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりすること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ サービスでは、ボールに変化をつけて打つこと</li> <li>③ ボールを相手側のコートの守備のない空間に緩急や高低をつけて打ち返すこと</li> <li>・ ボールに回転をかけて打ち出したり、回転に合わせて返球したりすること</li> <li>・ 変化のあるサーブに対応して、面を合わせてレシーブすること</li> <li>① 移動を伴うつなぎのボールに対応して、攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にトスを上げること</li> <li>・ 仲間と連動してネット付近でボールの侵入を防いだり、打ち返したりすること</li> <li>② ボールをコントロールして、ネットより高い位置から相手側のコートに打ち込むこと</li> <li>④ チームの作戦に応じた守備位置から、拾ったりつないだり打ち返したりすること</li> </ul>

- III 自己評価（振り返り）

【知識・技能】

- ① ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりすることができる。

1セット	2セット

- ② ラリーの中で、味? の動きに合わせてコート上の空いている場所をカバーすることができる。

1セット	2セット



③ 連携プレイのための基本的なフォーメーションに応じた位置に動くことができる。

1セット	2セット

【思考・判断・表現】

① 作戦などの話し合いの場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えている。

1セット	2セット

② チームで分担した役割に関する成果や改善すべきポイントについて、自己の活動を振り返っている。

1セット	2セット

【主体的に学習に取り組む態度】

① 相手を尊重するなどのフェアなプレイを大切にしようとしている。

1セット	2セット

② 作戦などについての話し合いに貢献しようとしている。

1セット	2セット

IV 授業評価

1) 自己評価：課題の発見と解決に向けて、意欲的に取り組んでいた

- ① 全く当てはまらない
- ② あまり当てはまらない
- ③ いくらか当てはまる
- ④ かなり当てはまる
- ⑤ 非常に当てはまる

2) 相互評価：課題の発見と解決に向けて、意欲的に取り組んでいた

※ 自己評価を共有して、該当する番号に○印をつける

- ① 全く当てはまらない
- ② あまり当てはまらない
- ③ いくらか当てはまる
- ④ かなり当てはまる
- ⑤ 非常に当てはまる

取組紹介

【資料3】評価基準表

○ 第1回		知識・技能			思考・判断・表現			主知的に学習に取り組む態度			感性、思いやりなど（個人内評価）		合計	
観点別学習状況評価の観点	評価基準	知識・技能			思考・判断・表現			主知的に学習に取り組む態度			感性、思いやりなど（個人内評価）		合計	
		A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足		C 努力を要する
	？ ボールを相？ 側のコートの中、味？ の空いた場所やねらった場所に打ち返すことができる。	9	6	3	9	6	3	9	6	3	9	6	3	60
観点別学習状況評価（3段階）														30
A														30
B														30
C														30
○ 第2回														
観点別学習状況評価の観点		知識・技能			思考・判断・表現			主知的に学習に取り組む態度			感性、思いやりなど（個人内評価）		合計	
観点別学習状況評価の観点	評価基準	知識・技能			思考・判断・表現			主知的に学習に取り組む態度			感性、思いやりなど（個人内評価）		合計	
		A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足	C 努力を要する	A 十分満足	B 概ね満足		C 努力を要する
	②ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりすることができる。	9	6	3	9	6	3	9	6	3	9	6	3	60
観点別学習状況評価（3段階）														58
D														44
C														39
E														

## 栄養教育実習報告

健康科学部 健康栄養学科 石井 杏奈

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年6月10日(金)～6月23日(木)
- ・実習校：新潟市内小学校
- ・担当学年：4年
- ・主な実習内容：授業観察、給食観察、研究授業、校長他教員講話など

### II. 教育実習の詳細と反省

担当学級の授業を観察させていただき、児童から学習課題を引き出し、児童の言葉で授業のまとめを行うという児童が主体となって授業が進められていることが分かった。そして、振り返りとして授業で分かったことを書かせるなどアウトプットをさせる場が設けられていた。このような手立てを講じることで、楽しくて、分かる、できる授業づくりに繋がるということが分かった。

栄養教諭が行った食育の授業を見学させていただいた。普段の給食の様子をよく知る学級担任とTTで授業を行う事で、「これ嫌いな人多いよね。」など児童が自分事として考えるために手助けとなる声掛けが多くあったり、課題設定やまとめがスムーズに進められたりなど学級に合った授業を行うことが出来るということが分かった。また、学級担任と上手く連携を図るためには事前に十分な打ち合わせを行う事が重要であるということも学んだ。その授業では、決められた時間の中で伝えるべきことをしっかりと伝えて意思決定までさせていた。指導案にとらわれず、その学級の様子を見て指導方法を変えていくことの大切さを学んだ。

校長先生より学校経営の方針について、教頭先生より服務・勤務について、研究主任の先生より学習指導案の作成について、体育主任の先生より児童の体力を向上させるための取組について、支持的風土主任の先生より支持的風土を高めるための取組について、特別支援主任の先生より特別支援学級の特徴について、生活指導主任の先生よりいじめの予防・対処についての講話をしていただいた。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

研究授業では、残食が多いという児童の実態から、給食を残さず食べるためにはどうするとよいか

考える授業を行った。

指導案作成から実際に授業を行うところまで経験して、課題とまとめを児童から引き出す大切さと児童の思考を手助けする手立ての必要性、まとめる際の注意点を学んだ。児童が課題やまとめを出すことで一方的な指導ではなく児童が作り上げた授業になると実際に授業を行い感じる事が出来た。そして、指導者のねらいにあった課題やまとめになるよう児童を誘導していくための問いかけは授業を行う学級の実態を知らないとできない事であるということも同時に学んだ。

学級担任の先生が考えるポイントを絞ることで児童の考えも深まりやすいと指導していただき、その方法で授業を行ったところ、手がかりがあることで考えを思いつきやすそうにしており、手立て1つで児童の考えの深まりが変わってくるという事が分かった。今回の研究授業では、まとめをクラス全体で頑張ることにした。しかし、食事は個人差が大きくクラス全体で決めたことをできない子が出てきたときに攻撃が始まり、いじめへと発展していく可能性があり、栄養教諭として食育の授業を行う際にはそういった点への配慮も必要であるということに気付かされた。

この研究授業によって残すことは良くないことだという意識が生まれ頑張っている児童の姿や少なくなった残食を見て、喜びとともに児童の実態に合った指導を行う事の大切さに気付いた。

### IV. 実習を通じて学んだこと

#### 1. 栄養教諭の役割として重要だと思うこと

今回の実習では児童が給食をととても楽しみにしていることを改めて感じる事ができた。現場では児童が安心して給食を食べられるよう異物混入を防ぐため、食材をしっかりと洗うことや、使用した包丁が欠けていないか確かめるなど、一つひとつ確認作業を行っていた。また、食中毒を防ぐため、こまめに手洗いを行うなど衛生管理に気を付けることなど日々の意識が大切だと感じた。給食は、発達段階にある子どもたちの成長を支えるとても大切なものであり、栄養バランスだけでなく、味覚の発達にかかわる味付けや野菜の切り方など、一食ごとに色々な

ことを考えて作っている。そのため、必要な栄養価や食べてほしい食材を意識して献立をたてて、何よりも美味しく作るということにこだわりを持って業務を行うことが重要だと感じた。

## 2. 栄養教諭に必要な能力と基本姿勢について

児童とのかかわりを積極的に行っていくことが必要だと感じた。学校における食育の推進は、栄養教諭が中心となって取り組まれることが必要であると同時に、児童に対する食に関する指導は各教科等の多様な領域において行われるべきものであるため、その学校の教職員が十分に連携・協力して、指導に関わらなければならないと考える。

また、全体計画を作成し実施していく上では、その学校の児童生徒の健康状態や運動活動等の実態を把握しておくことが必要となるため、栄養教諭は、養護教諭や保健体育の教諭、学級担任などの教職員との情報交換等を行い、その学校における食育推進の基本的な考え方と方向性を全体計画として示すことが重要だと感じた。

## 3. 今後の課題

実習を通して児童の言葉を拾いあげ、児童の言葉で授業を進めることの難しさを感じた。授業は児童との会話で行うということが自然にできるようになる必要があると感じた。また、今回の授業では基本的には一人で行ったが、実際の現場ではチームティーチングで行うことが多いため、担任の先生との連携をもっとできるようにコミュニケーションをしていく必要があると考える。また、栄養教諭は栄養のプロフェッショナルとして、児童のどんな疑問にも児童の発達段階に応じた指導ができるように、この一時間で何を伝えたいかを意識する必要があると感じた。また、給食管理は調理師、担任、養護教諭といった周りとの連携が欠かせない。栄養教諭としての役割を果たすためには給食室にこもるのではなく、積極的に周囲に関わっていく姿勢が大事であると思うので心掛けていきたい。

## V. 3年生へのアドバイス

教育実習は大学の授業では学ぶことができない多くのことを学ぶことができる貴重な機会です。特に、子どもたちと直接関わるができるのは教育実習だけです。ただ教室にいただけでは子どもたちとの距離は縮まりません。たくさん子どもたちと関わってきてください。私は、ほぼ毎日休み時間に鬼

ごっこをしていました。子どもたちの体力についていくことは、大変でしたが、その時間があつたからこそ距離を縮めることができたのかなと感じています。実習が始まる前は不安があると思います。実際、私もちゃんと授業が出来るのか不安でいっぱいでした。ですが、始まってみると思っている以上に楽しい日々で最終日には次の日から来ることができない寂しさすらありました。

就職活動や卒論などがある中での教育実習は大変ですが、実習での経験は今後の糧になるはずです。有意義な実習にしてください。応援しています。

## 栄養教育実習報告

健康科学部 健康栄養学科 清水 瑛羅

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年6月6日(月)～6月17日(金)
- ・実習校：新潟市内小学校
- ・担当学年：2年
- ・主な実習内容：研究授業、授業観察、給食指導、校長講話など

### II. 教育実習の詳細と反省

担当学級を中心に、多くの学年、学級の授業観察をさせていただいた。

授業では、児童が考える場面、声に出し読み上げる場面、自分で作業をする場面が多くあり、児童が45分間集中し飽きずに取り組むための工夫が多くなされていた。また、話すときには、声量や話し方、声質、表情の違いなどでメリハリを付けることも大切であると学んだ。児童が発言している際には体を向け真剣に聞いていることが伝わるようにしていた。教師が聞く、話す場面の違いを態度で示すことでそれを見た児童が今はどうすべきかを理解しやすくなることが分かった。加えて、2年生では伝えたい内容をまとめ分かりやすく発言することが難しい児童もおり、教師は児童の伝えたいことを適切にくり取り要約し全体に共有していた。発言した児童が伝えたい内容を理解してもらえたという安心感を得ること、学級全体では分かりやすく共有され内容の把握がしやすいことの両面から重要であると感じた。

何をしてほしいのか、どうしてほしいのかを児童自身が言葉にして伝えるようにしていた。困っていることが分かってもすぐに助けるのではなく、児童が自分から意思表示するのを待つことも必要であると学んだ。このことにより、意思表示をすることや、自分で考え行動できるようになると考えた。

給食指導巡回では全学年の給食準備の観察、食事時の声掛けをさせていただいた。配膳時に児童自身が大盛・普通・小盛を選択しており、配属学級では、「いただきます」の挨拶後に教師が児童の席を回り希望した児童に食缶内に残っている給食の配膳を行っていた。

校長先生から学校経営について、教頭先生から服務勤務について、給食主任の先生から食に関する指

導についてご講話いただいた。その他、生徒指導、学習指導についてもご講話いただいた。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

児童は、盛り付けの際に大盛・普通・小盛を自分で判断すること、食事中では黙食ができていた児童が多かった。一方で、肘を付いている、姿勢が崩れている、食器を持っていない、下膳時の食器に食べ残しが付いているなど、食事マナーが守れていない児童が多くいた。この実態を踏まえ、「食事のマナー」をテーマに授業をさせていただいた。マナー違反をすることで、周囲の人が不快な思いをすることを学級全体で共有し、マナーを守ることは自分自身のためだけでなく、周囲の人、調理や片付けをする人などにも関わるため重要であると理解させたいと考えた。児童とやり取りできる部分を取り入れる、児童が声に出したり自身の身体を動かしたりするなど動きのある内容にする、指示を一つひとつ出すようにすることなどが重要であると事前にご指導いただいた。

実際に授業をしてみると、マナーの意味やそれを守る理由を児童が理解している部分も多かった。反省点として、どの程度で発言を区切るのかを明確にしておらず、時間管理ができなかったこと、声量や話し方などのメリハリがなかったこと、展開部分ですべて同じペースで進行したため間延びしてしまったことなどがある。児童とのやり取りを多くしながら授業を進められた点や、授業後の給食の時間に児童が意識して食事マナーを守ろうとする姿勢が見られた点は良かった部分である。このことから、発言を区切るタイミングを予め計画しておくこと、メリハリのある話し方で分かりやすく伝えること、内容やペースに変化を持たせ飽きずに取り組める工夫をすること、広い視野で児童一人ひとりの様子を把握することが必要であると感じた。

### IV. 実習を通じて学んだこと

#### 1. 栄養教諭の役割として重要だと思うこと

適切な実態把握を行うことと、担任教諭やその他教職員との連携を図ることが重要であると考え。適切な実態把握をすることで、指導内容を実態に合

わせたものにする、課題に合わせたアプローチができると感じたためである。そのために、児童とのかかわりや、給食の時間の観察を積極的に行うことが重要である。また、連携を図り学級担任が指導できるようにすることで、継続的な指導に繋げること、児童に合わせた対応をすることができると感じた。専門性を活かすためにも、校内での連携を図り食育を推進することが栄養教諭の重要な役割の一つであると考えた。

しないと分からないことだと思います。大変なことも多々ありましたが、それらすべてが自身の経験となり貴重な学びであったと感じます。実習中でないできないことに、ぜひ積極的に挑戦してみてください。

## 2. 栄養教諭に必要な能力と基本姿勢について

栄養教諭には、専門的知識と児童や教職員と積極的に関わるためのコミュニケーション能力が必要であると考えた。学級担任の先生方と異なり一人職であるが専門性の高い職種であることから、専門的な知識と根拠が説明できることが重要だと感じた。根拠があり改善しなくてはいけない箇所を明確に示せることが指導を充実させることに欠かせないと考えた。また、自分から児童や教職員と関わる機会を作らなくては実態把握や連携を図ることができないため、コミュニケーション能力が必要であると言える。加えて、常に新しい情報を学び続ける、自分から積極的に関わる姿勢が求められると考えた。

## 3. 今後の課題

実習を通して、児童に分かりやすく伝えること、実態に応じた指導をすることの難しさを感じた。自分の伝えたいことを説明できるだけの知識や表現を身につける必要があると考えた。また、実態に応じた指導には実態把握が欠かせないため、児童の様子を観察したり関わったりすることが必要であると感じた。加えて、栄養教諭はチームティーチングで授業を行うことが多いため、担任教諭と連携できるよう、自分から関わりコミュニケーションをとることなどの積極的な行動をすることが必要であると考えた。

## V. 3年生へのアドバイス

実習中は、何事にも積極的に挑戦する気持ちを持つことを大切にしてください。

私は、授業の雰囲気をつかむために、児童の前で話す機会をいただきました。自信はありませんでしたが、挑戦しご指導いただいた内容を研究授業に生かすことができました。また、後日別のクラスでも研究授業と同様の内容で授業を行わせていただきました。クラスごとの雰囲気の違いなどは実際に経験

## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 小林 乃愛

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年9月5日(月)～16日(金)
- ・実習校：新潟市内小学校
- ・担当学年：5年生
- ・担当授業：国語、算数、家庭、外国語活動、道徳

### II. 教育実習の詳細と反省

学校生活の中心である授業はもちろんであるが、それ以外にも教師の重要な仕事が沢山あることを再認識した。

例えば、避難訓練である。実習中に避難訓練を体験することができた。これまで児童生徒の立場でしか避難訓練を見ていなかった。教師としての目線で参加してみて、「今ここで担任ならどう動くべきか？」と迷う場面がいくつかあった。危機の際、担任としてどのように行動すべきなのかを考えさせられた。「いざという時に適切に行動し守れるのか？」児童目線から教師目線に代わると多くの発見があった。実際にはパニックになる児童もいるはずであるし、担任である自分自身も相当緊張しているはずである。教師の仕事の重さを再認識した。

体育の授業では一見地味に見えるが、安全面の確保がとても重要であると感じた。授業中児童の動きを見て、ヒヤッとすることが何度かあった。場づくり、環境づくり、明確な指示、真剣に取り組ませるための適度な緊張感をもたせる工夫などがとても重要であることが実感できた。

他の先生方の授業を参観するときの視点は重要である。道徳では、自分が構想している授業と比べ、想像しながら参加したら教師のすべきことについての発見が多かった。何を見るかを明確にして授業を参観することの重要性がよく分かった。同様に、自分が授業をして失敗した点をふまえて指導教諭の先生の授業を参観したら発見も多くあった。何を見るのか自分自身の問題意識をどうもつかが重要であると感じた。

板書、板書計画を作成することの重要性も何度も実感した。板書計画を考えることで授業を教師自身がイメージし、シュミレーションすることでさらに授業を深く考えることができた。児童にとっては振り返りの際にも板書は有効であった。逆に、授業で

の学びが分かりにくい板書では、児童の振り返りも難しかった。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

卒業論文で道徳の授業について取り組んでいたこともあり、研究授業は迷わず道徳にした。①児童の反応を生かして課題を設定すること、②一人で考える→グループでの検討→全体での検討の一連の流れをスムーズにすること、③グループと全体の検討の内容を充実させるという3点を特に重視して授業を構想した。

まず、教材文をいかに短時間でどの児童にも大事な内容を理解できるようにすることを悩んだ。これがスムーズにできないと課題設定、グループや全体での検討に時間がかかってしまうからである。そうなれば授業の最後での一人一人が振り返る時間も確保できなくなる恐れがあるからである。そこで、学校の身近なきまりについて「なぜ必要なのか」と問うた。身近な学校のきまりと遊園地のきまりにつなげやすいと考えたからである。また、学校のきまりもすべてなぜそのきまりが必要なのか説明できる児童は多くはない。したがって、「分かっていたつもりだったが分かっていなかった。」という問題意識を引き出しやすいと考えたからである

身近なきまりについての問題意識からスムーズに課題は設定できた。次に、学校のきまりから教材文につなげるために挿絵等を用いながら教師が説明した。より理解しやすいように挿絵を自作して加え、登場人物などの絵も示した。教材文と関連付けて実際に児童が考えた課題は「物語の中の男の人はきまりを守っていないのはなぜか」という問題意識を引き出した。

さらに、より考えやすいという点からも、きまりを守らないおじさんの気持ちを理解できる、理解できないの2択にし、その理由もはっきりさせることにした。ここでは「せっかく見に来たし、大きな問題を起こさないのだから、少しくらいきまりを破っても仕方ない」という気持ちに共感しやすいようにした。なぜなら、きまりを守らなければいけないのは分かっているが、誰もが人にそれほど迷惑をかけるのでなければ少しくらいならいいという本音を引

き出しやすいと考えたからである。ねらい通り、男の人に共感する児童の方が少し多くなった。

ここまでがスムーズに進められたので、対立点のはっきりし、グループでの話し合い、全体での話し合いも活発になった。やはり課題設定は重要であると感じた。さらに、自分の考えをネームプレートで動かすことで見える化し、途中考えが変化した場合も動かせるようにすることで自分の考えの変化もほかの人の考えの変化も分かるようにしたことも話し合いを活発にしたと思う。それらの変化も分かりやすいように板書も工夫した。板書は何度もシュミレーションし、板書計画を完成させることができた。さらに、計画に固執せず、児童の発言を生かした板書になるようにした。その結果、板書が児童の振り返りにも有効に活用できているという手応えがあった。

全体的には想定どおりに進んだが、想定した以外の発言も当然出てきてどう扱ったらよいかとても迷った部分もあった。その際、「どうして係の人はきまりを守らせようとしたのか」という発問が議論の論点を焦点化させることに効果があった。

#### IV. 実習を通じて学んだこと（今後どう生かすか）

自分が工夫すればするほど授業は充実し、それは児童の表情にも表れた。充実した授業ができると子どもが喜び、同時に自分もうれしさややりがいを実感できた。これが教師のやりがいであると感じた。

一日担任をした際、児童を注意するということの難しさ、大切さがよく分かった。実習生であるため、どうしても少し遠慮してしまい、なかなか児童に毅然とした態度で指導することができなかった。「信念をもってプレずに指導する」などと言われるが、信念がいかにしたら確立できるのか？これからもじっくり考えていきたい。

子ども同士の交流を生むためには、どの場面で、どんな問題意識を児童にもたせ、どのような方法で対話させるかをしっかり構想しなければならないと感じた。児童は、互いの考えの違いや共通点を案外気付いていない場合もあるし、その違いや共通点が知りたいという意欲が引き出せないこともある。それを変えるのは教師の一工夫である。当たり前であるが、まだまだ分からないこと、できないことだらけである。今後地道に力を付けていけるように努力し続けていきたい。

#### V. 3年生へのアドバイス

ICTの活用は現場で非常に進んでいます。タブレットの操作や活用に児童は慣れていて、巧みに操作する児童が多いです。大学の授業ではなかなか自分で体験しにくいですが、日頃からパソコン操作での課題作成なども含めているいろいろなことを積極的に取り組むことが教育実習でも役立ちます。

中学校の教育実習と違い、小学校の教育実習は二週間です。正直あつという間に過ぎていきます。第1週が重要です。焦りすぎてもいけません、スタートダッシュが大事です。どんどん児童と自分から話しかける、遊ぶ、一緒に清掃など活動することが重要です。そして、早めに研究授業や担当授業を決め、指導案づくりなどに取り組むとよいです。

もちろん、中学校の実習で学んだことも大いに役立ちます。指導案づくりも中学校の実習での体験が生かれます。そして、小学校高学年は中学校1年生とあまり変わらない面もあります。ぜひ中学校の実習で学んだことを意識して活用していくとよいです。そして、少し自信ももってよいと思います。ぜひ、充実した小学校での実習にしてください。応援しています。



## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 高橋 和希

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年9月5日(月)～16日(金)
- ・実習校：新潟市内小学校
- ・担当学年：4年生
- ・担当授業：国語、算数、外国語活動、体育、道徳

### II. 教育実習の詳細と反省

実習を通じて、教師としての自分の素質を問いただすことができた。言うまでもなく自分の不十分な点を数多く自覚した。今後、一人前の教師となるために何が足りないかが見えてきたことは大きな収穫であった。そして、未熟であることの自覚以上に、自分の児童に対する愛情や責任感が深まったことを強く感じる事ができたことは一番嬉しいことであった。何としても教師となって、より多くの児童のために頑張りたいという気持ちを強くした。

児童は、私の全くまだまだ不十分な授業に一生懸命に参加してくれた。私の指示に素直に応じてくれる児童と共に学び合い、成長し合えた実習であったと感じている。2週間の生活と日々の授業を終える度に、自らの課題は毎日浮き彫りになっていった。しかし、それが落ち込みや挫折ではなく、もっと勉強し、成長し、より良い授業や指導ができるようになりたいという向上心に繋がり、責任感も増した。そのため、今後も学習支援ボランティアやいろいろな研修会に参加し、自己の成長に努めていきたいと思った。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

児童の実態として、前学年までもフレキシブルハードルを活用し、恐怖心無く小型ハードル走を行う活動を経験していた。また、多くの児童が休み時間にも活発に体を動かしているため、本単位においても意欲的に参加すると考えられた。そのため、ハードルに対する恐怖心を減らす活動の必要は無いと考え、ドリル練習を通して動きを身に付けさせた上で、実践的な展開を行っていくこととした。また、児童の意欲をさらに高める工夫として、独自なリズム言葉を活用して3歩でリズムカルに走ることを目指した。

実践してみると、リズム言葉は児童に好評であ

り、また、主体性や授業に取り組む雰囲気を高めているようにみられた。その成果もあり、多くの児童がリズムカルにインターバルを走ることができるようになった。

しかし、このリズム言葉だけ効果があったとはいき切れない。また、リズム言葉がなくても既にリズムカルに走っていた児童にどの程度効果があったのかはまだ不明であった。もちろん、リズム言葉によってより速く走れるようになった児童はいたと思うが、それが何人いたのかははっきり確認できなかった。授業の振り返りの記述の書かせ方などももっと工夫する必要があった。

別の視点から見ると、それまでの学習のきまりを私自身が十分理解できていないがために、スムーズな展開が行えなかった場面もあった。先に行った中学校の教育実習では、体育授業中に勝手に座って待機していることは、意欲がないというようにみられたが、小学校では、待機は基本座って待つということがきまりであった。自分で勝手に中学校と同じだと認識してしまい、不適切な指示をしてしまったことがあった。それまで授業を参観していたはずなのに、見方が甘く、間違った理解をしていたことに後で気付いた。自分では、自分が授業する立場になって指導教諭の授業を参観していたつもりであったが、まだまだその意識が浅かったということを痛感した。

### IV. 実習を通じて学んだこと（今後どう生かすか）

指導教諭は、児童にいつも誠実に対応していた。まずは児童の言い分をしっかりと聞くという姿勢を貫いていた。私はせっかちな面があるので、児童の話もしっかり聞こうという意識はあるのだが、ついうっかり途中で自分の意見を言ってしまうようなことがあった。ここでも、知識として知っていることを実際に実践することの難しさを実感させられた。

また、指導教諭は一人一人の児童と授業中、休み時間、給食時などの時間をうまく活用して巧みにコミュニケーションを取っていた。さらに、下校時にちょっとしたゲームをすることで児童との心の距離を詰めるなどの工夫もしていた。ほめる、励ますだけでなく、笑いを取ったり、時にはよくない行動を

注意したりしていた。自分は、とにかく一人一人と会話することを大事にするということで頭が一杯だったが、それだけがコミュニケーションの手段ではないということを知った。

指導教諭は、最も重要である日々の授業をととても丁寧に準備しており、どの授業もよく考えられているものであった。授業の準備にかけられる時間が少ない中で、どうしたらこのように日々の授業を充実させることができるのだろうか不思議になった。これまでの経験と工夫の積み重ねで教師としての力量を高めてきたからだと思えるが、自分が5年、10年…20年後にこのように順調に成長できるのかどうか、今の段階では不安しかない。このような指導教諭の元で学ばせていただいたことは、とても貴重な経験であり、今後自らが学級を持った際に生かし、授業と向き合う姿勢を真似していきたいと思った。

## V. 3年生へのアドバイス

様々な先生方の授業を参観することをお勧めします。同じ単元でも、先生が違えば授業の雰囲気や授業構成が違ってきます。そのため、様々な良い点・難しい点を見ることができ、大変勉強になります。また、中学校の教育実習よりも時間にゆとりがあると思います。その時間を上手く活用し、教材研究や授業づくりに力を入れたり、先生方から学んだ工夫や技を使ってみたりすることでさらに学びを深められると思います。どんどん真似してチャレンジしていくことが重要です。

## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 田中 優麻

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年5月30日(月)～6月17日(金)
- ・実習校：秋田県内中学校
- ・担当学年：1年生
- ・担当授業：陸上競技（長距離、リレー）、保健、  
道徳
- ・部活動等：なし

### II. 教育実習の詳細と反省

教育実習は、大変ではあるが、指導能力の向上や自分の中に得られるものが多いと感じた。生徒と接する中で、生徒の時には分からない教師の立場としての考えや自分にはない生徒の発想に触れること、身近で生徒の成長を感じることができること、など自分がやったことすべてが自分の貴重な経験として得ることができる。また、授業の中で、競技の特質や能力、技術について教える専門的な知識も必要となってくるが、学習規律など、学校全体として行うべきことを授業内に組み込んでいることにも気づいた。さらに、1つ1つの活動は、生徒のためになる意図的なものとなっていることも理解することができた。

保健体育では、活動量の確保が重要視されているため、生徒をどう動かすかなどの指示や説明、授業構成を基にした授業のコーディネート力についての専門性を感じた。また、保健体育は、運動の苦手な子、得意な子と極端に分かれてしまう教科でもあり、その差をどう埋めていくか、運動が苦手な子にに応じてどのような教材を設定するかなどの専門性も予想以上に重要であることが実感できた。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

最初に行った授業が自分の専門である陸上競技の長距離だったということもあり、思ったよりも自分の中で授業が上手くいったという自己評価であった。その根拠は生徒が意欲的に活動していたし、自分も自信をもって教えることができたことである。

反対に、次の保健の授業は、教科書に書いている内容を分かりやすく説明するというような形の授業になってしまった。生徒が意欲的に取り組む場面をあまりつくれなかったからである。授業後の指導教

諭のアドバイスやその後の授業参観を経て、「教科書を教える」のではなく、「教科書を使って教える」を意識して教材研究に取り組むようになった。その結果、教科書以外の内容や生徒たちが今まで知らなかった身近な事実やデータなどを授業にとり入れることによって、生徒の知的好奇心を揺さぶる授業に少しでも近づくことができたという手ごたえを感じた。これらの経験を生かして仕上げの研究授業に臨んだ。

研究授業では、それまで授業実習で自分の課題となっていた分かりやすい説明や指示、発問の仕方を特に意識して取り組んだ。中学校1年生ということもあり、まだ学習規律がしっかり定着していないため、1回の発問で2つ以上のことを考えさせないように、的確で簡単な指示、説明に努めることができたのではないと思う。しかし、説明や指示、発問に気を取られすぎてしまい、生徒から予想される反応を十分に考えられず、生徒の発言に対する切り返しなどが上手くいかなかった。自分が予想できなかった発言や自分が求めていた発言と違った場合でも、落ち着いて生徒から自分が求める発言を引き出せる切り返しの仕方などをこれから身に付けていきたいと考える。

授業の中で1つ直すと、また新たな自分の課題が見えてくるという連続であった。ベテランになってもそれは当たり前なことだと思し、日々より高い目標をもって工夫し続けることが重要である。今まで以上にPDCAサイクルを保って取り組み続けていきたいと改めて感じた。

### IV. 実習を通じて学んだこと

今回の授業を通して学んだことは沢山ある。特に重要だと感じたことを3つ述べる。

1つ目は、生徒とのコミュニケーションの仕方である。コミュニケーションの仕方には、主に2つあるということが分かった。1つ目は直接的なもの、2つ目は間接的なものがあるということである。直接的なものは会話などを中心にした対面でのやり取り、間接的なものは連絡帳や一人勉強ノートへのコメントである。どちらも生徒の何かを早期発見できるものであると同時に生徒との信頼関係を築くこと

に必要不可欠なものであるということを改めて実感した。そして、この2つは授業を行う上でも大切であると感じた。コミュニケーションを取ることによって、授業内で生徒が積極的に発言することにつながる。日常の生徒とのコミュニケーションと授業での生徒の反応等は、つながっているということがとてもよく分かった。一応、理論的には理解していたつもりだったが、実際に体験してみてその大切さが実感できた。より一層生徒との日々のコミュニケーションを大切にしていこうと思った。

2つ目は、授業のコーディネートの仕方である。学習過程の構成はもちろんだが、生徒が何を発言するか、生徒の発言に教師はどう切り返すか、教師が生徒にどう説明するかなど様々な方法で教師は授業をコーディネートしていることが分かった。また、教師は、授業の内容を教えるだけでなく、話の聞き方、起立の仕方、礼の仕方などの学習規律や生活指導もさりげなく授業の中に組み込まれていることを知った。これらのことが別々ではなく関連しているということがよく分かった。

3つ目は、板書の仕方である。私は、実習に行く前は、まずは黒板に必要なことをしっかり書いていくことに集中しようと考えていた。しかし、指導教諭の授業や自分の授業での経験を通して、重要な部分は色を変える、文字を大きくするなどといった工夫や黒板の中に写真や図を取り入れて生徒に視覚面からアプローチしていくという工夫など、様々な工夫があるのだということに気付かされた。さらに、黒板に貼る順番や書く順番は、一目見ただけで授業の流れが分かるような黒板でなければ生徒にとって分かりにくい黒板であるということも実感した。

今回の実習では新たな発見や気づきが生まれた。将来、教師を目指す人間として、この3つを特に意識して教育に対する知識や理解を深めていきたいと思う。

## V. 3年生へのアドバイス

私が、教育実習で特に大切にしてほしいことは、2つあります。

1つ目は、生徒とのコミュニケーションを積極的にとることです。生徒とのコミュニケーションは、ただ単純に生徒と仲良くなるためのものだけではなく、授業を行う上でとても重要になってくるものです。日頃からのコミュニケーションは、生徒との信頼関係が築かれ、授業内でのやり取りはもちろんのこと、生徒が素直に授業を受けたり、発言したりす

ることにもつながります。

2つ目は、自信を持って授業に臨めるようにしっかり準備することです。当たり前ですが準備が大切です。さらに、教師自身が、自信がなかったり、ネガティブだったりすると当然生徒たちの雰囲気や教師に対する信頼はなくなります。初めての教育実習で自分の能力を信じることは難しいと思いますが、教育に対する強い情熱や子どもに対する愛情をもつだけでも自分を信じるにつながります。そして、それは生徒にも伝わるものです。私は、この教育実習を終えて1番最初に出てきた感情は、大変だったという感情より「楽しかった」という感情の方が圧倒的に大きかったです。教育実習は、自分にとっては3週間の実習にすぎないかもしれませんが、生徒たちにとっては、1人の新しい先生との大事な出会いになります。その出会いが自分にとっても生徒にとっても価値あるものになるかならないかは自分次第です。自分が生徒に何かをしてほしいと願うのではなく、自分が生徒に何をしてあげたいかを1番に考えて行動してみてください。応援しています。頑張ってください！

## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 若井 潤

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年5月23日(月)～6月10日(金)
- ・実習校：新潟県内中学校
- ・担当学年：1年生
- ・担当授業：体育、道徳
- ・部活動等：陸上長距離クロスカントリースキー部

### II. 教育実習の詳細と反省

私の実習校は、全校合計4クラスしかない学校であり、人数は少ないが生徒一人ひとりを手厚くサポートすることができる学校であると感じた。

私は1学年部で主に実習を行わせていただいたが、週に一回の1学年部会をはじめ、毎日クラスや生徒個人の状況などを共有し、指導やサポートなどを行っていると感じた。

また、実習期間中には、遠足、テスト、避難訓練などがあり、それぞれに対して学年を越えた教員全員で連携し、教育活動に取り組んでいた。遠足では、生徒と共に歩く教員や遠足のコースを巡回する教員が連携を取り、安全に生徒が完歩できるようにしていた。また、テスト期間には、授業を短縮し、放課後にできた時間で各教科の質問教室を開設し、各教員がそこで教えるなど、教員全体で学習を支援していた。

どれだけ各教員が個々に素晴らしい教育を行っていたとしても、連携が取れていなければ教員によって指示が違うなどの混乱が起きかねない。しっかりと教員が同じ方向を向き、連携することが生徒たちが迷わず進んでいける要因だと感じた。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

私は研究授業で1年生の走り高跳びを担当させてもらった。時数も1時間目であったため基礎的な内容を行う必要があった。さらに、実習校には走り高跳びのための道具が1セットしか置いていないため、バーを使った授業は運動量の確保の面から行うことはできないという状況であった。そこで、最初は生徒を数班に分け、縄跳びを用いて跳ぶことにより、跳ぶ機会を多くし、運動量を確保する指導方法にしようと考えた。

しかし、縄跳びではどうしても引っかけた時の

危険性が高いこともあり、安全管理の面からゴムひもを用いることにして研究授業を行った。結果的にはゴムひもでも引かかる生徒がおり、ゴムひもを用いたことで怪我を防止することができた。また、ゴムひもを用いた跳躍練習のほかにも、バスケットゴールを利用し踏み切り練習を行うなどの活動を取り入れた。道具が十分でない場合でも工夫次第でいろいろな可能性が生まれることが実感できた。

### IV. 実習を通じて学んだこと(今後どう生かすか)

一つ目は、声の大きさである。単純なことであるが私自身、コロナ禍で授業回数が少なかったこと、友人にあまり会えずに実習に臨んだことなどにより、大きな声が初めの方は出なかった。腹から声を出すように意識することにより、徐々に生徒に聞こえる声量で話すことができた。

二つ目は、指示や説明の言葉選びである。体育の授業はただ話せばいいわけではないと強く感じた。長い説明は理解しにくいだけでなく、運動する時間を犠牲にしてしまう。そのための確に、簡潔に話す必要があると感じた。これに関してはまだまだ改善が必要であると感じた。

三つめは、指示や説明をする際の教師の位置である。生徒が並んでいる以上指示などが聞きやすい、あるいは見えやすい位置というのは一人一人によって少しずつ違う。実際に私も授業でドリル走を行っているとき、列の後ろに行くほど指示が聞けていない生徒が多かった。それは教師自身の注意によって改善できるものであると指導教諭から指摘されてよく分かった。

このようなことは何も学校教育の場面だけでなく、運動やスポーツなどを指導する場においても必要なスキルとなる。今後、実際に現場で生かせるように意識していきたい。

### V. 3年生へのアドバイス

まず、実習前の準備についてです。基本的に実習1～2週間前に事前打ち合わせという形の実習校での打ち合わせを行うことになると思いますが、この際に特に体育の授業で行う単元について聞いておくようにしましょう。実習が多く行われる6月ごろは

主に陸上競技を行う学校が多いですが、陸上競技であっても自分が得意ではない、または今までやったことない種目になる可能性があります。実際に私は今まであまりやったことがなかった高跳びを研究授業では行いました。もちろん変更になることもありますが事前打ち合わせで聞いた単元は学習指導要領を読んでおくなどの最低限の準備を行ったほうがよいと思います。

また、事前に購入しておくとう便利なものも紹介します。

一つ目は、学習指導要領解説（保健体育）です。大学の授業で使っているため、持っていると思いますが、これは研究授業のみならず、日々の授業の指導案を作るために必須です。必ず購入し、実習に持っていきましょう。

二つ目は教科書や実技書などです。実習校で貸してくれることも多いと思いますが、持つておくことで事前に生徒への問いかけの内容や強調したいところを書き込んでおくことができます。また、実技書は動きの説明の際に持つておくとうヒントが多く記載されているため便利です。もちろん皆さん自身の中学や高校で使用したものでもいいですが、生徒と同じものを購入するほうが授業中に生徒に見てほしいページなどを伝える際に便利です。

三つめはA4サイズの硬質ケースです。これは生徒に書いてもらったワークシートなどを汚さず保管するのに必須です。また、外で授業を行う際に急な雨にも対応できます。以上三点は買っておいた方がいいでしょう。（その他ホイッスルなど、当たり前のものは今回省きます。）

次に、実習中についてです。まず、声の大きさについてです。普段の挨拶を大きな声で行うのはもちろんですが、体育の授業などは特に広いスペースで行うため、生徒によっては何を言っているのかわかっていない人も出てきます。自分で思っているよりも3倍の声を出しましょう。特にフルで模擬授業を行っていない人はかなり最初は苦勞すると思います。

そして、通勤についてです。実習校の先生方は実習校の生徒の指導の空き時間で私たちに指導してくれています。基本的に放課後に指導していただくことも多いと思います。このため想定している時間に帰れることは少ないです。新潟医療福祉大学は車での通勤を認めていないため、すぐに帰れるわけはありません。3週間は短いですから明日指導いただくということもできないことも多いです。そうな

れば実習校の場所によっては21時以降の帰宅になる可能性もあります。都市部への実習の人はいいですが、地方に行く人は送迎を頼んでおくなどの対策があってもいいと思います。

実習はとても短いです。多くのことを学べるようにしっかりと準備（指導案・健康面）を行い、より実りのある実習になるようにしましょう。

## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 川下 季恵

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年5月23日(月)～6月11日(土)
- ・実習校：福岡県内私立高等学校
- ・担当学年：1年生
- ・担当授業：体育(バレーボール)
- ・部活動等：サッカー部

### II. 教育実習の詳細と反省

私は福岡県にある母校で5月23日～6月11日の3週間、実習を行わせていただいた。私は高校1年生、4クラスの保健体育を担当し、ホームルームは1年3組の担当になった。体育の授業以外にも、LHR(学級活動)に参加したり、学年集会で全体に指導したりする機会も頂いた。

今回の教育実習で、授業を見学したり、実際に自分が授業を行ったりすることで、改めて教員としての資質・専門性が大切だと感じた。指導する際、教師がただ生徒にホワイトボードを使って説明するのではなく、実際に生徒を動かしながら動きの中で説明したり、実践の時間を多く取り入れたりすることで、生徒に「わかる・できる」を感じさせることができることを実習を通して実感することができた。また、クラスによって能力や雰囲気異なるため、クラスの状態に合わせて様々な工夫を取り入れることが重要であることを実感した。さらに、体育の専門知識はもちろん、教師として生徒を観る力、教育愛や熱意が自分の専門教科に関係なく必要であると感じた。

また、生徒一人一人の障がいの程度、状態や教育ニーズに応じた質の高い教育をするためにも、専門的指導の充実を図ることが必要だと感じた。私が担当していた高校1年生は車いすの生徒や身体に障害を持つ生徒が多くいた。指導教諭は、どの生徒にもその生徒ができるボールを使った運動を提示し、その生徒に合った声掛けなどの指導を行い、個々のニーズに応じた授業を展開していた。指導教諭の指導から学んだ私であったが、自分が担当する授業の際、見学者に配慮することができなかった。実際に授業していたらそこまで考える余裕がなかったのである。その生徒は、私が何も言わなくても、これまでの学習で学んだことを生かし、自分で考え、仲間

に伝えていた。このように、生徒の姿から学ぶこと、生徒に助けてもらったことが多くあった。

これらの経験を踏まえ、個々のニーズに応じた指導を行うためにも、教員としての資質・専門性をさらに磨いていきたい。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

私はホームルーム担当である1年生でバレーボールの研究授業を行った。授業を行っていく中で、自信を持って指導すること、場に応じた声の大きさ、教師自身がチャレンジすることなどの重要性を強く実感した。

研究授業までに担当した授業の反省を生かし、研究授業では、場を飲み込むような大きい声と教師として自信を持って授業を行えるように準備をした。その結果、正直、自分でも研究授業だということを忘れるくらい生徒と一緒に楽しみ、今までで一番楽しく良い授業を行うことができたと思う。先生方からもお褒めの言葉を頂き、なによりも生徒たちから今までで一番楽しい体育の授業だったということも伝えられ、とても嬉しかった。こんな授業ができたのは、授業外でも積極的に生徒とコミュニケーションをとり、良い関係性を築くことができたからだと思う。

しかし、見学者への対応や安全管理が至らなかったことが反省点である。そのため、個々のニーズに応じた授業づくりや授業前後はもちろん、授業中も声掛けを行いながら全体をよく見て、安全管理を徹底的にし、改善を図っていきたいと思った。

### IV. 実習を通じて学んだこと(今後どう生かすか)

今回の実習を通して、本当に多くのことを学んだ。技術や知識はもちろん必要だが、それ以上に生徒を惹きつける元気の良さ、大きな声、教師の自信が重要だと強く心に感じた。実習1週間目の初めは戸惑ったり、自信がなさそうに指示や説明をしてしまったりすることが多かった。その際、指導教諭から、「自信を持って、先生として引っ張っていきなさい。場を飲み込むことが重要だ。」とアドバイスを受け、徐々に失敗を恐れず堂々と授業を行えるようになった。失敗することが多くあったが、むしろ

ろ、失敗が私の成長、学びへと大きくつながっていた。失敗はすればする程、成長につながっていると強く感じた。今後も失敗を恐れず、果敢にチャレンジし続けていきたい。

また、クラスによって雰囲気や取り組む姿が全く違った。特に体育では日頃のクラスの状況が現れることがよく分かった。しかし、この状況を変えることができるのも体育であり、それが体育の良いところであり、改めて体育の良さや魅力を知るきっかけになった。また、クラスによってやり方を変え、失敗したら改善、成功したらもうひと工夫等、常に試行錯誤を繰り返していくことが大切だと感じた。同じやり方、マニュアル通りではうまくいかないことが分かった。「十人十色」、この言葉を胸に刻み、小学校の教育実習や今後の教育現場、日常生活に生かしていきたい。

れず、楽しみながら頑張ってください。

## V. 3年生へのアドバイス

私は、この実習でチャレンジすることの大切さを改めて感じました。失敗しても、自分が成長できる、学ぶことができるチャンスだと気付かされました。失敗する程、良い教師になれると指導教諭からも助言をいただきました。授業でうまくいなくても、改善し、工夫を取り入れ、試す、このサイクルを回していくことで、よりよい授業へとつながると思います。チャレンジしないと起きないこと、見えないことが多くあります。失敗を恐れず、環境を最大限に活用し、周囲を巻き込み、チャレンジしてみてください。

また、積極的に生徒とコミュニケーションをとることをお勧めします。自分から生徒にコミュニケーションをとることで、生徒も徐々に心を開いてくれます。これが、信頼関係を築くことにつながり、自ずと授業にもつながります。私は生徒と仲を深め、信頼関係を築くことができたからこそ、楽しく良い研究授業ができたと思います。研究授業では、生徒がいつも以上に頑張ってくれたし、協力してくれたので、生徒にとっても助けられました。そのため、授業外でも積極的にコミュニケーションをとり、仲を深められると良いと思います。

3週間は長いようですが、あっという間です。学校現場に出ないと分からないこと、感じられないこと、学ぶことがとても多くあります。常に学びがあるので多くのことを吸収し、よりよい3週間にしてほしいと思います。先生方から学ぶことはもちろん、生徒からも学ぶことが多くあります。失敗を恐



## 教育実習報告

健康科学部 健康スポーツ学科 庭山 蒼太

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年9月5日(月)～9月22日(木)
- ・実習校：新潟県内私立高等学校
- ・担当学年：3年生
- ・担当授業：体育、保健
- ・部活動等：卓球部

### II. 教育実習の詳細と反省

体育の授業では感覚的にできる生徒や見本を見せてイメージをやすくすることによってできる生徒がいるため、生徒一人一人に合った方法をうまく使い分けていくことが特に重要だと感じた。

また、同じような練習を行った時にどうしてもできる人とできない人の差がある時、できる人にとっては退屈な授業になってしまう。そのため、そういった時に手本を見せる役や指導や補助をする役を生徒にお願いしていくことも有効であると感じた。そうすることによってできない人を置いていかずに、できる人も説明やアドバイスをすることで、体の動きなどについてより深く考えていけるのではないかと考える。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

保健や体育の授業でも、もう少し生徒と対話をする形で行っていくことが必要だと感じた。研究授業では、体育のサッカーの授業を行った。生徒たちがゲームを行っているときに褒めてあげたりアドバイスを送ってあげたりしたのだが、まだまだ十分でできたとは言えなかった。生徒との対話を意識して行ったつもりであったが、もっとできることがあったということが授業を振り返ってみて分かった。指導教諭が自然に行っていることもいざ、自分がしようとするとは簡単ではないことが実感でき、教師の力量を高めることの難しさを自覚できた。

もう一つ、研究授業のように力を入れたのが保健の授業であった。しかし、実際に授業をすると私が一方的に話をしてしまい、生徒に質問を投げかけることが少ないと感じた。大学での模擬授業でもそれを学んでいたし、指導案上では工夫したつもりであったが、実際に50分の授業をすると計画を全部しなければと思ってしまい余裕がなかった。教

師と生徒、生徒同士が対話を行うことによって、より授業も盛り上がってきたり、生徒が授業に積極的に参加したりすることができるので、この点も予想以上に難しかった。

### IV. 実習を通じて学んだこと（今後どう生かすか）

3週間の教育実習を通して、体育の授業で生徒へ指導するとき、生徒の安全管理への配慮が自分には足りていなかったと感じた。注意はしていたつもりだったが、指導教諭の指摘等を受けて、まだまだ想像力が足りないと思った。生徒の安全管理というのはただ生徒に指示や説明をするだけではなく、体調を気遣ってあげたり環境を整えてあげたりすることが重要なことだということを知ることができた。体調を気遣うという面であれば、外でサッカーやテニスの授業を行い、気温が高い日であれば生徒が喉渇いたと言わなくても水分補給の時間を作り熱中症に注意することや、遅刻者に遅刻の理由を尋ね怪我などをしていないか確かめること、授業の最後にきちんと体調がすぐれない人がいるか確認することがとても重要だと気づいた。もちろん、これらのことが重要であることは理解していたが、実際に授業をしていると自分に余裕がないこともあり、うっかりしてしまうことがあった。もっと想像や想定する力を付けなければならぬと感じた。

環境を整えるということであれば、準備運動の時やサッカーでパスの練習をしている時にコートを大きく使い、十分に生徒たちが距離を取れるようにして隣の人たちとぶつからないようにすることや、球技ではどの方向にボールを打つようにするのか、サッカーのゴールを立てる位置は隣でソフトボールがやっていたら近くに置かないようにするといったことを行うことが重要である。

私は、これらのことが十分にできていなかった。やはり余裕がなかったのだと思う。後半は意識してできるようになったものもあったが、まだまだ生徒への配慮が足りていないことが多かった。球技を行うときに生徒たちとの距離を十分にとるといったことでは、最後のサッカーの授業の時に生徒の数が奇数であったため私が余っている生徒とパスの練習の練習をしていたが、生徒たちの距離が近いのを気

づくことができず、注意を行うことができなかった。こういう時にも周りをしっかりと見て気づいてあげることが重要なことなのだと思う。事前に指導案などにもそのような注意事項を記入して生徒の安全管理に努めることもとても重要なことだと感じた。

また、保健の授業で私は、保健制度とその活用と医療制度とその活用という単元を担当したが、そういった生徒にとってはまだ身近に感じられない内容の授業で、生徒にいかに関心を持ってもらうのかといったことが重要であり、難しいことだと感じた。生徒が現段階では関心を持ちにくい、生きていく上ではとても大切なことは沢山ある。もう少し導入の部分で生徒との対話を行ったり、クイズ形式をとったりなどの工夫をして、生徒の興味を高めるようにした方がよかったと思った。

さらに保健の授業と体育の授業で共通していることとして、私自身が生徒に伝えたいことをもう少しわかりやすく説明することが重要だと思った。最初の体育の授業では生徒に説明を行ってもわからない顔をする人が多く、指示があまり通っていなかったと感じた。後半の授業では生徒が慣れてきたこともあり、生徒が私の指示の足りない部分を自分で補って動いてくれることが増え、生徒に助けられた場面がとても多かったと思う。保健の授業では説明を行っている時に自分でも何を言っているのかわからなくなることがあった。このことから私は自分の言いたいことをきちんと言ったり考えをまとめたりすることがまだまだ足りていないと感じた。この時に説明をするときは事前にしっかりと考えておくことや、話す前に十分に頭の中を整理してからわかりやすく説明を行うということをしていく必要があると思った。

## V. 3年生へのアドバイス

事前に担当する教科がわかっているのであればその指導案を早めに作成して指導教員の先生に見てもらうことをお勧めします。

実習が始まって担当する授業の指導案は遅くても前日に見てもらうようにして余裕を持って修正できるようにしておいた方が良いでしょう。

そうしないと授業前にバタバタしてしまい、安心して授業に臨むことができません。こういったことは早め早めにやっておくことがとても重要ですので気を付けるようにしてください。

また、生徒を教育する立場にありますが、生徒と

の距離が遠すぎるのもよくないと感じました。友達と同じようになるのはよくありませんが、早めに名前を覚えてあげる、自分から話しかけるなどのように、適切に生徒との距離をつめていくことを行うと良いです。これらの工夫によって、生徒が授業に積極的に参加してくれるようになると思います。

## 養護実習報告

看護学部 看護学科 遠藤 睦実

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年5月23日～6月10日
- ・実習校：新潟市立早通南小学校
- ・担当学年：1年生
- ・担当授業：特別活動（保健）
- ・主な実習内容：保健室来室者対応、救急処置、健康診断、学校環境衛生検査、健康観察板の回収、保健指導、授業参観

### II. 教育実習の詳細と反省

#### 1. 保健室来室者対応

保健室来室者対応では、問診や応急手当の実施を行いました。問診では児童の発達段階に合わせて言葉を選ぶことや、5W1Hを意識することで、児童の発言から具体的な情報が得られると学びました。応急処置では、児童に声をかけながら素早く行うことで、児童を安心させることができると学びました。

#### 2. 健康診断

健康診断では、歯科健診の補助、内科健診・耳鼻科健診の観察を行いました。健診をスムーズに進めるために、医師や養護教諭の手に取りやすい位置に必要な物品の準備を行うことや、事前に教職員間で打ち合わせを行い、教職員それぞれの役割の理解を図ることが大切であると学びました。

また、健康診断時においてもしっかり感染症対策がされていました。待機時間は密になりやすいため、児童間の距離を空けて並ばせることや、児童が私語をしないように、事前に指導を行うなど、感染症対策を行うことの重要性を学ぶことができました。

#### 3. 児童との関わり

児童との関わりでは、自分から積極的に名前を呼んで声をかけることや、児童の話には共感的な姿勢で聴くこと、児童との約束は必ず守ることを意識し関わりました。普段からの養護教諭の言動が、児童との信頼関係を築く上で重要であると学びました。児童にとって養護教諭という存在に親しみをもって

もらうことは大切ですが、心の距離が近くなりすぎないように、程よい距離感を保つことがより重要であると学びました。「学校」は子どもを育てる場所であるため、児童が自ら行動できるように指導を行うことや、児童が正しくない行動をした時には注意を行い、社会性を育てることが重要であると学びました。

#### 4. 教職員との連携・情報共有

実習を通して、養護教諭と教職員が連携を図っている場面が多くありました。

低学年の児童が怪我をし、保健室に来室する際には、学級担任も同行してもらい、学級担任からその時の状況を詳しく聴いていました。特に低学年は、伝えたいことを上手く表現できないこともあるため、学級担任からも話を聴き、その後の対応の判断に活かすことができると学びました。

会議を通して、養護教諭はすべての教職員に対して、教室や廊下の常時換気を促し、感染症拡大防止を図っていました。毎朝、各教室をまわり、換気が不十分なクラスがあった時には、学級担任に直接伝えていました。クラスターが発生しないよう、感染症予防の重要性について、教職員で共通理解を図る大切さを学びました。

#### 5. 保護者との連携・情報共有

養護教諭は保護者に、児童が怪我をした時の状況や児童の様子、病院に連れていく必要のある理由を端的に分かりやすく伝えていました。養護教諭がしっかりと伝えることで、保護者の心配を軽減させることができると学びました。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

保健指導では、新型コロナウイルス感染予防として「正しいマスクの付け方」について授業を行いました。担当したクラスの実態として、児童の約半数が授業時や帰りの会の時間に、鼻の下からマスクを着用していたり、一部の児童が教室でマスクを外して遊んだりしていたため、保健指導を行いました。工夫したことは、①1年生でも理解できるように言葉を選んで説明を行ったこと②児童の興味・関心を

引き出せるような教材を作成したこと③新型コロナウイルス感染症防止に向けて、マスクを正しく付けることの大切さについて考えられるようにしたこと、の3つです。授業を実施してみて、ただ指導案通りに進めるのではなく、児童の反応を見ることや発言を拾い、児童が主体となるように授業を展開していくことが重要であると学びました。また、課題について、児童が自分ごととして捉えることができるように、現在の自分自身のマスクの付け方がどうであるのか、確認する時間が必要であったと思いました。

#### IV. 実習を通して学んだこと

実習を通して、養護教諭は、常に様々な仕事を抱えているため、優先順位を考えて行動することや、臨機応変に対応することが重要であると学びました。養護教諭一人だけでは対応できない仕事もあるため、管理職や他の教職員等と協力して業務を行うことや、報告・連絡・相談を徹底して行う必要があると学びました。教職員全員で児童をみることで、児童の怪我や事故、感染症等を防止することができ、児童の健康と安全を守ることにつながると学びました。

#### V. 3年生へのアドバイス

養護実習初日は、緊張や不安があるかと思います。しかし、学校の先生方は丁寧なご指導をしてくださったり、温かい言葉をかけてくださったりするため、安心して実習を行うことができます。優しく頼もしい先生方ばかりであるため、実習中に分からないことや不安なことがあった時は、そのままにせず積極的に質問するとよいと思います。また、学校には、たくさんの子供達がおりにぎやかで楽しい時間を過ごすことができます。子どもの視線に合わせて笑顔で話しかけてみたり、一緒に遊んだりすることで、自然と子どもとの距離も縮まると思います。3週間あっという間な実習になると思いますので、色々なことを学びながらも楽しい実習になることを願っております。

## 養護実習報告

看護学部 看護学科 吉田 柚理

### I. 実習概要

- ・実習期間：2022年5月23日～6月10日
- ・実習校：新潟市立松浜小学校
- ・担当学年：6年生
- ・担当授業：特別活動（保健）
- ・主な実習内容：運動会、保健室来室者対応、救急処置、健康診断の補助、水質検査、授業参観

### II. 教育実習の詳細と反省

#### 1. 保健室来室者対応

外科的・内科的な症状で保健室に来室した児童の対応として問診や救急処置の見学や実施をしました。休み時間の終わりごろになると来室者が増えてくるため、優先順位をつけて迅速に対応していくことが重要だと学びました。また、問診や救急処置の時間は、どうすればケガが防げたかなど健康や安全について指導する場であるということを学びました。

#### 2. 健康診断

健康診断では、眼科健診と歯科健診の補助をさせていただきました。スムーズに進められるように、事前に児童と教職員に準備や流れを説明しておくことが大切であると学びました。教職員には、朝会時に説明をして児童には保健だよりを配布することや、学級担任から説明をもらうなどしていました。また、健診後は健診中の児童の様子の記録、学校医と児童の健診結果について話し、児童の実態を把握することができる重要な機会であると学びました。

#### 3. 学校行事前の保健指導

修学旅行前に、女子児童の月経指導を見学させていただきました。デリケートな内容なため女子だけで実施するなど配慮をしていました。また、修学旅行用の月経指導のハンドブックを作成し、女子児童がいつでも振り返ることができるように準備をしていました。月経指導において、プライバシーの配慮を十分に行うことや自分自身で対応できるようにする目的のために実施しているのだと学びました。

#### 4. 学校行事での準備と救急処置等（運動会）

運動会の前日には、運動会で必要な物品の準備を行いました。運動会で起こり得そうなケガや症状を想定し準備することが大切であると学びました。また、運動会当日は主にケガや具合の悪い児童の対応やトイレの巡回、消毒液の設置等を行いました。1人ですべて行うのは難しいため、保健委員の児童と協力して準備や作業することが必要だと学びました。

#### 5. 児童との関わり方

保健室での児童との関わり方については、まず児童と目線を合わせることや児童の発達段階に応じて話す言葉やスピードを変えていくことが必要であると学びました。発達障害を持つ児童もいたため、それぞれの特性に合わせて臨機応変に対応していくことが大切であると感じました。また、いつも優しくだけでなくメリハリをつけて接していくことが必要であると学びました。ダメなことはダメとはっきり伝えないと児童に伝わらないことがあるということを学びました。

### III. 研究授業の概要と工夫・反省

#### ○概要

去年の生活習慣アンケートの結果から、就寝時間が遅いことや朝ごはんを食べていない児童が多く、生活習慣の乱れが気になったことから「生活習慣病の予防」についての保健学習を実施しました。1日の生活が乱れている人の例を挙げて、何処が悪いのか考えてもらい、生活習慣病という病気について関心を持ってもらいました。その後、事前にクラスで生活習慣アンケートを取ってもらいその結果をみて、クラスの実態と自分自身の生活習慣の振り返りをしてもらいました。そして、自分の生活習慣の改善点を考えてもらいました。

#### ○工夫

6年生では、まだ生活習慣病について自分事として取らえることが難しいため、導入の時間にいかに関心を持ってもらうかを工夫しました。実際に、日本人の死因の具体的な死因を提示することや血管の画像を使いイメージしやすいように工夫しました。

○反省

アンケート結果から自分自身の生活へと落とし込むことが難しかったです。また、指示の仕方があいまいになり、何をしたいのか分からないというような児童がいました。次に何をするのか、はっきりとわかりやすく伝えることが必要だと学びました。また、授業中に児童とのコミュニケーションを取ることが少なかったと思いました。児童の発言を掘り下げることができれば、より児童と教員との間の一体感が生まれ、学びが深まると学びました。

#### IV. 実習を通して学んだこと

児童との信頼関係を構築することが大切だと学びました。保健室はいつだれが来ても温かく迎えてくれるような場所であると思います。それは、児童と養護教諭との間に信頼関係があって成り立つことでもあると思います。常に明るくあいさつをすることや、コミュニケーションをとること、些細な変化に気付いてあげることなど日常生活の関わりを積み上げていくことが大切であると学びました。また、他の教職員との連携が重要であると学びました。管理職や学級担任、栄養教諭、ボランティアの方、保護者など多くの人たちと関わります。児童の安全と健康を守るために連携することが必要だと学びました。また、頻繁に保健室に来室する児童がいるときも、学級担任と密に連携をとり、解決していくことが大切だと学びました。養護教諭は一人職務です。そのため、他の教職員に協力をあおいでいくことも大切であると学びました。

#### V. 3年生へのアドバイス

最初は、学校の環境に慣れることや児童、教職員との関係性を築いていくことで大変だと思います。しかし、先生方や児童は優しく、積極的に話しかけてくれます。なので、自分からも積極的に関わっていくといいと思います。また、実習中は分からないことや不安なことが出てくると思います。その時は、積極的に養護教諭や学級担任の先生に相談してみてください。頑張ってください！

## 教員採用試験受験報告

健康科学部 健康栄養学科 木戸浦 涼葉

### I. 教員を目指した理由・きっかけ

私は、大学時代の様々な年代の方との関わりから、食と環境を自身の生活とつなげ考えていく力が大切であると学び、「食の専門家」として子どもたちに教育できる栄養教諭を志望しました。私は、高齢者の増加や生活習慣病などの健康問題や、温暖化や食品ロスなどの環境問題に対応し、生きていく力を身につけさせたい思いから、栄養教諭を志望しました。

### II. 大学時代に力を注いだこと

食に関するボランティア活動に力を入れました。子ども食堂の企画運営や、学生アスリートの栄養指導など、栄養士として様々な知識を身につけるだけでなく、知識を生かした指導力や個人に合わせた対応力を身につけることができたと思います。

### III. 学習の進め方（時期、教材、方法、場所）

3年後期から栄養教諭を意識し始め、学内講座の受講を開始しました。4年4月ごろから、1次試験の勉強、並行して願書の作成と2次試験の面接練習を始めました。1次試験は市販の参考書と過去問題を中心に解き、2次試験は教員採用試験を受験する健康スポーツ学科、健康栄養学科の友達と一緒に、質問し合いながら形式に慣れることから始めました。

### IV. 気分転換

受験予定の友達と話すことや、ラジオを聴くことで気分転換をしました。私は疲れたときには思い切って休むようにして、しっかりとリフレッシュするようにしていました。

### V. 採用試験合格に向けて、勉強以外に行ってきたこと

話すことに慣れるよう、何人かの先生に面接練習をお願いしました。そこで面接練習をするだけでなく、試験とは関係のない話をするなど、目上の人と話す緊張感を少しでもなくせるよう、いろいろな方と積極的に話す機会を設けるようにしました。

### VI. 試験までに「やっておいてよかった」、「やっておけばよかった」こと

もう少し過去問を重点的に勉強しておけばよかったと思いました。形式に慣れることや頻出問題を確実に押さえておくことで、本番ではもう少し楽に解くことが出来たと思います。

### VII. 試験当日の雰囲気と自らの心理状況、焦ったこと

そんなに根詰めて勉強できていなかったこともあり、1次試験の会場では全員が頭よく見えて自信を無くしました。参考書の付箋や、マーカーだけでは勉強量は測れないので、周りをそんなに気にしない方がいいと思います。2次試験では、やはりすごく緊張しましたが、対話を意識して落ち着いて話すように心掛けました。

### VIII. 後輩へのアドバイス

教員採用試験の受験は少々大変な道ではありますが、合格後の教員生活をイメージしたり、自分のやりたいこと、成し遂げたい夢を具体的に持っていたりすると、希望に満ちた受験期になると思います。たくさん寝てたくさん食べて受験を乗り越えてください。

## 教員採用試験受験報告

健康科学部 健康栄養学科 久保田 涼香

### I. 教員を目指した理由・きっかけ

私が教員を目指したのは、父の一言がきっかけです。私が妹に勉強を教えている様子を見ていた父が、「教えるのが上手だった」と声をかけてくれました。もともと子どもと関われる仕事に憧れがあったことや「教える」という自分の得意を生かせることから、教員を目指すようになりました。

また、学校で働くことができる職種を探している際、栄養教諭という職業を知りました。生きていくうえで欠かせない「食」に関われる仕事であること、大好きだった給食に携われる仕事であることに魅力を感じ、栄養教諭を目指しました。

### II. 大学時代に力を注いだこと

大学時代に力を注いだことは、個別指導塾でのアルバイト活動です。小・中学生に勉強を教えるという経験をしたことで、各学年にあった指導の仕方や同じ学年であっても個人によって伝わりやすい言い方が異なることを知りました。

### III. 学習の進め方（時期、教材、方法、場所）

大学三年の8月頃から東京アカデミーの参考書や協同出版の過去問書を用いて一次試験の勉強を始めました。参考書を三周してから過去問を解き、苦手なところを再度参考書で確認しながら勉強を進めました。間違った問題には印をつけながら解くと効率よく勉強を進められると思います。また、私の場合は参考書で知識を蓄えてから過去問を解きましたが、過去問を解いて問題の傾向を知ってから必要な知識を取り入れる方が良いと感じる方もいると思うので、自分に合ったやり方を見つけるといいと思います。また、一人では怠けてしまうので、大学の図書館や地域の公民館などを利用して勉強を進めました。

二次試験対策は学内講座に参加し、大学三年の後期から始めていましたが、本格的に取り組んだのは一次試験が終わってからだったと思います。教員採用試験を受ける友人と一緒に面接対策をすることで、友人を参考にしながら練習することができたり、自分を客観的に見ることができたりするのでおすすめです。

### IV. 気分転換

YouTubeやテレビを見たりすることで気分転換をしていました。集中力が続かなくなった時はダラダラ勉強せずに、一度休憩する方がその後の勉強が捗ると思います。ですが、YouTubeやテレビを見ていると、気付いたら数時間経っていたということもあるので、「ここまでやったら〇分間休憩する」といったように時間で区切りをつけ、メリハリを持たせることが大切だと思います。

### V. 採用試験合格に向けて、勉強以外に行ってきたこと

近隣小学校でのボランティア活動やゼミでの食育活動を行っていました。

小学校でのボランティア活動では、授業補助、調理実習補助、町探検引率、給食時見学等をさせていただき、児童と関わり合うことを通して教育現場を知ることができました。

ゼミでの食育活動では、小学6年生を対象に、煮物やキャラ弁の調理実習の企画・運営、バランスのよい弁当についての講義を行いました。児童に伝わりやすい教材づくりの重要性、計画通りに授業を進行することの難しさ、児童への問いかけ方などを学びました。

### VI. 試験までに「やっておいてよかった」、「やっておけばよかったこと」

やっておいて良かったと感じたことは、勉強に関する自分の苦手分野をまとめた一次試験対策用のノートと面接練習で教職支援センターの先生方からアドバイスしていただいた内容をまとめた二次試験対策用の資料を作成したこと。ノートや資料に要点をまとめることで苦手や意識すべきことが明確になり、対策しやすくなるのでおすすめです。

やっておけば良かったと感じたことは、なぜ栄養教諭になりたいのかという自分の軸を早く作ることです。私は、自己PRシートを作る際、栄養教諭になりたいという漠然とした自分の思いを、分かりやすく言語化することに苦勞しました。そのため、自分の軸を早くから作っておくことで、出願時の資料作成も困らなかったり、面接で追加質問をされても



堂々と答えられたりするようになったのではないかと思います。

#### **VII. 試験当日の雰囲気と自らの心理状況、焦ったこと**

一次試験について、模試や過去問を解いているときは時間が足りなくなることはなかったため、本番でも大丈夫だろうと油断していました。ですが一次試験本番では、緊張のせいか、問題に集中できず、解き切るのがぎりぎりになってしまいました。全く緊張しないことは難しいかもしれませんが、本番だからといって変に気負いすぎず、練習と同じようにリラックスして臨めるといいと思います。

二次試験では、個人面接が二回行われました。一回目の個人面接が始まるまでは、緊張感や不安感がありました。しかし、面接が始まってからは、穏やかな面接官の雰囲気のおかげでリラックスして受け答えすることができました。二回目の個人面接では、学級担任や養護教諭の立場で考えなければならぬ質問が来た時に焦りました。また、この質問に上手く答えられなかったため、「こう答えればよかった」と感じながらその後の質問に受け答えしてしまいました。たとえ上手く答えられなかったとしても、やり直すことはできません。いい意味で開き直って、それ以降の質問に集中できると良いと思います。

#### **VIII. 後輩へのアドバイス**

周りの人を沢山頼ってほしいです。教員採用試験に向けて勉強に取り組んだり、ボランティア活動を行ったりと個人で努力できることはあります。ですが、個人の努力だけで試験に合格するのは難しいと思います。応援してくれた家族、勉強や面接試験対策などを一緒に頑張った友人たち、試験に対する悩みを聞いてくださったり指導してくださったりした教職支援センターの先生方など周りの人の支えがあったからこそ、私は試験に合格することができました。支えてくれる周りの人に感謝しながら、一人で頑張りすぎないようにしてほしいです。応援しています。

## 教員採用試験受験報告

健康科学部 健康スポーツ学科 山下 真緒

### I. 教員を目指した理由・きっかけ

私が教員を目指した理由は、中学3年生の時の担任に「教員向いてると思うよ」と言われたからです。私は歌が好きだったので、歌手になりたいと思っていました。しかし、三者面談を行った時に、担任の先生が「歌って踊れる教員になればどう？」と声を掛けてくれました。私は人に教えることや子どもが好きだったので、すぐに教員という職業に惹かれました。その頃からずっと教員を目指しています。

### II. 大学時代に力を注いだこと

私は学習支援ボランティアに力を入れてきました。学習支援ボランティアは大学4年間続けてきました。子ども目線ではなく、教員目線で物事を考えることがとても新鮮で、どれも勉強になることばかりでした。実際に現場に出てみないと分からないことも沢山あり、子どもとの接し方、言葉の伝え方、褒め方などを学ぶことが出来ました。そして何よりも4年間行ってきたので、自信ができました。最初は不安でいっぱいでしたが、早い時期から経験して本当に良かったと思っています。

### III. 学習の進め方（時期、教材、方法、場所）

私は部活動を行ってこなかったため、大学3年生の8月頃から少しずつはじめました。教材は東京アカデミーや過去問を使っていました。あと、調べたらすぐ出てくるような教材は全て使っていたと思います。方法としては、過去問をひたすら解き、分からないところ苦手なところは参考書などを読んでいました。あとは、友達と問題を出し合ったり（ある程度知識がついたら）、学習支援センターで担当の先生に教えて頂いたりしていました。場所は図書館、公民館、大学、自分の部屋、リビング、教職支援センターなどで行っていました。様々な環境でやるのが、私には合っていました。

### IV. 気分転換

私はサウナや岩盤浴によく行き、気分転換をしていました。友達と遊びたかったのですが、試験に集中したかったため、あまり遊ばなかったです。

### V. 採用試験合格に向けて、勉強以外に行ってきたこと

学習支援ボランティアはもちろんですが、アルバイトも頑張ってきました。会話することが得意では無いので、お客様やスタッフと会話をし、自分からスラスラ話せるように努力してきました。そのおかげで面接ではスラスラ話せるようになりましたし、教育実習でも上手に伝えることが出来たと思います。やっぱり話すことってとても大切だなと思っています。

### VI. 試験までに「やっておいてよかった」、「やっておけばよかったこと」

筆記試験では、苦手なところやすぐに覚えられることを徹底的に勉強しておけば良かったなと思いました。試験を解いていて、「あれ出来ると思ったのに、やってなかった」「あそこやったのに思い出せない」ということがありました。中途半端で終わらせず、分かるではなく出来るにする必要があるなと思いました。

面接や集団討論では、聞く態度や表情に気を付けましたが、やっておいて良かったななと思いました。相手にとって自分はどう見られているのか、客観視しながら面接練習を行ってみるとよいと思います。

### VII. 試験当日の雰囲気と自らの心理状況、焦ったこと

皆頭良さそうに見えて、汗が止まりませんでした。問題傾向が変わっているとかなり焦るので、とにかく深呼吸することと他人と比較しないことが重要だと思います。私は2つの自治体を受けていたので、1回目よりは2回目の方が緊張せず、リラックスして取り組みました。

### VIII. 後輩へのアドバイス

自信を持って試験に望むことが1番だと思います。自信を持つには、試験までにたくさん勉強しましょう。そうすると自然に自信がついてくると思います。私自身、ネガティブ思考、悩みがあっても人に言わない、自信が無い、そういった性格でした。しかし、勉強をしていく中で、人に頼る事や自分を

信じることの大切さに気付くことが出来ました。それは、教職支援センターの方やゼミの先生、教職の先生がいてくれたからだと思っています。困ったら誰でもいいので話してみてください。私はずっと話しかけていました。

教員採用試験の勉強辛いと思いますが、私も教員として頑張るので、一緒に頑張りましょう！

## 教員採用試験受験報告

健康科学部 健康スポーツ学科 谷井 翔

### I. 教員を目指した理由・きっかけ

私が教員を目指したきっかけは、中学の部活動の顧問の先生との出会いです。スポーツの楽しさを実感することができたことに加えて人間的に成長することができ、教員という仕事に魅力を感じたことから教員を志しました。また、大学での教職の学びやボランティア活動、教育実習を通じてより教員になりたい想いが強くなりました。

### II. 大学時代に力を注いだこと

私が大学時代に力を注いだことは部活動です。結果を求めて練習に取り組んだことや部活という組織の一員として自覚を持って活動を行ったことは教員採用試験にも間違いなく役立ったと感じています。何よりも「目標を持って何かに取り組んだ」という経験が大事だと考えます。

### III. 学習の進め方（時期、教材、方法、場所）

教員採用試験の勉強を始めたのは3年生の1月頃です。教材は受ける自治体の過去問を使用し傾向を掴むまでひたすら問題を解きました。傾向を掴んだら参考書などを使用して自分の苦手な分野や頻出問題などに優先順位を付けて効率よく学習を進めました。実技は、授業の中でも練習をする機会がありましたが、個人的に先生にお願いをして指導をして頂いて対策を行いました。面接対策は、ノートなどに自分の考えなどをまとめ、先生方をお願いをして面接対策をして頂きました。場所は基本的に自宅で行っていましたが、部活動の前などは大学で行っていたりもしました。

### IV. 気分転換

気分転換は部活動に行くこととトレーニングをすることです。もともと勉強が得意な方ではなく長い時間集中することも難しかったので体を動かして気分転換を行いました。教員採用試験に集中することはもちろんですが、一日中勉強するのも難しいですし、部活やアルバイトなどの時間があつた方が1日の時間の使い方が上手くなり、結果として効率のいい学習に繋がると思います。

### V. 採用試験合格に向けて、勉強以外に行ってきたこと

勉強以外に行ってきたことは部活動と学習ボランティアです。部活動を通じて物事を最後までやり抜く力がついたと思います。部活動で培った土台があったことで根気強く学習に取り組むことができました。学習ボランティアは実際に現場に行ったからこそその学びがあると思います。子供の実態や先生方の振る舞いなど様々なことを学ぶ機会になると思うので行った方がいいと思います。

### VI. 試験までに「やっておいてよかった」、「やっておけばよかったこと」

やっておいてよかったことは、自信がつくまで勉強をひたすらに行ったことです。そのおかげで当日もそこまで緊張はしませんでした。やっておけばよかったことは特にありませんでした。

### VII. 試験当日の雰囲気と自らの心理状況、焦ったこと

一次試験の当日の雰囲気は周りが既に教室で参考書を読んでいて緊張感のある雰囲気でした。先ほども述べたように自信がつくまで勉強を行ったことに加えて知り合いと受験番号が前後だったのでそこまで緊張はしませんでした。筆記試験は焦りませんでしたが、実技試験は非常に体育館の気温が高いことに加えて自分の順番が回ってくるまでかなりの時間がかかったため、焦りというか驚きました。非常に疲れると思うので体力は必要だと思います。

二次試験はコロナの影響で受験者の集合時間が違ったため、あまり人に合わなかったですが、面接で自分の意見がしっかりと話すことができるか緊張しました。焦ったことは最初に個人面接だと思っていたら先に場面指導だったので焦りましたが、問題なく対応できました。

### VIII. 後輩へのアドバイス

教員になりたいという強い思いがある人が合格に近づくとおもいます。それがあれば合格に向けての行動をすることができると思いますし、それを支えてくれる新潟医療福祉大学の先生方のサポートがあります。周りの人に感謝をして真摯に取り組めば結果

はついてくると思います。最後まで諦めないで全力で頑張してほしいと思います。お互い頑張りましょう。

## 教員採用試験受験報告

看護学部 看護学科卒業生 池上 悠

### I. 教員を目指した理由・きっかけ

私が教員を目指した理由は、私が受けたいじめです。いじめから助けてくれた養護教諭にあこがれて養護教諭を目指すようになりました。

### II. 大学時代に力を注いだこと

大学時代に力を注いだことは勉強です。看護と教採の勉強を両立しなければならなかったので、平日は看護の勉強を、休日は最低でも2時間は教採の勉強をすることを目標に勉強していました。

### III. 学習の進め方（時期、教材、方法、場所）

勉強を始めたのは2年生の時です。2年生では授業を受ける→「養護教諭の完全攻略」という参考書を使用して復習をしていました。3年生では「全国丸ごと過去問題集」という過去問をひたすら解いていました。合計12周ほど問題を解きました。5周しても覚えられなかった問題はノートにまとめ、教採の時にもっていく苦手ノートを作成しました。また、学習指導要領は中々覚えにくいので、ノートに自分で図式化したものを作成しました。

一般教養は塾講師をしていたのでその時に、教職教養は学内講座の時間を使って勉強していました。

勉強していた場所は、学校の図書館や食堂です。

### IV. 気分転換

私の気分転換の方法は大好きなK-POPアイドルを見ることです。YouTubeで2曲だけ見ると決めて気分転換をしていました。

### V. 採用試験合格に向けて、勉強以外に行ってきたこと

ボランティアに参加していました。子どもと関わるボランティアを中心に参加し、少しでも教採で話せるネタを作れるようにしていました。

### VI. 試験までに「やっておいてよかった」、「やっておけばよかったこと」

早めに勉強を始めていて良かったです。

### VII. 試験当日の雰囲気と自らの心理状況、焦ったこと

周りの人たちは友達同士で固まっておしゃべりしている人が多かったです。試験会場で勉強したい人はイヤホンなどを持って行った方がいいと思いました。

### VIII. 後輩へのアドバイス

一次試験に関しては勉強した者勝ちです。早くから勉強を始めるのがいいと思います。また、学内講座など参加できるものには参加するといと思います。教職支援センターをたくさん活用した者勝ちです。

## 新潟県教育委員会・新潟県内私立大学 教員養成連絡協議会 開催報告

吉田 重和・若月 弘久

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

### I はじめに

本稿では、2022年度に開催された「新潟県教育委員会・新潟県内私立大学 教員養成連絡協議会（以下、協議会）」について報告する。

### II 協議会の開催概要

#### 1. 目的

- 1) 今日求められている教員養成課題について、私学の直面している現状を踏まえ協議する。
- 2) 教員採用の現状・見通し等について情報共有し、各大学の教員養成プログラムおよび教員採用試験対策のあり方・課題等を協議する。
- 3) 小・中学校や地域との連携・協働に関する現状や課題等を協議する。

#### 2. 日時

2022（令和4）年11月15日（火）

14時～16時30分

第1部 14時～15時30分

（新潟県教育委員会と参加大学）

第2部 15時40分～16時30分

（参加大学のみ）

#### 3. 方法

Zoomミーティングによるオンライン会議

実施本部：新潟医療福祉大学

講義棟1階 教職支援センター

#### 4. 協議事項

第1部 コロナ禍における教員養成・教員採用

第2部 コロナ禍における教職課程の困りごと等

#### 5. 出席者

- 1) 新潟県教育委員会  
義務教育課 課長  
義務教育課 管理主事
- 2) 敬和学園大学  
教職課程担当教員  
教務課 課員

- 3) 新潟青陵大学  
教職課程担当教員  
学務課 課長
- 4) 新潟薬科大学  
教職課程運営委員長  
事務部教務第一課 係長
- 5) 新潟経営大学  
学務課 課長
- 6) 新潟工科大学  
学務課 課長補佐
- 7) 新潟医療福祉大学（主管大学）  
教職課程長／教職支援センター運営委員長  
吉田 重和  
教職支援センター運営委員 森泉 哲也  
同 脇野 哲郎  
同 若月 弘久  
同 久保 晃  
同 丸山 幸恵  
学務部教務課 課長 吉田 俊雄
- 8) 協議会事務局  
新潟医療福祉大学学務部教務課／教職支援センター  
菅原 直実  
新潟医療福祉大学学務部教務課／教職支援センター  
阿部 つばさ

### III おわりに

新潟県教育委員会と教職課程を有する新潟県内の私立6大学（以下、参加大学）による本協議会は、2020年11月20日（金）に、新潟医療福祉大学を会場として第1回が開催されている。隔年での継続開催に同意が得られていたことを受け、2022年度、オンライン会議形式にて第2回目が開催された。

新潟県教育委員会と参加大学の間で行われた第1部では、コロナ禍における教員採用の現状と課題について協議がなされた。冒頭で新潟県教育委員会より、2022年度に実施された新潟県教員採用選考検査の出願者数・合格者数が共有され、直近3年間の受験者数の推移が示された。その後「新潟県の求める教員像（「教育公務員としての崇高な使命を自覚し、

教職への誇りと情熱、児童生徒への愛情をもつ教員」「高い倫理観、人権感覚をもち、法令や服務規律の遵守を徹底し、責任をもって自らの職務を果たす教員」「学び続けることの重要性について理解し、理想の教師像や目指す授業、新たな教育課題の解決に向けて常に努力し続ける教員」「コミュニケーションを大切にしながら、周囲との信頼関係を構築する教員」に即して、教職志望学生・既卒生に求められる資質・能力が確認された。

続いて新潟県教育委員会から、県内私立大学に期待することとして、「教員養成にかかわるカリキュラム改善や、教育実習・学校体験活動等に係る指導・支援体制の充実等の教員就職率の向上に資する取組への対応」「教職に対する意欲や児童生徒への愛情を高める工夫」に加え、子どもたちへの教育のためだけでなく、自らが教員を安定的に続けていくためにも「壁や困難に当たった時に一人で抱え込まず、周囲と協力しながら解決を目指すことができる力」を育成してほしい旨が示された。

その後、参加各大学の報告を経て、「近年の（コロナ禍での）新採用教員の傾向について」「採用地や中高共通科目における校種の希望について」「学生が卒業までに身に付けておくべきICTの活用力・指導力について」「次年度以降の教員採用試験の在り方について」などが具体的な内容とともに協議され、教育委員会・参加各大学それぞれの立場から様々な意見が提示された。

続く第2部では、3年目を迎えたコロナ禍における教職課程の困りごとが共有された。具体的には、介護等体験実習や教育実習期間中に新型コロナウイルスに感染した学生が発生した場合の対応について情報共有や意見交換がなされた。また、本協議会の今後については、引き続きオンラインでの開催を前提としつつ、継続して開催していく方向性が確認された。時期や方法を含め開催が定着してきた状況を好機と捉え、次年度以降も、本協議会において教員養成や教員採用に関する活発な協議が実施されることを期待したい。



## 教職課程アンケート集計結果

教職支援センター運営委員会 養成部会

森泉 哲也<sup>1)</sup>・久保 晃<sup>2)</sup>・佐藤 裕紀<sup>2)</sup>・杵淵 洋美<sup>2)</sup>・丸山 幸恵<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>新潟医療福祉大学 健康科学部 健康栄養学科

<sup>2)</sup>新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

<sup>3)</sup>新潟医療福祉大学 看護学部 看護学科

教職支援センター運営委員会は、当該年度の卒業年次生に対し、毎年度末に「現行の教職指導体制に関するアンケート」を実施している。本アンケートは、本学の教員養成理念や教職課程の授業、教員養成に関する取組について、大項目8及び小項目22の観点から、4件法及び自由記述などにに基づき回答を求めた。

2022年度卒業生に関するアンケート結果は、それぞれ下記のように点数化し、平均点をグラフで示す。また、大項目4と8については、回答者の割合で示す。

非常に当てはまる：4点  
 当てはまる：3点  
 あまり当てはまらない：2点  
 全く当てはまらない：1点

### 1. アンケート結果

#### 1) 所属学科（対象人数、回答人数、回答率）

学科	対象人数	回答人数	回答率
健康栄養	6 (10) 人	6 (4) 人	100 (40) %
健康スポーツ	90 (84) 人	65 (16) 人	72.2 (19) %
看護	5 (3) 人	5 (2) 人	100 (75) %
合計	101 (97) 人	76 (22) 人	75.2 (22.7) %

( ) 内は2021年度数値

2021年度のアンケート調査では、特に健康スポーツ学科の回答率が低かったことから、調査の実施方法や時期が課題となっていた。

2022年度は、該当学生が履修する教職実践演習に合わせて、Googleフォームを活用して調査を実施し

た結果、70%以上の回答を得ることができた。

#### 2) 大項目1「QOLサポーターとしての教師（自己評価）」（図1）

卒業年次生が、本学教員養成理念の中核である「QOLサポーターとしての教師」としての素養をどの程度身に付けているかについて、7つの小項目に示した観点から自己評価を求めた。

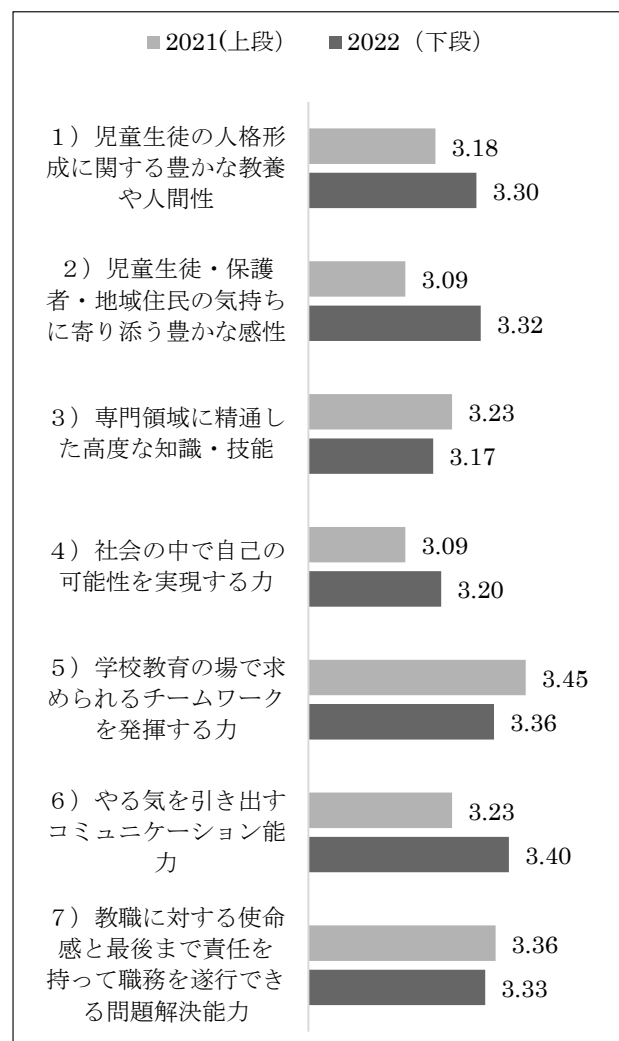


図1 QOLサポーターとしての教師

## 自己評価

「3) 専門領域に精通した高度な知識・技能」は0.06、「5) 学校教育の場で求められるチームワークを発揮する力」は0.09、「7) 教職に対する使命感と最後まで責任を持って職務を遂行できる問題解決能力」では0.03減ったものの、「2) 児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性」では0.23高くなるなど、4つの項目で0.11～0.23高くなった。

感染予防対策により、限られた対面授業やオンライン授業などで得た学びを、学外等の体験をとおして、学びの定着を図り、その拡がりや深さの必要性を感じ、更なる学びにつなげられるよう学習機会の確保や工夫が必要である。

### 3) 大項目2「教職課程の目標とカリキュラムの整合性」(図2)

この項目は、「QOLサポーターとしての教師」と掲げる教員養成の目標と教職課程カリキュラムの整合性について、授業科目の構成や開講順序などの観点から評価を求めた。

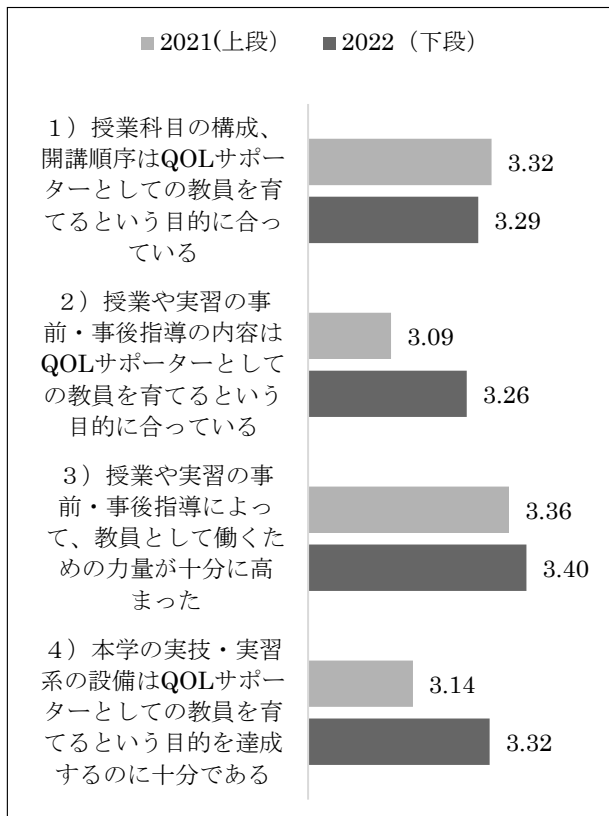


図2 教育課程の目標と、カリキュラムの整合性

「1) 授業科目の構成、開講順序はQOLサポーターとしての教員を育てるという目的に合っている」では、昨年度より0.03低かったが、「2) 授業

や実習の事前・事後指導の内容はQOLサポーターとしての教員を育てるという目的に合っている」「4) 本学の実技・実習系の設備はQOLサポーターとしての教員を育てるという目的を達成するのに十分である」で0.17、0.18高く、一定の成果があった。

### 4) 大項目3「教職支援センターの利用」(図3)

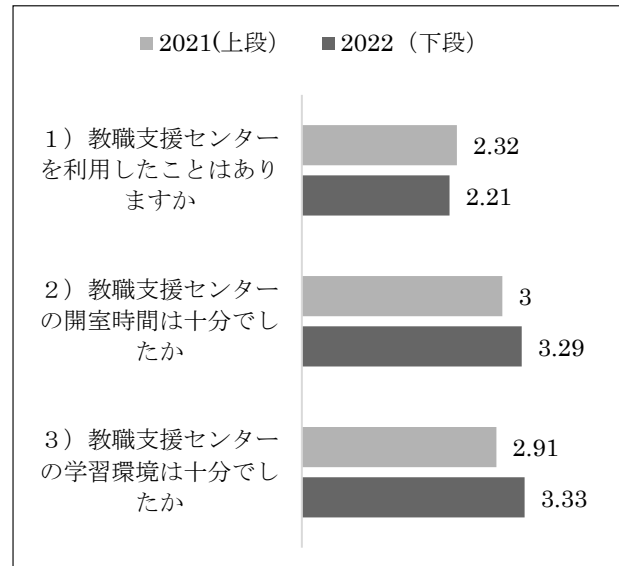


図3 教職支援センターの利用

「1) 教職支援センターを利用したことがあるか」の値が低下した前年度より更に0.11低かった。利用者では「2) 教職支援センターの開室時間は十分でしたか」0.29、「3) 教職支援センターの学習環境は十分でしたか」0.42と昨年度より高かった。感染予防対策により、気軽に学内に入構できる状況になかったことが、センター利用の有無の回答に影響したものと思われるが、利用した学生の値は高くなった。

(次の大項目4から8は教員採用試験受験者および受験予定者のみが調査対象 健康栄養学科: 3人、健康スポーツ学科37人、看護学科4人)

5) 大項目4「教職課程での学びの総合的評価」(図4)

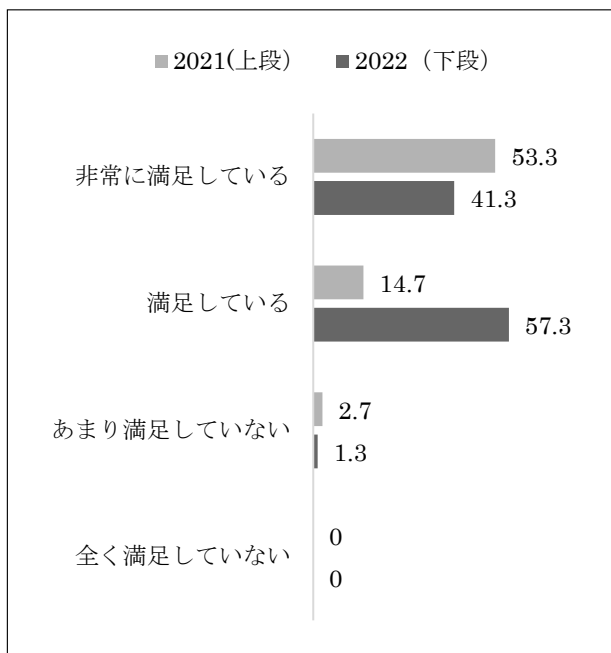


図4 教育課程の学びの総合評価

この項目は、「非常に満足している」が昨年に比べて12%減ったものの、「満足している」は42.6%高まるなど、肯定的な評価は、昨年に比べ30.6%伸び計98.6%と高い評価を得ている。また、「全く満足をしていない」と回答した学生はいなかった。

6) 大項目5「教員採用試験の合格を目標とした教職課程の授業」(図5)

この項目は教職課程の正課科目が一次試験・二次試験対策に役立ったかという観点から、教職課程の正課科目に関する評価を求めた。

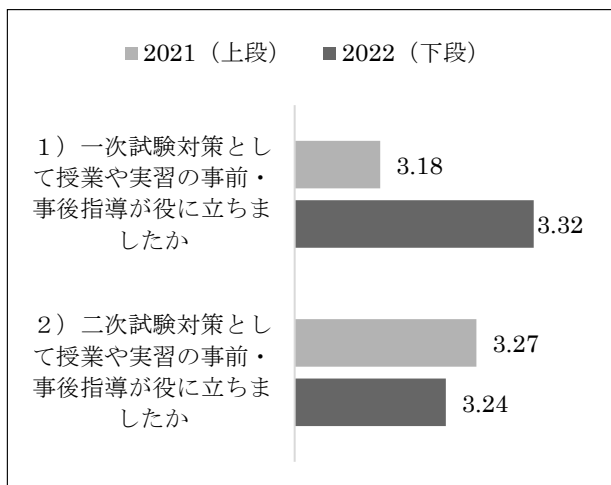


図5 教員採用試験の合格を目標とした教職課程の授業

前年度結果と比べて、一次試験対策については0.14高かったが、二次試験対策については0.03低かった。

7) 大項目6「教員採用試験の合格を目標とした授業外の指導」(図6)

この項目は本学において日常的に展開されている正課外の教職指導が、一次試験・二次試験対策に役立ったかという観点から評価を求めた。

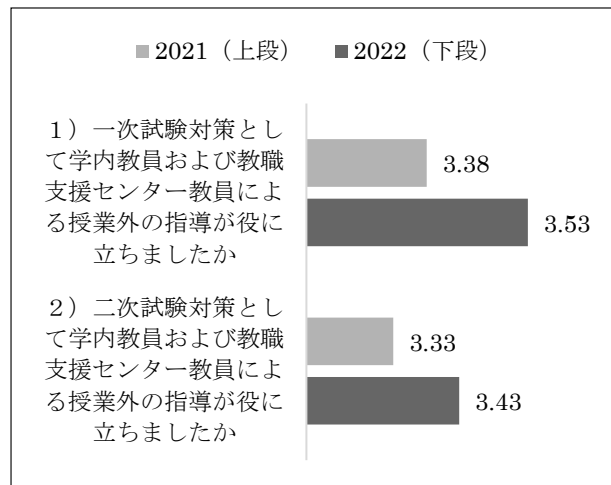


図6 教員採用試験の合格を目標とした授業外の指導

一次試験対策についてはオンライン授業が中心であったが進度や学習状況に合わせて内容の量や質とも工夫して対応した。

2次試験対策は、コロナ禍であったが、学内施設の利用や時間帯の工夫を行う等、感染予防対策にも留意しながら対応した。

利用した学生の回答は、昨年度と比べて一次試験対策が0.15、二次試験対策が0.1高かったものの、利用しなかった学生は、一次試験対策で9名(22%)で昨年度より7名(13%)、二次試験対策では12名(30%)で昨年度より11名(25%)増えた。

帰省先での教育実習と教員採用選考試験日や一次試験の結果などの影響が考えられる。

8) 大項目7「試験対策としての外部業者の講座・模擬試験」(図7)

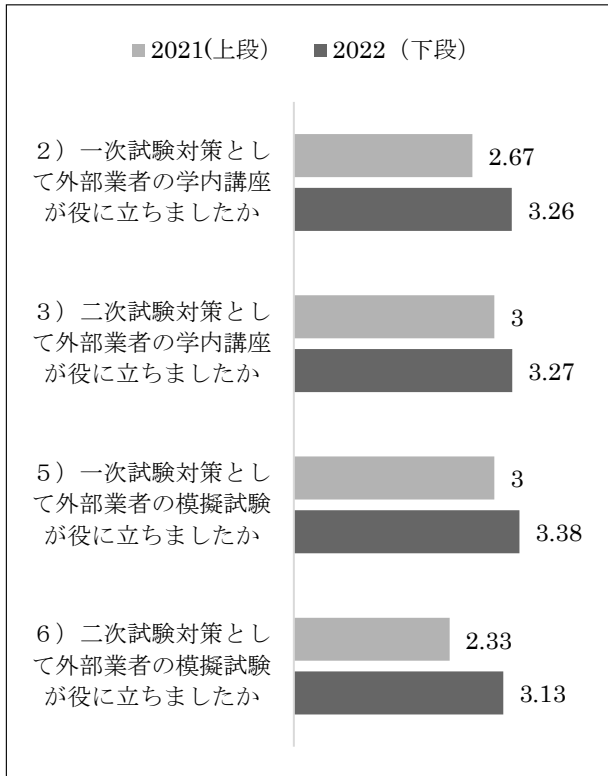


図7 試験対策としての外部業者の講座・模擬試験

利用した学生のうち、全ての項目で昨年度より0.27から0.8高かったものの、コロナ渦でもあり、二次試験対策の「外部業者の学内講座」は37.5%、「外部業者の模擬試験」は58.3%の学生が「利用しなかった」との回答であった。

学生の目標達成のため、より積極的な活用を目指し、業者の選定、講座や模試の回数・内容等を検討・吟味していく必要がある。

9) 大項目8「教職支援センターの支援体制、教員採用試験対策指導」(図8)

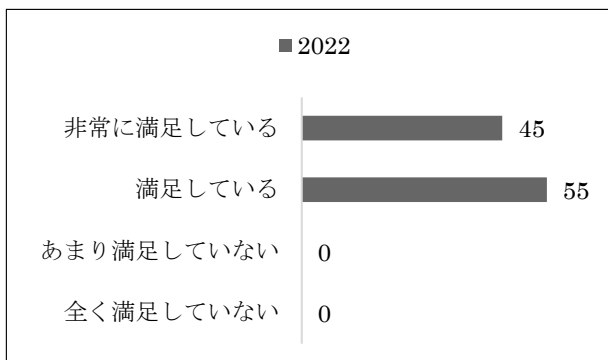


図8 教職支援センターの支援体制、教員採用試験対策指導

2022年度からの調査であるが、「非常に満足している」と「満足している」の肯定的な意見で100%を占めた。

2. まとめ

昨年度の課題であった回答率の低さは、回収方法の工夫により大幅に改善された。また、回答者の多くは教職支援センターの取組に対して、肯定的な意見が多く、特に教員採用試験受験者・受験予定者からは、教員採用試験対策指導についての否定的な意見はなかった。

一方で、教員採用試験の合格を目標とした授業外指導や試験対策の外部業者の講座・模擬試験では、利用しなかった学生が増えている。

近年、全国的に公立学校教員採用選考試験の採用倍率の低下傾向や教員免許状を取得しながらも他の職種に流れる層も相当数いることや、民間企業等の就職・採用活動において、就職活動の開始や終了の時期が早期化しており、民間企業選考開始日の6月1日までに、事実上就職活動を終了している学生も増加していることなどから、文部科学省は、教師志願者の増加を図り、質の高い教師の確保につなげるために、公立学校教員採用選考試験の早期化・複数回実施等について、令和5年5月31日付で方向性を提示している。

公立学校教員の採用選考の実施主体である各教育委員会では、本年度、7都県3政令指定都市で、大学3年生の受験を可能にしている。

また、採用選考試験の実施日については、これまでの7月以降の実施から6月への前倒しが検討されている。

こうした多様な変化の中であって、教職を目指す学生に対して、教職支援センターとしては、迅速で適切な対策が一層求められることから、引き続き、急速に進展する社会の変化を注視しながら、学生のアンケート調査結果などを生かし、更なる授業改善や学内講座の工夫などの支援の充実を図っていく必要がある。

令和4年度  
教職課程  
自己点検評価報告書

令和5年3月  
新潟医療福祉大学

## 自己評価

### 目次

I.	教職課程の現状及び特色	1
II.	基準領域ごとの自己点検評価	2
	基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	2
	基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援	6
	基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム	8
III.	今後の教職課程教育・運営の課題	11
IV.	現状基礎データ表	12

## I 教職課程の現状及び特色

### 1 現状

- (1) 大学名：新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科  
健康科学部健康スポーツ学科  
看護学部看護学科

- (2) 所在地：新潟県新潟市島見町 1398

- (3) 学生数及び教員数

(令和4年5月1日現在)

学生数：新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科167名／大学全体4,641名  
健康科学部健康スポーツ学科947名／大学全体4,641名  
看護学部看護学科443名／大学全体4,641名

教員数：教職課程科目（教職・教科とも）

新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科19名／大学全体356名  
健康科学部健康スポーツ学科46名／大学全体356名  
看護学部看護学科37名／大学全体356名

### 2 特色

新潟医療福祉大学は、保健・医療・福祉・スポーツに関わる専門職を養成する大学であり、「優れた QOL サポーターとしての教師」を教員養成理念として掲げている。健康科学部健康栄養学科は、対象者の健康づくりに貢献できる栄養教諭の養成を、健康科学部健康スポーツ学科は、健康・スポーツに関する専門的知識・技能を有する保健体育教師の養成を、看護学部看護学科は、看護の専門性を身につけた養護教諭の養成を行っている。教職志望の学生が十分な学修機会を得て希望する進路に進むことができるよう、教職支援センター及び教職支援センター運営委員会は、各学科と緊密に連携し、教員養成教育を力強く展開する。

## II 基準領域ごとの自己点検評価

### 1 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### (1) 基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標

##### ①状況説明

新潟医療福祉大学の教員養成理念は「優れた QOL サポーターとしての教師」である。また本学の基本理念「優れた QOL サポーターを育成する大学」に即し、求められる資質・能力として、7つの指針と5つの項目を挙げている（2019年4月1日策定）。

##### ➤ 7つの指針

- I 児童生徒の人格形成に関する豊かな教養や人間性
- II 児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性
- III 専門領域に精通した高度な知識・技能
- IV 社会の中で自己の可能性を実現する力
- V 学校教育の場で求められるチームワークを発揮する力
- VI やる気を引き出すコミュニケーション能力
- VII 教職に対する使命感と最後まで責任を持って職務を遂行できる問題解決力

##### ➤ 5つの項目

##### ✓ Science & Art（科学知識と技術を活用する力）

教職に関する教養を有し、専門分野に関する高度で科学的な専門知識と技術を教育指導の場面において活用できる。

##### ✓ Teamwork & Leadership（チームワークとリーダーシップ）

児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性を有するとともに、校内連携において求められるチームワークを発揮することができる。

##### ✓ Empowerment（対象者を支援する力）

児童生徒の人間形成に関する豊かな教養や人間性及びコミュニケーション能力を有し、児童生徒の学びについて適切に導くことができる。

##### ✓ Problem-solving（問題を解決する力）

教職に対する使命感と最後まで職務を遂行しようとする責任感を有し、児童生徒に関わる諸問題を解決しようとする。

##### ✓ Self-realization（自己実現意欲）

教職と専門分野に関する課題に広く関心をもち、自己の可能性を実現するために、主体的、意欲的に研修できる。



健康科学部健康栄養学科では、『栄養に関する高度の専門性』と『教育に関する資質』を併せ持ち、児童生徒、保護者及び地域社会の健康づくりに貢献できる栄養教諭」を養成している。また、そのために求められる資質・能力として、「Ⅰ 児童生徒、保護者、地域社会の実態や課題を把握し、学校給食の提供、食に関する指導および栄養管理を一体的に行う力、Ⅱ 自らの手で科学的エビデンスを構築し、エビデンスに基づいた活動を展開する力、Ⅲ 保護者、教員、地域社会と連携できる力、Ⅳ 栄養教諭としての誇りと自覚、倫理観、Ⅴ 児童生徒、保護者および他職種から信頼される人間性や社会性」の5つの指針を挙げている。

健康科学部健康スポーツ学科では、「健康・スポーツに関する専門的知識・技能（健康増進、傷害対応などの知識・技能を含む）を有し、児童生徒の人格形成と生涯にわたるQOLの向上に資することができる、豊かな教養と責任感を兼ね備えた保健体育教師」を養成している。また、そのために求められる資質・能力として、「Ⅰ 健康・スポーツに関する専門的知識・技能、Ⅱ 専門的知識・技能を効果的に身に付けさせる指導力、Ⅲ 保健体育教師としての誇りと使命感、Ⅳ フォア・ザ・チーム（連携・協働）の精神」の4つの指針を挙げている。

看護学部看護学科では、「本学教員養成の理念と指針を基盤とし、教育職であり看護職であるという特性を生かした『看護の専門性』を身につけた養護教諭」を養成している。また、そのために求められる資質・能力として、「Ⅰ 子どもたちの疾病管理、救急処置など、健康と命にかかわる看護能力、Ⅱ ヘルスプロモーションの理念に基づき、子どもたちのセルフケア能力を育成するための健康支援活動を実践できる能力、Ⅲ 養護教諭として、中核的な役割を担うことができる総合的な人間力、Ⅳ 養護教諭に必要な倫理的態度、Ⅴ 根拠に基づいた研究的態度」の5つの指針を挙げている。

## ②長所・特徴

現代の学校教育には、児童生徒の主体性や学習意欲の欠如、体力・運動能力の低下傾向、食生活や食習慣の乱れからくる健康への影響、さらにはいじめや不登校など、さまざまな問題が山積していると言われている。また、指導力の不足や、児童生徒のみならず教職員や保護者、地域住民とのコミュニケーションがうまくとれないといった教師自身の問題も指摘されている。新潟医療福祉大学が定める教員養成理念、7つの指針及び5つの項目は、養成している職種・校種・教科等の専門性に鑑みて、これらの課題に応え得る内容だといえる。

健康科学部健康栄養学科は、あらゆるフィールドで活躍する管理栄養士を育成することを中心的な目標に掲げている。その一つとしての学校教育のフィールドでは、管理栄養士の資質・能力を基盤に教諭としての資質・能力を身に付けることで学校給食の提供と食に関する指導を一体的に行うことのできる栄養教諭像を掲げる。

健康科学部健康スポーツ学科は、健康医科学、コーチング科学、スポーツマネジメント、スポーツ教育といった健康・スポーツに関連する幅広い科目を配置しており、希望する将来像に合わせて自由に科目を選択できる。また、特徴的な実習科目および演習科目も整備して

## 自己評価

いる。これらのカリキュラムによって7つの指針と5つの項目を実現し、「優れた QOL サポーターとして教師」を育成することに努めている。

看護学部看護学科は、複雑化・多様化する児童生徒の健康課題解決を目指し、看護と養護・学校保健の側面から心身両面からアプローチし、適切に判断できる力の育成に重点を置いている。また、健康相談や救急処置等の演習や事例検討におけるペア・グループワークやディスカッションを用いながら実践力を高める工夫をしている。

<根拠となる資料・データ等>

1-1-1 新潟医療福祉大学 全学 教員養成の理念

(2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

### ①状況説明

新潟医療福祉大学は、文部科学省が示す教職課程認定基準を踏まえ、教職課程科目を担当するために十分な教育研究業績を有する研究家教員及び教育行政機関や学校等において豊かな実務経験を有する実務家教員を、各学科に適正に配置している。また、教職課程を有する各学科と事務局学務部が連携し、個々の学生の状況に対応する学修支援体制を整備し、適切に教職課程を運営している。

責任ある教職指導のための組織的な取り組みとして、全学組織として教職支援センターを設置し、センター及び教職課程運営のために教職支援センター運営委員会を組織している。教育・学生支援機構における学生支援推進部に所属する教職支援センター運営委員会は、本学の教職課程及び教員養成に関わる業務を充実させるとともに、教職支援センターを円滑に運営することを目的として、三つの専門部会（養成部会、採用・研修部会、企画・研究部会）を設置し、必要な事項の調査・審議を行っている。

教職支援センター運営委員会は、センター長、副センター長、教職に関する科目担当教員から選出された教員、教職課程を有する当該学科より選出された教員、学習相談及び指導を担当する教職員、事務職員、その他委員会が必要と認めた教職員を構成員としている。必要に応じて他の委員会や事務局学務部と連携して対応する構えを取りながら、教職課程の適正な運営を期すと同時に、各学科における教職課程の位置づけに留意し、ディプロマ・ポリシー及び教員養成理念に基づく人材育成・教員養成を推進する体制を構築している。教育実習を含む学外実習や教職ボランティアなど、理論と実践の往還を必要とする実習系科目の運営にあたっては、専門部会である養成部会が中心となり、実習教育体制の連携・充実や、教育委員会等連絡先との調整を一体的に管理している。

教職課程教育を行う上での主たる施設・設備として、講義室、各学科の実習・演習室、体育館、多目的運動場、図書館をキャンパスに設置している。原則としてすべての講義室にプロジェクトやスクリーンが配備されており、教職課程の各授業等を効果的・効率的に展開で

きる体制が整っている。図書館には、約 130,000 冊の書籍と約 1,400 種の保健・医療・福祉・スポーツ分野学術雑誌などが所蔵され閲覧に供されているほか、外部データベースや全国図書館の複写サービスも利用可能であり、教職課程科目の学修に十分な資料が準備されている。ラーニングcommonsや自習コーナー、インターネット接続コーナー、AV コーナーなどが備えられており、ネットワークステーションとしても利用可能である。また新潟医療福祉大学では、学生及び教職員に対し大学発行のメールアドレス及びマイクロソフト社「Office 365」のアカウントを発行し、キャンパス内には無線 LAN やコピー機も配備している。またメディア授業等で活用するために、マイクロソフト社「Teams」や e ラーニングシステム「e-campus」を準備し、授業における情報通信技術の活用基盤を整備している。

教職支援センターには、デジタル教材を含む教職関連図書・資料 300 点余りが配架され、プリンターやコピー機も利用可能な資料閲覧・自学自習スペース、録画カメラ・モニターや大型教具が配備され、仮想教室空間でもある模擬授業スペースが完備されているほか、学生用 PC や iPad 等の ICT 関連の施設・機材も整備されている。教職支援センターの具体的な業務としては、教職に関する履修相談、教育実習に関する手続き、教員採用試験に関する相談、教員採用試験対策講座、教員採用試験模擬試験などを挙げることができる。

## ②長所・特色

新潟医療福祉大学は、保健・医療・福祉・スポーツの総合大学であり、教員養成に特化した大学ではない。この前提を踏まえ、教職課程に係る情報を一元的に管理し、学内外の状況や要望に適切に対応するとともに、効果的・効率的な学生支援を行うために、全学組織として教職支援センター及び教職支援センター運営委員会を設置している。

教職支援センター運営委員会は、本学の教職課程及び教員養成に関わる業務を充実させ、教職志望学生に対する支援を円滑に推進するとともに、その指導及び学習環境の充実に寄与することを目的としている。様々な業務を各学科の教職課程と連携・協働しながら対応しているが、自己点検・自己評価活動については、委員会の専門部会である企画・研究部会が担当し、作業の取りまとめとともに、各学科の点検・評価活動に対し、助言及び援助をしている。活動の性質を考慮すれば、各学科の状況を俯瞰的に捉えることができる専門部会が主導するこの体制は妥当だと考えられる。

### <根拠となる資料・データ等>

- 1-2-1 新潟医療福祉大学教職支援センター規程
- 1-2-2 新潟医療福祉大学ウェブサイト「組織図」  
<https://www.nuhw.ac.jp/about/organization.html>
- 1-2-3 新潟医療福祉大学ウェブサイト「A 図書館棟」  
[https://www.nuhw.ac.jp/about/map/map\\_a.html](https://www.nuhw.ac.jp/about/map/map_a.html)
- 1-2-4 新潟医療福祉大学ウェブサイト「教職支援センター」

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/)

1-2-5 新潟医療福祉大学教職支援センター年報 第5号 [2020年度版]

2 基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

(1) 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保

①状況説明

全学及び各学科において、大学の教育理念である「優れた QOL サポーターの育成」に即したアドミッション・ポリシーが設定されている。これらのアドミッション・ポリシーは、ホームページに掲載されているだけでなく、『大学案内』『入試ガイド』『学生募集要項』等の印刷媒体及び高校教諭を対象とした入試説明会、オープンキャンパス等を通じて、優れた QOL サポーターに求められる資質・能力として公開されている。

入試においては、学科ごとに評価指標を定めて入学者選抜の公平性を担保するとともに、多様な人材確保のために 8 種類の選抜区分を設定している。原則として、総合型選抜や学校推薦型選抜では本人の特性を生かした能力を、一般選抜や大学入学共通テスト利用選抜では高等学校卒業相当の基礎学力を測定している。また、総合型選抜や学校推薦型選抜の合格者に対しては、オンライン教材を活用した入学前教育を展開し、学修意欲を維持・向上し、大学教育に円滑に接続できるよう企図している。

健康科学部健康栄養学科は、本大学のホームページにおいて目標とする資格の一つとして栄養教諭を掲げ、免許取得要件、職務内容の概要を示しており、履修希望の有無はある程度明確になっている。入学後の学科新入生オリエンテーションにおいて教職課程(栄養教諭コース)に関する説明を行い、履修希望者を確定している。

健康科学部健康スポーツ学科は、大学ホームページと連動した学科ブログ、各種 SNS (Twitter, Instagram), Voicy や YouTube などの媒体を通じて教員の研究成果、学生の各種活動、学科の様子などを発信している。このことで、在学生、高校生、関係者が健康スポーツ学科で行われている研究や各種活動への興味・関心を高めて、教職を目指す学生や本学科を志望する高校生の確保に努めている。教職を志望する学生に対して、教職オリエンテーションを毎年開催し、各学年で必要な学修および実習の指導に当たっている。

看護学部看護学科は、毎年度行う各学年への教職オリエンテーションにおいて、本学科の教員養成理念や看護教諭の職務の魅力・求められる力等を伝えている。新入生に対しては、全員へのオリエンテーション他に、教職希望者に教職課程の詳細を説明し教職課程をスタートしている。学年ごとや個別に声かけや支援を等しながら意欲の維持・向上に努めている。

## ②長所・特色

健康科学部健康栄養学科では、管理栄養士の資格取得のための科目履修と並行して1年次から教職の基礎的な理解に関する科目の履修が始まる。その過程で進路が熟考され、2年次の終わりまでに免許取得のみを目指す学生と教職志望が高い学生とに分かれるが、3年次から始まる栄養教諭の専門科目では、教職を担う者としての質の担保については同等の指導を行っている。

健康科学部健康スポーツ学科では、学生が「優れた QOL サポーターとして教師」を目指し、教職ポートフォリオで毎年の目標設定と振り返り、教職に関わるすべての授業科目で学んだことと課題の記録、ボランティア活動の記録などを行っている。これらを担当教員が確認してフィードバックすることで教職課程履修の進捗状況を共有している。

看護学部看護学科は、教育実習履修者の定員を10名とし、3年次に選考試験を実施している。学生自身も改めて教職に対するモチベーションを高め、進路について再考する機会となっている。また、少人数制であることを生かし、「教職ポートフォリオ」を活用しながら個別面談を実施し、適性や学習状況、目標、進路希望等の把握をしながら個に合わせた支援に努めている。

## <根拠となる資料・データ等>

2-1-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「アドミッション・ポリシー」

<https://www.nuhw.ac.jp/applicant/admissions/ap.html>

## (2) 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

### ①状況説明

教職へのキャリア支援は、教職支援センターが中核となり、各学科教職課程、事務局キャリア開発室（就職センター）と連携しながら進めている。教職へのキャリア支援として、教職に関する履修相談、人物評価試験対策指導を含む教員採用試験対策講座、教員採用試験模擬試験などを通年で行っている。これらの業務は教職支援センター運営委員会の専門部会である採用・研修部会が主管しており、実際の指導は教職支援センター非常勤講師や各学科の実務家教員が中心となり実施している。

健康科学部健康栄養学科では、教職担当教員が中心となり教職に関する履修相談、人物試験対策指導を含む教員採用試験対策講座を、3年生を中心に後期から教員採用試験期間まで実施している。

健康科学部健康スポーツ学科は、学内講座として論作文演習、面接演習、教育課題演習、直前総合演習、などを開講し、採用試験対策はもとより、教師としての力量の形成を支援している。また、学生の表現力を高めるため、教員採用試験の出願書類の添削を行っており、多くの学生が利用している。

## 自己評価

看護学部看護学科は、教職支援センターとの連携を強化しつつ、学科で実務家教員による教員採用試験対策を実施している。専門科目を中心とした講座の他、人物試験対策、実技試験対策を行っている。在学生・既卒生に対応し、学生の教職への夢の実現を支援している。

### ②長所・特色

健康科学部健康栄養学科は、教員採用試験に特化した講座として、専門教養を中心に「食に関する指導の手引」などにあたり基礎的・基本的な知識を整理し過去問を解いたり、主に面接場面を想定した模擬授業や場面指導なども適宜加えたりしながら、総合的・実践的な演習形式の活動を通して教員採用試験に向けた力量を高めることを目的として行っている。

健康科学部健康スポーツ学科は、教職支援センター講師と学科教職担当教員が協同で指導に当たっている。現職学校教員の経験が豊富な実務家教員と教職教養や専門教養に関わる専門性の高い研究者教員が在籍しており、それぞれがペアになって学生指導に当たったり、オムニバス形式で授業や演習を担当したりしている。

看護学部看護学科は、教員採用試験対策の他、公開模擬授業や実習報告会への低学年の参加等を行い、異学年交流を図っている。これをきっかけとして、情報共有や相談の場も設定するようにしている。特に2、3年生で看護と教職の学習の両立への不安を挙げる学生は多く、先輩や周囲の体験や対処方法などを聴くことで具体的なイメージや目標を持って臨む様子がみられている。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「教職支援センター」(1-2-4再掲)

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/)

### 3 基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

#### (1) 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

### ①状況説明

各学科において、教職課程コアカリキュラムに対応した、保健・医療・福祉・スポーツの専門職業人養成に繋がるカリキュラムを編成している。指導法を中心とした講義系の科目において、ペア・ワークやグループ・ディスカッション、模擬授業等を盛り込んだ授業展開を取り入れ、コミュニケーション能力の育成を図っている。また教職志望度が高い学生を対象とした演習系・実技系の科目を複数担当したり、観察参加型の実習を低学年次に設定したりするなどして、教職指導の質・量の充実に努めている。さらに全学で推進する連携教育を教職課程教育にも取り入れており、4年次後期の「教職実践演習」においては、3学科連携の演習を実施している。

健康科学部健康栄養学科は、「栄養に関する高度な専門性」と「教育に関する資質」を併せ持ち、児童生徒、保護者および地域社会の健康づくりに貢献できる栄養教諭の養成を目的としたカリキュラムを編成している。3年次は講義を中心とし栄養教諭の職務に関する理解を深める科目と演習を通じて食に関する指導法を習得する科目とで構成している。

健康科学部健康スポーツ学科は、教科及び教科に指導法に関する科目、大学が独自に設定する科目においても健康・スポーツに関連する幅広い科目を開講している。教員免許を取得するための単位に加えて、学科独自の教職必修を設定することで、健康・スポーツに関する力量を幅広く身に付けることができるカリキュラムとなっている。

看護学部看護学科は、学科教員養成理念に基づき、各科目において看護、養護・学校保健の視点を備えた信頼される養護教諭の育成を目指している。教職課程科目と学科科目の関連性や系統性を踏まえ、学年ごとに段階的に学べるよう工夫している。

## ②長所・特色

健康科学部健康栄養学科は、3年次の学びを踏まえ、4年次の栄養教育実習で学校現場での2週間の実践に臨んでいる。最終科目の教職実践演習では、教育実習における実践について、改めて管理栄養士視点からの振り返りを行う。各自の指導案等を支えるエビデンスを確認すると共に指導方法の在り方について協議し、専門性に関する質の向上を目指している。

健康科学部健康スポーツ学科は、体育実技の授業科目において、学習指導要領保健体育編の各領域で例示されている種目を設定しており、学生の指導力の向上に努めている。さらに、大学が独自に設定する科目では、各種目の指導実習を配置しており、継続的な指導の経験を通して専門科目の指導力を高めることができるようにしている。

看護学部看護学科は、養護教諭の職務の特性から専門性を高める学びと同時に、自ら連携を構築する力を養うことを意図している。ペア・グループ学習や場面指導演習、事例検討などをできるだけ多く設定し、体験的に具体的に学ぶ工夫をしている。また、各種実習やボランティア経験をシェアする等、実践場面の経験の共有を図りながら進めている。

## <根拠となる資料・データ等>

3-1-1 新潟医療福祉大学教職支援センター年報 第6号〔2021年度版〕

### (2) 基準項目3-2 実践的指導力養成と地域との連携

#### ①状況説明

実践的指導力を養成するために、低学年次からボランティア等で学校現場に触れることを推奨している。また、新潟医療福祉大学と新潟市北区との間に包括連携協定が結ばれているため、教職課程においても、北区内の小学校・中学校にて各種実習が行われたり、教職ボランティア活動が展開されたりするなど、交流の機会が多くなっている。

## 自己評価

健康科学部健康栄養学科では、学校現場に触れる活動として3年次後期の給食経営管理実習を位置付けている。教職課程を履修する学生は、本実習において学校での実習となるよう実習場所を調整することで現場体験を実現させている。

健康科学部健康スポーツ学科は、大学の所在地である新潟市北区内の小学校・中学校あるいは学生の出身地の小学校・中学校での教職ボランティアを推奨し、毎年数名の学生が実際にボランティア活動に取り組んでいる。ボランティアの内容も学習支援、部活動支援、学校行事など多岐にわたっており、実践的指導力の向上を図っている。

看護学部看護学科は、低学年からの学校ボランティア参加を勧めている。ボランティア校については、教職支援センター運営委員の担当教員により個別にマッチングしていただくことで、学生は安心感を得てボランティア参加へ意欲が高められている。

### ②長所・特色

健康科学部健康栄養学科は、1年次から管理栄養士に関する実習を行うため、教職のボランティア活動に取り組むことができるのは教育実習後さらには教員採用試験後となるのが現実であるが、ゼミの活動として北区内の小中学校に出向き、お弁当の日のサポートを行うなどの活動を通して交流の機会を作るようにしている。

健康科学部健康スポーツ学科は、学科開設以来、地域の学校でのボランティア活動を継続的に行ってきた。特に水泳、器械運動、ダンスなどの体育授業補助が中心であったが、近年では体育に限らない学習支援も多くなっている。ボランティア活動の体験によって、指導力の向上に加えて、教職の志望度を高めることにもつながっている。

看護学部看護学科は、新潟市内小学校より観察参加実習・教育実習を受け入れていただき、実施している。継続的な学校ボランティアへの参加や各種実習から養護教諭の職務について具体的かつ実践的な学びを深め、教職への意欲を高める機会となっている。実習の学びは報告発表会で共有している。

### <根拠となる資料・データ等>

3-2-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「地域連携（貢献）活動」

<https://www.nuhw.ac.jp/community/contribution/>



### Ⅲ 今後の教職課程教育・運営の課題

新潟医療福祉大学における教職課程教育・運営の全学的な課題として、以下3点があげられる。

1点目は、教職課程に係るFD・SD活動が低調なことである。大学全体のFD・SD活動は活発に行われているものの、教職課程教育や教職課程運営に焦点化したFD・SD活動は、有志教員により一部実施されているのみで、組織として十分に展開されていない。また、授業評価アンケートや教職課程アンケートなどは定期的実施されているが、収集した学生の「声」を適切に反映するための動きは限定的である。教職課程の在り方を顧みてより良い状況にするためには、教職課程に特化した定期的なFD・SD活動が必要だと考えられる。

2点目は、学校現場に触れる機会が限られたカリキュラムとなっていることである。実践的指導力を養成するためには、学生生活の早期から（可能であれば長期的に）学校現場に関わることが必要不可欠である。しかしながら新潟医療福祉大学においては、学科の専門教育や履修者数との兼ね合いにより、実習もしくは実習に準ずる機会を教職課程カリキュラムの中で十分に提供することができていない。カリキュラムの改訂が難しい現状においては、教職ボランティアの対象や期間をより一層拡充することで、これに代替することが求められるだろう。

3点目は、既卒生への支援や働きかけが薄いことである。新潟医療福祉大学の教職課程では現在、既卒生への支援として、メーリングリストを通じて講師情報の提供や学内講座の開講案内などを行っているが、支援の内容・頻度ともに十分とはいえない状況である。「教師は学校で育つ」ものであるが、既卒生に対し実質的・効果的な支援を展開することは、教職課程を有する大学としての責務でもある。既卒生支援の在り方を今一度見直し、新たな展開を図ることは、新潟医療福祉大学教職課程における重要課題の一つだと言える。

自己評価

現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者 学校法人 新潟総合学園	
大学・学部名称 新潟医療福祉大学	
学科やコースの名称（必要な場合） 健康科学部健康栄養学科・健康科学部健康スポーツ学科・看護学部看護学科	
1 卒業生数、教員免許取得者数、教員採用者数等	
① 昨年度卒業生数	健康科学部健康栄養学科 41名 健康科学部健康スポーツ学科 202名 看護学部看護学科 105名 計 348名
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)	健康科学部健康栄養学科 36名 健康科学部健康スポーツ学科 174名 看護学部看護学科 100名 計 310名
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)	健康科学部健康栄養学科 2名 健康科学部健康スポーツ学科 82名 看護学部看護学科 3名 計 87名
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)	健康科学部健康栄養学科 2名 健康科学部健康スポーツ学科 20名 看護学部看護学科 3名 計 25名
④のうち、正規採用者数	健康科学部健康栄養学科 1名 健康科学部健康スポーツ学科 7名 看護学部看護学科 1名 計 9名
④のうち、臨時的任用者数	健康科学部健康栄養学科 1名 健康科学部健康スポーツ学科 13名 看護学部看護学科 2名 計 16名

2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 (助手)
教 員 数	健康科学部	健康科学部	健康科学部	健康科学部	健康科学部
	健康栄養学科	健康栄養学科	健康栄養学科	健康栄養学科	健康栄養学科
	5名	4名	5名	4名	1名
	健康科学部	健康科学部	健康科学部	健康科学部	健康科学部
	健康スポーツ学科	健康スポーツ学科	健康スポーツ学科	健康スポーツ学科	健康スポーツ学科
12名	8名	15名	10名	1名	
看護学部看護学科	看護学部看護学科	看護学部看護学科	看護学部看護学科	看護学部看護学科	看護学部看護学科
8名	4名	7名	10名	8名	
計 25名	計 16名	計 27名	計 24名	計 10名	
相談員・支援員など専門職員数 0名					

令和4年度

**教職課程**

**自己点検評価報告書**

令和5年3月

新潟医療福祉大学大学院

医療福祉学研究科

目次

I.	教職課程の現状及び特色	1
II.	基準領域ごとの自己点検評価	2
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	2
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	7
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	11
III.	今後の教職課程教育・運営の課題	17
IV.	「教職課程 自己点検・評価報告書」作成のプロセス	17
V.	現状基礎データ表	18

# 自己評価

## I 教職課程の現状及び特色

### 1 現状

(1) 大学名：新潟医療福祉大学大学院 健康科学専攻（健康スポーツ学分野）  
中・高保健体育専修免許状取得コース

(2) 所在地：新潟県新潟市島見町 1398

(3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：中・高保健体育専修免許状取得コース 11名

教員数：教職課程科目 担当 18名/健康スポーツ学分野全体 18名

### 2 特色

新潟医療福祉大学大学院（以下、本大学院）は、2005年4月に、「より優れた QOL サポーターの育成」を教育理念として掲げて開設された。2023年3月現在、修士課程4専攻5学位プログラムおよび博士後期課程1専攻1学位プログラムで構成されている。

修士課程健康科学専攻（健康スポーツ学分野）に設置されている健康科学学位プログラム（以下、本学位プログラム）では、本大学院の教育理念をもとに、高齢社会の急速な進展および仮想空間と現実空間の融合促進に伴って増大・多様化する健康に関するニーズに対応して、様々な領域の専門家が連携し、対象者支援の質的向上を推進するために、栄養・スポーツの分野を中心とした健康科学等に関する研究と教育を進めるとともに、人と人との連携を促進する人材を育成している。特に、本学位プログラムの教育課程の1つとして、中・高保健体育専修免許状取得コース（本コース）を設置し、「より優れた QOL サポーターとしての教師」の育成を進めている。

この教員育成課程は、学位プログラムにおける人材育成の一環として位置付けられている。従って、本大学院教員育成課程では、多様な価値観をもった子どもの成長を促す教育現場の抱える問題に対し、関係する人々の連携を促進し、その問題を根本から解決するとともに、学習者本位の教育を実現するために、持続的に成長し続けようとする実践力を有する教員を育成することを目指している。

このように、健康科学専攻（健康スポーツ学分野）の中・高保健体育専修免許状取得コースでは、専修免許取得に必要とされる「高度な教育研究能力」に加えて、多様な人々の連携を促進できる能力を身に付けることを目的にしている。そのために少人数の院生に対して手厚い学習環境での指導および実践を実施しており、この点が本コースの特色である。

## II 基準領域ごとの自己点検評価

### 1 基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### (1) 基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標

①目的・目標、育成を目指す教師像について教職課程に関わる教職員が共通理解をしているか

[状況説明]

目的・目標、育成を目指す教師像については、本学位プログラムの教職課程に関わる教員において審議した結果をもとに、教職支援センター運営委員会、教育学生支援機構、研究科委員会および大学院委員会での審議を経て、学長が決定している。従って、教職課程に関わる教職員が共通理解をもって、「より優れた QOL サポーターとしての教師」を育成している。

[長所・特徴]

本コースで目指す「より優れた QOL サポーターとしての教師」の到達度評価は、年に1回実施される修士論文報告会、教職科目における大学院生の学びの軌跡である教職ポートフォリオ、大学院生生活動報告書、教職課程のシラバスや授業アンケートの結果を参考に、「より優れた QOL サポーターとしての教師」に関して自己点検・評価と共通理解を図っている。

<根拠となる資料・データ等>

1-1-①-1 各委員会の議事録	1-1-①-2 修士論文報告会
1-1-①-3 教職ポートフォリオ	1-1-①-4 大学院生生活動報告書
1-1-①-5 教職課程のシラバス	1-1-①-6 授業評価アンケート

②教職課程教育を通して育まれるべき学習成果（ラーニング・アウトカム）が具体的に示されているか

[状況説明]

本コースにおいて育成を目指す教師像である「より優れた QOL サポーターとしての教師」は、「Society 5.0 における学校教育を先導する次世代 QOL サポーターとしての教師」という具体的な学習成果として示し、その到達までのプロセスを、ディプロマポリシー（DP）ルーブリック、学位論文ルーブリック、教職ポートフォリオおよび専修免許取得に関する科目の成績などで評価している。

## 自己評価

### [長所・特徴]

本コースでは、教職ポートフォリオにおいて学習プロセスを可視化するだけでなく、学位論文ループリックを用いることで、本学位プログラムの DP を踏まえた学習到達度を評価できる。

### <根拠となる資料・データ等>

1-1-②-1 学位論文ループリック      1-1-②-2 教職ポートフォリオ  
1-1-②-3 専修免許取得に関する科目の成績

### ③教職課程教育の目的・目標を学生に周知しているか

### [状況説明]

教職課程履修者に対して、教師の専門性、専修免許状に必要な高度な教育研究能力および本大学院の目指す教師像について、教職課程履修者ガイダンス資料を用いて、オリエンテーションを実施し、理解を図っている。また、本大学院ホームページ内に教職課程に関する学内専用ページを作成し、教職課程教育の目的・目標に大学院生がいつでもアクセスできる環境を準備している。

### [長所・特色]

特になし

### <根拠となる資料・データ等>

1-1-③-1 2022年度 教職課程履修者ガイダンス資料  
1-1-③-2 2022年度 教職課程ホームページ（学内専用ページ）

### (2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

### ①研究者教員と学校現場での優れた実践的経験を有する教員との協働体制を構築しているか

### [状況説明]

研究者教員と実務家教員としての経歴をもつ教員が協力し、授業の運営や、採用試験対策、学校現場でのボランティアに対するフォローや報告会の開催などを行っている。

### [長所・特色]

特になし



<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-①-1 ボランティア体験を語る会に関する資料
- 1-2-①-2 教職課程のシラバス
- 1-2-①-3 人物試験対策の実施報告書
- 1-2-①-4 授業評価アンケート

②教職課程の運営に関して全学組織（教職課程支援センターなど）と学部（学科）の教職課程で意思疎通を図っているか

〔状況説明〕

専修免許状については履修者が少ないため、大学院委員会が、学部の教職支援センター運営委員会と連携して運営を行っている。また本大学院の教職課程に関わる教職員の一定数が、全学組織（教職支援センター運営委員会）に所属しているため、健康科学専攻（健康スポーツ学分野）、学部（健康科学部健康スポーツ学科）および全学組織間での意思疎通は良好である。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-②-1 ボランティア体験を語る会に関する資料
- 1-2-②-2 教職課程のシラバス
- 1-2-②-3 人物試験対策の実施報告書
- 1-2-②-4 授業評価アンケート

③教職課程の在り方を恒常的に自己点検・評価するために組織的に機能しているか

〔状況説明〕

学部（健康科学部）の教職課程では恒常的な自己点検・評価が行われているものの、本コースの教育課程では行われてこなかった。しかし、2022年度、本大学院関係組織（大学院委員会、研究科委員会、健康科学専攻（健康スポーツ学分野）教員組織）と教職関係組織（教職支援センター運営委員会）とが連携を図り、自己点検・評価をする体制を整備した。

〔長所・特色〕

特になし

## 自己評価

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-③-1 7月健康スポーツ学科会議議事録
- 1-2-③-2 8月大学院委員会議事録
- 1-2-③-3 8月研究科委員会議事録

④教職課程の質的向上のためにFDやSDの取り組みを展開しているか

[状況説明]

本学教職課程では、一種免許状取得に関するFDやSDが行われてきたが、専修免許状取得に関連する内容は行われていなかった。2022年度より、本コースを含む大学院教育に関するFD・SDを積極的に開催している。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-④-1 大学院FD・SDのポスター

⑤教職課程に関わる情報公開を行っているか

[状況説明]

本大学院及び教職支援センターHPにおいて本自己点検評価報告書を公開している。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-⑤-1 大学院ホームページ情報公開欄
- 1-2-⑤-2 教職支援センターHP 大学院FD・SDのポスター

⑥教職課程教育を行う上での施設・設備が適切に整備されているか

[状況説明]

教職支援センターには、学校の教室を模した空間があり、黒板やモニターが設置されている。また電子黒板の設備も必要に応じて使用できる環境である。さらに、学内には、4つの体育館、屋内プール、ダンス場および3カ所のジム施設が整備されており、保健体育科教育

学、トレーニング科学および健康科学関係の授業や研究活動に加え、自主学習においても活用可能となっている。

〔長所・特色〕

上記に加え、学内LANや外部回線、大学院生が利用可能なプリンタ等が設置されている。また、大学院生室も設置されており、学習環境は整備されている。

<根拠となる資料・データ等>

1-2-⑥-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「教職支援センター」  
[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/)

## 自己評価

### 2 基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

#### (1) 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保

##### ①教職を担うにふさわしい学生を受け入れる履修上の基準を設定しているか

###### [状況説明]

本学位プログラムのアドミッションポリシー(AP)を踏まえ、本コース独自のAPを設定し、大学院生の受入れを実施している。そのため、高度専門職業人を目指す者が本コースを履修している。具体的には、学部卒業生については中学校・高等学校教諭一種免許状(保健体育)を取得した後に教員を目指す者が、社会人については一種免許状を取得した現職教員が専修免許状の取得を希望するため、履修希望者は既に教職を担うにふさわしい基準を充たした大学院生を受け入れている。

###### [長所・特色]

特になし

###### <根拠となる資料・データ等>

2-1-①-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「大学院の構成・3ポリシー」

<https://www.nuhw.ac.jp/grad/about/composition.html>

##### ② 教職を担うにふさわしい学生の募集・選考等を実施しているか

###### [状況説明]

健康科学専攻ではAPにおいて、「より優れたQOLサポーター」の資質・能力として「STEPS」を掲げている。

S:健康科学に関する基礎的知識および国内外の情報を収集する力を有する。

T:異なる領域の考え方を理解し、専門家間の連携を促進しようとする強い意志を有する。

E:健康科学領域において、多様な価値観を尊重し、対象者を支援しようとする強い意志を有する。

P:健康科学に関する問題を多面的に認識し、解決するために必要な基礎的知識または経験を得ようとする強い意志を有する。

S:健康科学に関する学術・実践活動に高い関心を持ち、主体的・積極的に学ぶ態度を有する。

上記5つの項目に基づき、本大学院健康科学専攻(スポーツ学分野)健康科学学位プログラムの入学試験を実施している。さらに、専修免許状を取得するためには、既に一種免許状

を有している必要があることから、これから教職を担うにふさわしい者や既に教職を担っている大学院生の募集・選考等を実施している。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

2-1-②-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「大学院の構成・3ポリシー」

<https://www.nuhw.ac.jp/grad/about/composition.html>

③当該教職課程に即した適切な数の履修学生を受け入れているか

〔状況説明〕

2010年度～2021年度の本学位プログラム修了者のうち、専修免許状の取得者は中学校24名、高等学校29名となっている。大学院の専修免許状取得コースの開設以来、1年あたり中学校1.84名、高等学校2.23名と一貫して少人数教育を実施できており、適切な数の履修学生を受け入れていれている。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

2-1-①-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「大学院の構成・3ポリシー」

<https://www.nuhw.ac.jp/grad/about/composition.html>

(2) 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

①学生の教職に対する意欲や適性を把握しているか

〔状況説明〕

入学後に専修免許状の取得を希望する学生に対して、オリエンテーションを行い、ポートフォリオも配布している。オリエンテーションとポートフォリオ作成、提出時の際の面談時において学生の意欲や適性について把握している。

〔長所・特色〕

特になし

## 自己評価

<根拠となる資料・データ等>

2-2-①-1 教職ポートフォリオ

②学生のニーズの把握に基づいた適切なキャリア支援を組織的に行っているか

[状況説明]

主研究指導教員と教職支援センター運営委員会とが連携して、個別に適時行っている。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

2-2-②-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「教職支援センター」

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/)

2-2-②-2 2021年10月 大学院委員会資料

③学生の学習状況に応じたきめ細やかな指導を行っているか

[状況説明]

主研究指導教員と教職支援センター運営委員会とが連携して、個別に適時行っている

[長所・特色]

2022年度より、履修、学修および研究、その他の相談支援の強化を目的に、複数教員での指導体制を構築し、きめこまやかな指導を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-③-1 2021年10月 大学院委員会資料

④教職入職に関する各種情報を適切に提供しているか

[状況説明]

入学後に専修免許状の取得を希望する学生に対してオリエンテーションを行い、情報の提供を行っている。また、一種免許状取得希望者向けの情報も適時提供しており、教職支援センターでも関連情報を取得できる環境が整っている。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

2-2-④-1 新潟医療福祉大学ウェブサイト「教職支援センター」  
[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/)

⑤教員免許状取得件数、教員就職率を高める工夫をしているか

〔状況説明〕

一種免許状取得コースと合同の取組として、教職に就いている本学卒業生の話聞く機会である「現職教員の声を聴く会」が開催されている。それ以外には、主研究指導教員と教職支援センター運営委員会とが連携して、キャリア支援を個別に適宜行っている。

〔長所・特色〕

「現職教員の声を聴く会」では、新型コロナウイルス感染症対策という点もあり、オンライン会議システムを活用することで地理的、時間的な負担を軽減して現職教員に協力してもらい、収録した動画をオンデマンド型で配信している。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-⑤-1 過去3年間の教員免許状取得状況（6件）  
2-2-⑤-1 教職支援センター年報第5号（2020年度版）

⑥教職についている卒業生との協力体制を図っているか

〔状況説明〕

「現職教員の声を聴く会」や授業へのゲスト講師として、またニューズレターへの原稿などを通じて、教職に就いている卒業生と協力して、教員育成を進めている。

〔長所・特色〕

教職に就いている卒業生や、教職を志望する卒業生を対象とした「卒業生教職ネットワーク」という、メーリングリストによるOB・OGネットワークを構築している。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-⑥-1 卒業生教職ネットワークのご案内

## 自己評価

### 3 基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

#### (1) 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

①教職課程科目に限らず、修了単位30単位を活用して、建学の精神等、開放性の教員養成を行う大学としての特色ある独自性のある教員育成を行っているか

##### 〔状況説明〕

教育職員専修免許状取得の場合の必要習得単位数は34単位としている。修士課程共通科目のうち健康科学特論2単位、分野専門科目のうち健康スポーツ学特論2単位、特別研究10単位を必修としている。また分野専門科目のうち、特論科目から8科目16単位以上、演習科目から1科目4単位以上を選択必修としている。これらのカリキュラムは、「より優れたQOLサポーター」を育成する本大学院の教育理念に基づき設定された本学位プログラムのカリキュラムポリシー（CP）および本コース独自のCPを基準に構成されている。そのため、保健体育科に関する学問領域に留まらず、健康科学に関する学問領域で用いられる研究方法を学ぶことができるため、専修免許状取得にふさわしい高度な教育研究能力を身に付けられる体制を確立している。

##### 〔長所・特色〕

特になし

##### <根拠となる資料・データ等>

3-1-①-1 2022年度 学生便覧・履修の手引き

②学科等の目的を踏まえ、「教科専門」「教科指導」「教職専門」の各科目・領域間の系統性の確保を図っているか

##### 〔状況説明〕

本コースにおいては、「教科専門」「教科指導」「教職専門」といった科目分類を実施していないが、「共通科目」「健康科学専攻専門科目」という科目分類の中に、各領域に関わる科目を設置している。「共通科目」には、「教職専門」に位置づけられる科目（連携教育方法、教育学科目）が、「健康科学専攻専門科目」には、「教科専門」「教科指導」に位置づけられる科目（体育・スポーツおよび保健体育科に関する科目）が設置されており、本コースの大学院生は系統的に履修することが可能である。



[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-1-②-1 2022年度 カリキュラム

③学校や社会のニーズ、政策課題（例えば、教員育成指標参照）に対応した教育内容の工夫がなされているか

[状況説明]

学校や社会のニーズという点で、スポーツ教育学特論において、部活動の地域移行や地域スポーツクラブとの連携の在り方の内容や、生涯学習社会における学校と地域の協働、教師の在り方について扱っている。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-1-③-1 2022年度 シラバス

④学生自身によるアクティブ・ラーニングを促す工夫に取り組んでいるか

[状況説明]

本大学院の各授業は、少人数で大学院生の報告や討論が中心であること、また専門性の高い内容を取り扱うことから、大学院生は常に主体的な学びを行う状況にある。より積極的な学びを促す工夫については、大学院委員会や教職支援センター運営委員会でのFD・SDを実施している。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-1-④-1 大学院FD・SDのポスター

⑤学生間の協働による課題発見力・課題解決力、価値協働を育成する場を設定しているか

## 自己評価

### 〔状況説明〕

複数の学生が受講する科目の一部においては、健康科学や教育に関する課題を思考し、解決に向けた方策を提案するといった内容を取り入れている。

### 〔長所・特色〕

特になし

### ＜根拠となる資料・データ等＞

3-1-⑤-1 2022年度 シラバス

3-1-⑤-2 大学院 FD・SD のポスター

### ⑥ コアカリキュラムに対応した教職課程のカリキュラムを提供しているか

### 〔状況説明〕

本大学院の専修免許状の教職課程科目は、教育職員免許法施行規則にある「大学が独自に設定する科目」のみで開講しているため、平成30年度申請の教職課程再課程認定において、教職課程のコアカリキュラムを適用していない。

### 〔長所・特色〕

特になし

### ＜根拠となる資料・データ等＞

3-1-⑥-1 2022年度 カリキュラム

### ⑦ 「教職実践演習」の運用上の適切性、「履修カルテ」の活用場の工夫を図っているか

### 〔状況説明〕

専修免許状の教職課程においては教職実践演習を開講していない。また大学院では履修カルテとして教職ポートフォリオを運用している。

### 〔長所・特色〕

特になし

### ＜根拠となる資料・データ等＞

3-1-⑦-1 履修カルテ

3-1-⑦-2 教職ポートフォリオ

⑧本来の対面授業のほかに、遠隔操作による授業（オンライン、オンデマンドなど）の工夫も取り入れているか

〔状況説明〕

本大学院では、仮想空間と現実空間を高度に融合したハイブリッド教育による教育効果を最大化することを目指し、「空間の枠を超えた学習環境」を整備している。本コースでは、全ての特論科目をオンライン形式（同時双方向型・オンデマンド）で実施しており、就労している社会人院生にとっても学びの機会や効果を最大限に拡大している。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-1-⑧-1 新潟医療福祉大学大学院ウェブサイト「夜間開講とメディア授業」

<https://www.nuhw.ac.jp/grad/support/decourse.html>

(2) 基準項目3-2 実践的指導力養成と地域との連携

①教育の実際場面に学生が触れるフィールドを提供しているか

〔状況説明〕

学校現場での教職ボランティアを希望する学生に対する情報の提供を積極的に周知している。

〔長所・特色〕

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-①-1 『教職支援センターニューズレター第8号』

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/pdf/newsletter\\_no8.pdf](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/pdf/newsletter_no8.pdf)

②取得する教員免許状の特性に応じた実践的指導力を育成する場を設定しているか

〔状況説明〕

今のところ特に設定していない。

## 自己評価

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-②-1 2022年度 カリキュラム

③様々な体験活動（ボランティア、インターンシップ、介護等体験等）とその省察による往還の機会を提供しているか

[状況説明]

「ボランティア体験を語る会」を年に2回開催しており、その場が省察や教員からの助言を受ける機会を設定している。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-③-1 『教職支援センターニューズレター第8号』

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/pdf/newsletter\\_no8.pdf](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/pdf/newsletter_no8.pdf)

④様々な子どもの発達段階に関する教育実践的な情報を提供しているか

[状況説明]

スポーツ教育学特論、保健体育科教育学特論の授業内にて提供している。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-④-1 2022年度 シラバス

⑤教育委員会との組織的な連携協力体制を構築しているか

[状況説明]

新潟県教育委員会・新潟県内私立大学教員養成連絡協議会や、新潟県教育委員会・新潟市内私立大学教員養成連絡協議会を、本学を会場に隔年で開催し、教育委員会と教員の養成、

採用、研修の在り方について情報交換や連携を進めている。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-⑤-1 「新潟市教育委員会・新潟県内私立大学 教員養成連絡協議会 開催報告」  
教職支援センター年報第6号. p.60-61

[https://www.nuhw.ac.jp/teaching\\_career\\_support/pdf/annual\\_2021.pdf](https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/pdf/annual_2021.pdf)

⑥教育実習の指定校（協力校）との連携を図っているか

[状況説明]

今のところ連携していない

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

⑦ 教育実習に臨む上での必要な履修要件を設定しているか

[状況説明]

本大学院の専修免許取得コースにおいては、取得の際に教育実習が法令上、課されていないことから、現在のところ教育実習の科目そのものを開設していない。

[長所・特色]

特になし

<根拠となる資料・データ等>

3-2-⑦-1 2022年度 カリキュラム

### III 今後の教職課程教育・運営の課題

本大学院は、2005年の開設以来、「より優れた QOL サポーターの育成」を教育理念として掲げてきた。また、2021年度には、より優れた QOL サポーターを、『仮想空間と現実空間を高度に融合させるとともに、多種多様なスペシャリストが自らの能力を最大限発揮できる環境を構築することで、保健・医療・福祉・スポーツ・教育領域に関わる学術・社会における課題解決と持続的な発展を先導し、誰もが相互に人格と個性を尊重し、支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会を維持・発展させる人材』（以下、Society 5.0 における共生社会を先導する次世代 QOL サポーター）と定義して、教員を含めた人材育成を進めている。

健康科学専攻（健康スポーツ学分野）健康科学学位プログラムの中・高保健体育専修免許状取得コースでは、専修免許取得に必要とされる「高度な教育研究能力を備えた教員」の育成を目的としており、手厚い学習環境での指導および実践を特色としている。

「基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み」や、「基準項目 2-2 教職へのキャリア支援」に関しては、学部の教職課程と連携することにより、協働的な取組が行われている。

一方で、「基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施」について、特に学科等の目的を踏まえ、「教科専門」「教科指導」「教職専門」の各科目・領域間の系統性を確保する点は、今後意識して編成していく必要がある。また、大学院の教職課程として実践の質を高める FD の機会の拡充、そして「基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携」という点において、本自己評価を通じて、改善できる余地が明らかになったため、今後検討を進めていく。

### IV 「教職課程 自己点検・成果報告書」作成のプロセス

大学院委員会およびその代表である研究科長は、大学合同教授会、自己点検・自己評価委員会のメンバーとして、教職課程の運用について教職支援センター運営委員会（学部・大学院）と連携し活動を行う。

教職支援センター運営委員会にて、教職課程の自己点検・成果報告書を作成し、学科会議（健康科学学位プログラム教職課程全教員が参集する会議）の審議・承認を経る。その後、教育・学生支援機構および大学院委員会にて審議し、承認を得た後、学長の承認を受ける。

V 現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者 学校法人 新潟総合学園					
大学院・専攻科名称 新潟医療福祉大学大学院 健康科学専攻健康スポーツ学分野					
専攻科やコースの名称（必要な場合） 中・高保健体育専修免許状取得コース					
1 修了者数、教員免許取得者数、教員採用者数等					
①	昨年度修了者数		健康科学専攻健康スポーツ学分野 7名 計 7名		
②	①のうち、就職者数 （企業、公務員等を含む）		健康科学専攻健康スポーツ学分野 4名 計 4名		
③	①のうち、教員免許取得者の実数 （複数免許取得者も1と数える）		健康科学専攻健康スポーツ学分野 2名 計 2名		
④	②のうち、教職に就いた者の数 （正規採用＋臨時的任用の合計数）		健康科学専攻健康スポーツ学分野 0名 計 0名		
	④のうち、正規採用者数		健康科学専攻健康スポーツ学分野 0名 計 0名		
	④のうち、臨時的任用者数		健康科学専攻健康スポーツ学分野 0名 計 0名		
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 ( )
教員数	健康科学部 健康スポーツ学 分野 7名 計 7名	健康科学部 健康スポーツ学 分野 4名 計 4名	健康科学部 健康スポーツ学 分野 7名 計 7名	健康科学部 健康スポーツ学 分野 0名 計 0名	
相談員・支援員など専門職員数 0名					

## 教職支援センター運営委員会の総括

吉田 重和<sup>1)</sup>・杵渕 洋美<sup>1)</sup>・渡辺 優奈<sup>2)</sup>・針谷 美智子<sup>1)</sup>・高田 大輔<sup>1)</sup>・

<sup>1)</sup>新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科

<sup>2)</sup>新潟医療福祉大学 健康科学部 健康栄養学科

### I はじめに

教職支援センター運営委員会には、各種業務の円滑な遂行のために、養成部会、採用・研修部会、企画・研究部会の三つの専門部会が設けられており、教職支援センターが主管する全学及び各学科教職課程の業務については、一部の事項を除き、各部会が中心となり実務に当たっている。

教職支援センター運営委員会では、コロナ禍3年目を迎えた2022年度においても、前年度までと同様に、「目標①:教職支援センター運営体制の堅持」「目標②:教職課程における教育活動の堅持」「目標③:本学教職課程のプレゼンスの堅持」を年次目標として掲げ、各種業務を着実に遂行することを目指した。また「目標④:持続可能な教職指導体制の検討」を新たに加え、コロナ禍収束後の教職課程がより充実するよう、人員を含めた学内資源の有効活用の在り方を検討することとした。

2022年度の主な取り組みとその成果について、次節において、教職支援センター及び教職課程に関する全体的事項、教員採用試験対策に関する事項、学外連携に関する事項に分類した上で確認していく。

### II 2022年度の主な取り組み及び成果

#### 1. 教職支援センター及び教職課程における全体的事項(目標①・目標②・目標④関係)

実務家教員としての確かな力量を有する教職支援センター非常勤講師3名(杉中宏氏・宮川由美子氏・森光雄氏)と各学科の実務家教員を中心に、充実した教職指導が展開された。2022年度の教職指導の中核は、「教員に相談しやすい環境を構築したこと」「複数の学内講座を年間通して開講したこと」「人物試験対策を集中的に実施したこと」などであった。これらの取り組みに対しては、次に示す教員採用試験の成果や、別稿の教職課程アンケートの結果などから、肯定的な評価を下している。

また教育職員免許法施行規則の改正により、2022年度より、教職課程を有するすべての大学において、教職課程自己点検評価の実施と結果の報告が求

められるようになった。この状況を受け本学では、これまで独自に取り組んできた自己点検・評価作業シートでの自己点検評価作業は休止することとし、全国私立大学教職課程協会が作成した「教職課程自己点検評価報告書フォーマット」を使用し、自己点検評価を実施した。さらに評価の実施後、健康科学部・看護学部の2学部3学科を併せた報告書と大学院医療福祉学研究所の報告書を作成・公表した。企画・研究部会の高田大輔委員(健康スポーツ学科)を中心に、自己点検評価の実施や報告書の作成・公表を遺漏なく実施することができた点を肯定的に捉えている。今後は、自己点検評価作業の内容や実施の頻度、また作業を受けた教職課程の改善の方向性等について検討を加えていく予定である。

上述したように各種の取り組みが充実する一方で、持続可能な教職指導体制構築に向けた検討については、具体的な数値目標を掲げなかったこともあり、順調に進んでいるとは言えない状況である。指導・支援の成果が出ている現状を変えるのは難しい側面もあるが、限られた学内資源を有効活用すべく、次年度は業務の精選に積極的に取り組んでいく必要があると考えられる。

#### 2. 教員採用試験対策に関する事項(目標②・目標③関係)

2022年度の教員就職状況については、本号の資料「教員免許状取得状況および教員就職状況」を参照されたい。本稿では正規採用実績のみ確認していく。

2022年度実施の教員採用試験の結果として、現役学生については、2次試験合格者9名(栄養教諭2名、中学校・高等学校保健体育科教諭2名、小学校教諭5名)という、本学教職課程史上最多の結果が得られた。2013年度の現役学生の2次試験合格者数が2名だったことを想起すれば、この10年間で、2次試験合格者数が着実に増加していることがわかる。また既卒生についても、卒業後も継続的に支援を受けていた者を含め、2次試験合格者10名(栄養



教諭1名、中学校・高等学校保健体育科教諭2名、小学校教諭2名、特別支援学校教諭3名、養護教諭2名)という結果が届いている。これらの結果から、教職志望の学生・既卒生に対する支援は着実に成果をあげていると判断できる。教職支援センターでは、教職志望の学生・既卒生が一人でも多く教職に就けるよう、引き続き実効的な指導・支援を展開していく。

### 3. 学外連携に関する事項(目標③・目標④関係)

若月弘久委員(健康スポーツ学科)の尽力により、2022年11月15日、「新潟県教育委員会・新潟県内私立大学 教員養成連絡協議会(以下、協議会)」がオンライン形式で開催され、養成・採用を中心に活発な意見交換がなされた。本協議会は、新潟県教育委員会と新潟県内私立大学(敬和学園大学・新潟青陵大学・新潟薬科大学・新潟経営大学・新潟工科大学・新潟医療福祉大学)が教員養成・教員採用に関する情報・状況を共有することを目指し、本学が幹事役を務めることで隔年開催されているものである。

2022年度の協議会においては、新潟県における教員採用試験の現況と今後の見通しが共有された後、「新潟県の求める教員像」に触れながら、教職志望学生・既卒生に求められる資質・能力が確認された。求められる資質・能力の具体としては、「周囲の助けを借りながら自分自身を高めていく力」「子どもたちと共に学び続け成長していく姿勢」「コミュニケーションを大切に周囲との信頼関係を構築しながら、子どもたちに対してより良い教育ができるチーム(学校)の一員となる覚悟」などが示された。また大学側から採用地や校種など採用後の人事に関する学生の不安感などが示された結果、新潟県教育委員会より、今後の対応改善の参考とする旨が示された。

上記の事例に明らかなように、教育委員会や県内私立大学と連携体制を構築することができており、本学教職課程のプレゼンスは年々高まっていると考えられる。他方で本学教職支援センターの人員等も限られていることから、今後とも協議会等で幹事役を担い続けるためには、教職支援センターが抱えている業務全体の在り方を検討する必要があると思われる。

### Ⅲ おわりに

「堅持」の文言から明らかなように、2022年度も、

これまでの蓄積を活かしながら、取り組みの効率を最大化することを目標として各活動が遂行された。コロナ禍による制約を受けながらも、本稿にて確認したように、教職支援センター及び全学教職課程として、学内外において一定の成果をあげることができた。具体的には「教職に就く学生・既卒生の数」「協議会開催への貢献」の二点を、2022年度の主たる成果として挙げるができる。

3年にわたり続いたコロナ禍により、教職支援センター及び全学教職課程に関する活動は、質的な側面においては変質を、量的な側面においては縮小を余儀なくされてきた。これらの変質や縮小については、本学の教職課程に関わる教職員や教職を志す学生にどのような影響を及ぼすかを注視し、影響の程度によっては直ちに改善する構えが求められる。

上記の現状認識に立ちつつ、これまでと同等かそれ以上の成果を継続して出すためには、「教員と職員が連携・協働して内部効率性を高めること」「必要な取り組みに学内資源を集中できるような環境を整備すること」の二点を各人が意識し、業務を展開することが必要だと思われる。

## 新潟医療福祉大学教員養成理念

### 新潟医療福祉大学 教員養成の理念と学生が目指すべき教師像

本学では、開学以来、「優れたQOLサポーターの育成」を教育理念として掲げてきました。これは、本学の教員養成教育の前提でもあり、これから教職を目指す学生の皆さんが教職に就くにあたって、現代の学校教育が抱える困難な諸問題に取り組んでいくための土台ともなりうるものです。

現代の学校教育には、児童生徒の主体性や学習意欲の欠如、体力・運動能力の低下傾向、食生活や食習慣の乱れからくる健康への影響、さらには、いじめや不登校など、さまざまな問題が山積していると言われています。また、指導力の不足や、児童生徒のみならず教職員や保護者、地域住民とのコミュニケーションがうまくとれないといった教師自身の問題も指摘されています。

以上に述べたことを踏まえて、本学の教員養成教育においては「優れたQOLサポーターとしての教師」を理念とし、求められる資質・能力を5項目あげています。

(本学では5項目の頭文字をとって「STEPS」と定義している。)

- I 児童生徒の人格形成に関する豊かな教養や人間性
- II 児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性
- III 専門領域に精通した高度な知識・技能
- IV 社会の中で自己の可能性を実現する力
- V 学校教育の場で求められるチームワークを発揮する力
- VI やる気を引き出すコミュニケーション能力
- VII 教職に対する使命感と最後まで責任を持って職務を遂行できる問題解決力

#### Science & Art (科学知識と技術を活用する力)

教職に関する教養を有し、専門分野に関する高度で科学的な専門知識と技術を教育指導の場面で活用できる。

#### Teamwork & Leadership (チームワークとリーダーシップ)

児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性を有するとともに、校内 連携において求められるチームワークを発揮することができる。

#### Empowerment (対象者を支援する力)

児童生徒の人間形成に関する豊かな教養や人間性及びコミュニケーション能力を有し、児童生徒の学びについて適切に導くことができる。

#### Problem-solving (問題を解決する力)

教職に対する使命感と最後まで職務を遂行しようとする責任感を有し、児童生徒に関わる諸問題を解決しようとする。

#### Self-realization (自己実現意欲)

教職と専門分野に関する課題に広く関心をもち、自己の可能性を実現するために、主体的、意欲的に研修できる。

本学において教職を目指す学生の皆さんには、ここに示された「教育の専門職」として求められる五つの知識・技能・能力を身につけ、将来、現代の学校教育が抱える困難な諸問題の解決に向けて取り組んでいくことが期待されています。

「優れたQOLサポーターとしての教師」とは、自らの専門領域における高度な知識・技能と深い教育的教養を備え、児童生徒の「現在のQOL」に目を向けて適切に対応できるだけでなく、彼らの「将来のQOL」の向上をも見据えながら、周囲の人びとと連携して職務を遂行していくことのできる存在です。こう

した存在になるためには、学生の皆さんが、豊かな人間性を育み、自らのQOLを意識的かつ継続的に高めていくことが大切でしょう。

本学の教職課程を履修するすべての学生の皆さんが「優れたQOLサポーターとしての教師」となることを目指して大きく成長していくことを強く願っています。

2019年4月1日  
新潟医療福祉大学

## 学科別 教員養成の理念と求められる資質・能力

### 健康栄養学科

#### 栄養教諭養成の理念

『栄養に関する高度の専門性』と『教育に関する資質』を併せ持ち、児童生徒、保護者および地域社会の健康づくりに貢献できる栄養教諭

#### 求められる資質・能力

- I 児童生徒、保護者、地域社会の実態や課題を把握し、学校給食の提供、食に関する指導および栄養管理を一体的に行う力
- II 自らの手で科学的エビデンスを構築し、エビデンスに基づいた活動を展開する力
- III 保護者、教員、地域社会と連携できる力
- IV 栄養教諭としての誇りと自覚、倫理観
- V 児童生徒、保護者および他職種から信頼される人間性や社会性

#### Science & Art (科学知識と技術を活用する力)

児童生徒、保護者、地域社会の実態や課題を把握し、学校給食の管理と食に関する指導を一体的に行うことができる。

#### Teamwork & Leadership (チームワークとリーダーシップ)

保護者、教職員、地域社会と連携・協働し、良好なコミュニケーションを図りながら食育推進の中心的な役割を果たすことができる。

#### Empowerment (対象者を支援する力)

児童生徒、保護者および他職種から信頼される人間性や社会性を有し、食に関する指導を通して、児童生徒の食生活の課題を改善に導くことができる。

#### Problem-solving (問題を解決する力)

自らの手で栄養科学的エビデンスを構築し、教職員と連携・協働する中で、エビデンスに基づいた活動を展開し、課題を解決しようとする。

#### Self-realization (自己実現意欲)

栄養教諭としての誇りと自覚、倫理観を有し、児童生徒の食及び栄養上の課題に関心を持ち、その解決のために自主的・継続的に研修できる。

健康スポーツ学科

中学校・高等学校教諭（保健体育科）養成の理念

健康・スポーツに関する専門的知識・技能（健康増進、傷害対応などの知識・技能を含む）を有し、児童生徒の人格形成と生涯にわたるQOLの向上に資することができる、豊かな教養と責任感を兼ね備えた保健体育教師

求められる資質・能力

- I 健康・スポーツに関する専門的知識・技能
- II 専門的知識・技能を効果的に身に付けさせる指導力
- III 保健体育教師としての誇りと使命感
- IV フォア・ザ・チーム（連携・協働）の精神

**S**cience & Art（科学知識と技術を活用する力）

健康・スポーツに関する専門知識・技能を身に付け、学校教育の場で、児童生徒の実態に合わせて活用できる。

**T**eamwork & Leadership（チームワークとリーダーシップ）

児童生徒・保護者・地域住民の実態に合った教育活動を展開するために、フォア・ザ・チーム（連携・協働）の精神をもち、フォロワーシップとリーダーシップを発揮できる。

**E**mpowerment（対象者を支援する力）

児童生徒・保護者・専門機関に信頼される人間性とコミュニケーション能力を生かし、児童生徒の豊かな学びのために適切な指導・支援ができる。

**P**roblem-solving（問題を解決する力）

保健体育教師としての誇りと使命感をもち、児童生徒一人一人の課題解決を支えることができる。

**S**elf-realization（自己実現意欲）

保健体育に関する課題に広く関心をもち、その解決のために主体的・継続的に研修できる。

看護学科

## 養護教諭養成の理念

本学教員養成の理念と指針を基盤とし、教育職であり看護職であるという特性を生かした「看護の専門性」を身につけた養護教諭

## 求められる資質・能力

- I 子どもたちの疾病管理、救急処置など、健康と命にかかわる看護能力
- II ヘルスプロモーションの理念に基づき、子どもたちのセルフケア能力を育成するための健康支援活動を実践できる能力
- III 養護教諭として、中核的な役割を担うことができる総合的な人間力
- IV 養護教諭に必要な倫理的態度
- V 根拠に基づいた研究的態度

### Science & Art（科学知識と技術を活用する力）

児童生徒を理解するための教養を有し、養護に関する必要な専門知識と技術が活用できる。

### Teamwork & Leadership（チームワークとリーダーシップ）

保護者、教職員、地域社会、専門機関と良好なコミュニケーションを取りながら、養護教諭として、健康支援活動において中核的な役割を担うことができる。

### Empowerment（対象者を支援する力）

多様な価値観を尊重し、養護教諭としての倫理観に基づいた責任ある行動ができ、児童生徒のセルフケア能力を育成するための健康支援活動を実践できる。

### Problem-solving（問題を解決する力）

学校保健に関する法令、専門知識と方法論を用いて対象者の問題を解決しようとする。

### Self-realization（自己実現意欲）

知的的好奇心を持ち、学校保健の動向や社会の変化について、生涯を通じて主体的・意欲的に研修できる。

## 教員免許状取得状況および教員就職状況

大学名	新潟医療福祉大学				設置者名	学校法人 新潟総合学園				
学部・学科の名称等				認定を受けている免許状の種類・認定年度		免許状取得状況・就職状況 (2022年度)				
学部	学科	入学定員	設置年度	免許状の種類	認定年度	卒業 者数	免許状 取得者数		教員就職者数	
							実人数	取得者数	正規	非正規
健康科学部	健康栄養学科	40	2007	栄養教諭一種免許状	2019	41	2	2	2	0
	健康スポーツ 学科	250	2007	中学校教諭一種免許状 (保健体育)	2019	205	87	76	6	17
				高等学校教諭一種免許状 (保健体育)	2019					
看護学部	看護学科	107	2018	養護教諭一種免許状	2019	101	5	5	0	1
入学定員合計		397	合計			347	94	170	8	18
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学部・学科等の名称」欄は、2022年4月1日現在の名称・定員である。</li> <li>・健康科学部健康栄養学科は、栄養士法第5条の3第4号の規定により、管理栄養士養成施設として2001年4月に指定済みである。</li> <li>・「免許状取得者数」欄の「実人数」欄は各学科等の実人数、「取得者数」欄は免許種別ごとの人数である。</li> <li>・健康スポーツ学科では、玉川大学 教育学部教育学科 通信教育課程との連携プログラムにより、小学校教諭二種免許状の取得者7名を含む。当該免許種別における教職就職者数は、正規5名である。</li> </ul>									

大学名	新潟医療福祉大学				設置者名	学校法人 新潟総合学園				
専攻・分野の名称等				認定を受けている免許状の種類・認定年度		免許状取得状況・就職状況 (2022年度)				
課程	専攻・分野	入学定員	設置年度	免許状の種類	認定年度	修了 者数	免許状 取得者数		教員就職者数	
							実人数	取得者数	正規	非正規
医療福祉学 研究科 修士課程	健康科学専攻 健康スポーツ学 分野	10	2007	中学校教諭専修免許状 (保健体育)	2019	7	3	3	0	0
			2007	高等学校教諭専修免許状 (保健体育)	2019			3	0	0
入学定員合計		10	合計			7	3	6	0	0
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「専攻・分野等の名称」欄は、2022年4月1日現在の名称・定員である。</li> <li>・「入学定員」欄は、専攻合計の人数である。</li> <li>・「免許状取得者数」欄の「実人数」欄は各学科等の実人数、「取得者数」欄は免許種別ごとの人数である。</li> </ul>									

### 教職課程在籍者数

	1年	2年	3年	4年	合計
健康栄養学科	10	5	6	6	27
健康スポーツ学科	256	236	77	90	659
看護学科	15	4	9	5	33
計	281	245	92	101	719

注1) 上記は配当学年における履修登録者数に基づく。

注2) 再履修登録者は除く。

### 教職課程実習修了者数

学科	観察参加実習	介護等体験実習	教育実習
健康栄養学科	—	—	6
健康スポーツ学科	132	75	89
看護学科	4	—	5

注1) 看護学科における観察参加実習については、授業科目「学校保健」において実施。

注2) 教育実習における数値は校種による区分によらない実数を表記。



## 教職課程活動記録

センター中心      学科中心      センター & 学科

月	教職支援センター	健康栄養学科	健康スポーツ学科	看護学科
4		教職オリエンテーション (オンデマンド)	教職オリエンテーション (オンデマンド)	教職オリエンテーション (オンデマンド)
4/27 新潟県・新潟市教員採用選考検査説明会 (オンライン)				
5	4/11 ～ 7/29	学内 講座 専門 教養	学内 講座 専門 教養	学内 講座 専門 教養
6	学内 講座			
7		6/27～9/9 人物評価試験対策指導		
7/19 学習ボランティア体験を語る会 (オンライン)				
8		8/10～9/25 教員採用試験対策オリエンテーション (オンデマンド)		
9	9/20・21 東京アカデミー オンライン講座 <一般教養>			
10				
11	11/15 新潟県教育委員会・ 新潟県内私立大学	11/17 教員免許一括申請説明会 (オンライン)		
11/25 教員採用試験合格者の声を聴く会 (オンライン)				
12	12/24 東京アカデミー 第1回全国模試	12/22 講師登録希望者説明会① (オンライン)		
1	11/28 ～ 2/27 東京アカデミー オンライン講座 <教職教養>	1/11～1/31 現職教員の声を聴く会 (オンデマンド)		
小学校教員養成 特別プログラム選考				
2	2/24 東京アカデミー 第2回全国模試	2/21 出願書類作成指導会 (オンライン)		
3	3/6～20 東京アカデミー オンライン講座 <一般教養>	3/9 講師登録希望者説明会② (オンライン)		
3/14 学習ボランティア体験を語る会 (オンライン)				
養護実習履修選考試験				

## 教職科目担当者一覧

専任教員 68名、非常勤教員 20名

(※教育職員免許法第66条の6に定める科目担当者を除く以下科目区分における科目担当者数とする)

### 栄養に係る教育及び教職に関する科目（教育職員免許法施行規則第10条関係）

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
栄養に係る教育に関する科目	学校栄養指導論Ⅰ	森泉 哲也	健康栄養学科
	学校栄養指導論Ⅱ	森泉 哲也	健康栄養学科
教育の基礎的理解に関する科目	教育原理	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教職概論	吉田 重和	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅰ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅱ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅰ	上田 純平	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅱ	上田 純平	健康スポーツ学科
	特別支援教育論	中川 一之	非常勤
教育課程論	杵渕 洋美	健康スポーツ学科	
道徳、総合的な学習の時間等の内容及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳教育指導論Ⅰ	丸山 裕輔	非常勤
	特別活動指導論Ⅰ	佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	総合的な学習の時間の指導論	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科
	教育方法・技術	杵渕 洋美	健康スポーツ学科
	生徒指導論	上田 純平	健康スポーツ学科
教育相談	石本 豪	言語聴覚学科	
教育実践に関する科目	教育実習（栄養教諭）	森泉 哲也	健康栄養学科
	教職実践演習（栄養教諭）	森泉 哲也	健康栄養学科

### 教科及び教職に関する科目（教育職員免許法施行規則第4条関係）

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
教科及び教科の指導法に関する科目	陸上競技	小林 志郎	健康スポーツ学科
		柴田 篤志	健康スポーツ学科
	水泳	下山 好充	健康スポーツ学科
		馬場 康博	健康スポーツ学科
		奈良 梨央	健康スポーツ学科
	器械運動	針谷 美智子	健康スポーツ学科
		五十嵐 久人	非常勤
	ダンス	若井 由梨	健康スポーツ学科

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
教科及び教科の指導法に関する科目	体操（エアロビクスエクササイズを含む）	伊藤 千賀	非常勤
	体づくり運動	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
	柔道	中村 忠明	非常勤
		星野 力	非常勤
	剣道	望月 雅之	非常勤
	サッカー	秋山 隆之	健康スポーツ学科
	バスケットボール	若月 弘久	健康スポーツ学科
		伊藤 篤司	健康スポーツ学科
		小林 真里奈	健康スポーツ学科
	バレーボール	久保 晃	健康スポーツ学科
		濱野 礼奈	健康スポーツ学科
	テニス	西海 幸頼	非常勤
	バドミントン	牛山 幸彦	非常勤
	野球ソフトボール	佐藤 和也	健康スポーツ学科
		鶴瀬 亮一	健康スポーツ学科
	野外活動Ⅰ（夏期）	吉松 梓	非常勤
	野外活動Ⅱ（冬期）	佐藤 敏郎	健康スポーツ学科
		佐藤 和也	健康スポーツ学科
		佐近 慎平	健康スポーツ学科
	水辺実習	西原 康行	健康スポーツ学科
		下山 好充	健康スポーツ学科
		奈良 梨央	健康スポーツ学科
	体育原理・スポーツ哲学	下窪 拓也	健康スポーツ学科
	スポーツ社会学	下窪 拓也	健康スポーツ学科
	体育・スポーツ史	泉田 俊幸	非常勤
	スポーツ運動学	森下 義隆	健康スポーツ学科
	スポーツ心理学	山崎 史恵	健康スポーツ学科
		中島 郁子	健康スポーツ学科
	スポーツ経営学	西原 康行	健康スポーツ学科
	生理学	越中 敬一	健康スポーツ学科
		山代 幸哉	健康スポーツ学科
		藤本 知臣	健康スポーツ学科
	運動生理学	越中 敬一	健康スポーツ学科
山代 幸哉		健康スポーツ学科	
藤本 知臣		健康スポーツ学科	
衛生学・公衆衛生学	杉崎 弘周	健康スポーツ学科	
学校保健	杉崎 弘周	健康スポーツ学科	
健康管理学	杉崎 弘周	健康スポーツ学科	

## 資料

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
教科及び教科の指導法に関する科目	救急法実習Ⅰ	大滝 弘	非常勤
	救急法実習Ⅱ	大滝 弘	非常勤
	体育科教育法Ⅰ	高田 大輔	健康スポーツ学科
		針谷 美智子	健康スポーツ学科
	保健科教育法	杉崎 弘周	健康スポーツ学科
	体育科教育法Ⅱ	針谷 美智子	健康スポーツ学科
体育科教育法Ⅲ	高田 大輔	健康スポーツ学科	
教育の基礎的理解に関する科目	教育原理	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教職概論	吉田 重和	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅰ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅱ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅰ	上田 純平	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅱ	上田 純平	健康スポーツ学科
	特別支援教育論	中川 一之	非常勤
	教育課程論	杵渕 洋美	健康スポーツ学科
	道徳教育指導論Ⅰ	丸山 裕輔	非常勤
	道徳教育指導論Ⅱ	丸山 裕輔	非常勤
	総合的な学習の時間の指導論	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科
	特別活動指導論Ⅰ	佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	特別活動指導論Ⅱ	佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	教育方法・技術	杵渕 洋美	健康スポーツ学科
生徒指導・進路指導論	上田 純平	健康スポーツ学科	
教育相談	山崎 史恵	健康スポーツ学科	
	中島 郁子	健康スポーツ学科	
教育実践に関する科目	教育実習指導論	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
	教育実習	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
	教職実践演習（中・高）	吉田 重和	健康スポーツ学科
		杉崎 弘周	健康スポーツ学科
		脇野 哲郎	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科
		高田 大輔	健康スポーツ学科
		上田 純平	健康スポーツ学科
針谷 美智子	健康スポーツ学科		

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
大学が独自に定める科目	介護等体験実習講義	吉田 重和	健康スポーツ学科
		杉崎 弘周	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科
		上田 純平	健康スポーツ学科
	教職実践対応論	吉田 重和	健康スポーツ学科
		杉崎 弘周	健康スポーツ学科
		脇野 哲郎	健康スポーツ学科
		若月 弘久	健康スポーツ学科
		久保 晃	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科
		高田 大輔	健康スポーツ学科
		上田 純平	健康スポーツ学科
		針谷 美智子	健康スポーツ学科
	体力トレーニング論	池田 祐介	健康スポーツ学科
		森下 義隆	健康スポーツ学科
		越智 元太	健康スポーツ学科
	コーチング論	伊藤 篤司	健康スポーツ学科
		西原 康行	健康スポーツ学科
		下山 好充	健康スポーツ学科
		奈良 梨央	健康スポーツ学科
	発育発達と老化	越中 敬一	健康スポーツ学科
		佐近 慎平	健康スポーツ学科
	健康栄養学	佐藤 晶子	健康スポーツ学科
	体力測定評価Ⅰ	佐藤 敏郎	健康スポーツ学科
	体力測定評価Ⅱ	下門 洋文	健康スポーツ学科
	コンディショニング論	熊崎 昌	健康スポーツ学科
		津賀 裕喜	非常勤
	スポーツ医学総論	大森 豪	健康スポーツ学科
		埴 晴雄	健康スポーツ学科
	障害者スポーツ論	佐近 慎平	健康スポーツ学科
	余暇論	佐近 慎平	健康スポーツ学科
	陸上競技指導実習	小林 志郎	健康スポーツ学科
		柴田 篤志	健康スポーツ学科
	水泳指導実習	下山 好充	健康スポーツ学科
		馬場 康博	健康スポーツ学科
		奈良 梨央	健康スポーツ学科
	ダンス指導実習	若井 由梨	健康スポーツ学科

## 資料

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
大学が独自に定める科目	サッカー指導実習	秋山 隆之	健康スポーツ学科
	バスケットボール指導実習	若月 弘久	健康スポーツ学科
	バレーボール指導実習	久保 晃	健康スポーツ学科
	ベースボール指導実習	佐藤 和也	健康スポーツ学科
		鶴瀬 亮一	健康スポーツ学科
	レクリエーション指導論	佐近 慎平	健康スポーツ学科
	スポーツと法	武田 丈太郎	非常勤
ジェンダースポーツ論	下窪 拓也	健康スポーツ学科	

## 養護及び教職に関する科目（教育職員免許法施行規則第9条関係）

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
養護に関する科目	公衆衛生学（疫学を含む）	遠藤 和男	健康栄養学科
	保健統計学	遠藤 和男	健康栄養学科
	学校保健活動論	丸山 幸恵	看護学科
	学校保健	丸山 幸恵	看護学科
	養護概論	丸山 幸恵	看護学科
	公衆衛生看護学概論	小山 歌子	非常勤
		杉本 洋	看護学科
		丸山 幸恵	看護学科
	公衆衛生看護活動論Ⅱ	小山 歌子	非常勤
	公衆衛生看護活動演習Ⅱ	杉本 洋	看護学科
		和田 直子	看護学科
	食品学	山崎 貴子	健康栄養学科
	臨床栄養学	長谷川 美代	非常勤
	人体の構造と機能Ⅰ	澤田 純明	理学療法学科
	人体の構造と機能Ⅱ	八坂 敏一	理学療法学科
		川上 心也	健康栄養学科
		徳永 亮太	理学療法学科
	感染防御と管理（微生物学を含む）	武石 雅幸	非常勤
		葛城 啓彰	非常勤
	臨床薬理学	馬場 広子	作業療法学科
	こころの構造と機能	外間 直樹	看護学科
	精神発達保健論	外間 直樹	看護学科
	小児発達保健論	松井 由美子	看護学科
		荒木 恵子	看護学科
佐藤 真由美		看護学科	

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
養護に関する科目	小児看護学概論	松井 由美子	看護学科
		荒木 恵子	看護学科
		佐藤 真由美	看護学科
	小児看護学実習	松井 由美子	看護学科
		荒木 恵子	看護学科
		佐藤 真由美	看護学科
	災害看護論	宇田 優子	看護学科
		石塚 敏子	看護学科
		稲垣 千文	看護学科
	基礎看護学実習Ⅰ	石綿 啓子	看護学科
		石塚 敏子	看護学科
	基礎看護学Ⅱ	石綿 啓子	看護学科
		石塚 敏子	看護学科
	基礎看護学演習Ⅱ	石綿 啓子	看護学科
		石塚 敏子	看護学科
	基礎看護学実習Ⅱ	石綿 啓子	看護学科
		石塚 敏子	看護学科
	成人急性期看護学	貝瀬 友子	非常勤
		渡邊 千春	看護学科
		桶谷 涼子	看護学科
	成人急性期看護学演習	渡邊 千春	看護学科
阿部 文絵		看護学科	
小栗 妙子		看護学科	
桶谷 涼子		看護学科	
教育の基礎的理解に関する科目	教育原理	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教職概論	吉田 重和	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅰ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育社会制度論Ⅱ	吉田 重和	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅰ	上田 純平	健康スポーツ学科
	教育心理学Ⅱ	上田 純平	健康スポーツ学科
	特別支援教育論	中川 一之	非常勤
教育課程論	杵渕 洋美	健康スポーツ学科	
道徳、総合的な学習の時間等の内容及び生徒指導、教育相談等に関する科目	道徳教育指導論Ⅰ	丸山 裕輔	非常勤
	特別活動指導論Ⅰ	佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
	総合的な学習の時間の指導論	脇野 哲郎	健康スポーツ学科
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学科
		杵渕 洋美	健康スポーツ学科

資料

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
道徳、総合的な学習の時間等の内容及び 生徒指導、教育相談等に関する科目	教育方法・技術	杵渕 洋美	健康スポーツ学科
	生徒指導論	上田 純平	健康スポーツ学科
	教育相談	石本 豪	言語聴覚学科
教育実践に関する科目	養護実習指導論	丸山 幸恵	看護学科
	養護実習	丸山 幸恵	看護学科
	教職実践演習（養護教諭）	丸山 幸恵	看護学科

教育職員免許法第66条の6に定める科目

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
教育職員免許法施行規則 第66条の6に定める科目	法学Ⅰ	渡部 和哉	非常勤
	法学Ⅱ	渡部 和哉	非常勤
	スポーツ・健康	佐藤 敏郎・他	健康スポーツ学科
	スポーツ・実践	佐藤 敏郎・他	健康スポーツ学科
	英語Ⅰ	五十嵐 紀子・他	作業療法学科・他
	英語Ⅱ	五十嵐 紀子・他	作業療法学科・他
	情報処理Ⅰ	寺島 和浩・他	医療情報管理学科
	情報処理Ⅱ	寺島 和浩・他	医療情報管理学科



大学院

教育職員免許法に定める科目

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
大学が独自に定める科目	健康科学特論	山代 幸哉	健康スポーツ学分野
		西原 康行	健康スポーツ学分野
		下山 好充	健康スポーツ学分野
		山崎 史恵	健康スポーツ学分野
		佐藤 大輔	健康スポーツ学分野
		佐藤 敏郎	健康スポーツ学分野
		吉田 重和	健康スポーツ学分野
		杉崎 弘周	健康スポーツ学分野
		大森 豪	健康スポーツ学分野
		埴 晴雄	健康スポーツ学分野
	健康スポーツ学特論	山代 幸哉	健康スポーツ学分野
		西原 康行	健康スポーツ学分野
		下山 好充	健康スポーツ学分野
		山崎 史恵	健康スポーツ学分野
		佐藤 大輔	健康スポーツ学分野
		佐藤 敏郎	健康スポーツ学分野
		越中 敬一	健康スポーツ学分野
		吉田 重和	健康スポーツ学分野
		杉崎 弘周	健康スポーツ学分野
		池田 祐介	健康スポーツ学分野
		大森 豪	健康スポーツ学分野
		下門 洋文	健康スポーツ学分野
		埴 晴雄	健康スポーツ学分野
		松浦 由生子	健康スポーツ学分野
	森下 義隆	健康スポーツ学分野	
	健康運動処方特論	佐藤 大輔	健康スポーツ学分野
		佐藤 敏郎	健康スポーツ学分野
		下門 洋文	健康スポーツ学分野
		越智 元太	健康スポーツ学分野
	トレーニング科学特論	池田 祐介	健康スポーツ学分野
熊崎 昌		健康スポーツ学分野	
松浦 由生子		健康スポーツ学分野	
森下 義隆		健康スポーツ学分野	
スポーツ医学特論	大森 豪	健康スポーツ学分野	
	埴 晴雄	健康スポーツ学分野	
コーチ学特論	下山 好充	健康スポーツ学分野	

資料

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目	科目担当者	科目担当者所属
大学が独自に定める科目	スポーツ心理学特論	山崎 史恵	健康スポーツ学分野
	スポーツ生理学特論	越中 敬一	健康スポーツ学分野
		山代 幸哉	健康スポーツ学分野
		佐藤 晶子	健康スポーツ学分野
		藤本 知臣	健康スポーツ学分野
	スポーツ経営学特論	西原 康行	健康スポーツ学分野
	スポーツ教育学特論	西原 康行	健康スポーツ学分野
		吉田 重和	健康スポーツ学分野
		佐藤 裕紀	健康スポーツ学分野
	保健体育科教育学特論	杉崎 弘周	健康スポーツ学分野
	健康科学演習	佐藤 大輔	健康スポーツ学分野
		佐藤 敏郎	健康スポーツ学分野
		下門 洋文	健康スポーツ学分野
	スポーツ医学演習	大森 豪	健康スポーツ学分野
		埴 晴雄	健康スポーツ学分野
	スポーツ科学演習	下山 好充	健康スポーツ学分野
		山崎 史恵	健康スポーツ学分野
		越中 敬一	健康スポーツ学分野
		山代 幸哉	健康スポーツ学分野
		下門 洋文	健康スポーツ学分野
		池田 祐介	健康スポーツ学分野
	スポーツ教育学演習	西原 康行	健康スポーツ学分野
		吉田 重和	健康スポーツ学分野
杉崎 弘周		健康スポーツ学分野	

## 教職支援センター利用状況

### 1. 教職支援センター開設と運営の概要

開設：2016年度4月

運営：2022年度7年目

場所：講義棟1階 D103

### 2. 2022年度 教職支援センターの運用

#### 1) 教職支援センター開室時間

通 期		
曜日	時間	在室者
月	9:00~17:00	教員 (2~4限:森) 職員
火		教員 職員
水		教員 (2~4限:宮川) 職員
木		教員 (2~4限:杉中) 職員
金		教員 職員
土日祝日・ 大学休業日	閉 室	

教職支援センター運営委員：随時  
※研究室待機対応

※ 教職員不在時の利用は不可

#### 2) 教職担当教員一覧

学科	教員名	専門領域	主な相談・指導内容(担当)	
健康スポーツ学科	吉田 重和	教育学	教職教養(教育法規)	
	杉崎 弘周	学校保健・保健科教育	※教員採用試験対策指導補助 教職支援センター在室なし	
	脇野 哲郎	体育科教育学	面接・場面指導・模擬授業・論作文	
	若月 弘久		専門教養(中高保体教諭)	
	久保 晃		教職教養(教育時事)	
	佐藤 裕紀	教育学	教職教養(教育原理)	
	杵渕 洋美	教育学	学修相談 ・ 人物評価 試験対策	
	高田 大輔	体育科教育学		専門教養(中高保体教諭、小学校教諭)
	針谷 美智子	体育科教育学		専門教養(中高保体教諭、小学校教諭)
	上田 純平	教育学	教職教養(心理学)	
健康栄養学科	森泉 哲也	健康教育(食育)	面接・場面指導・模擬授業・論作文	
	渡辺 優奈 ※~2022年9月	栄養生理学	専門教養(栄養教諭)	
看護学科	丸山 幸恵	学校保健	専門教養(養護教諭)	
	和田 直子	小児看護学		
非常勤	杉中 宏	教職	面接・場面指導・模擬授業・論作文	
	宮川 由美子	教職		
	森 光雄	教職		

## 資料

## 3. 利用状況

	自習	書籍・資料閲覧	授業に関する相談	実習に関する相談	模擬授業スペース利用・練習	教員採用試験に関する相談・報告	進路や就職に関する相談・報告	小学校教員養成特別プログラム	学内講座参加	印刷	指導予約	その他	計	前年度比
4月	0	21	4	0	10	22	11	1	280	25	5	89	468	177.3%
5月	32	12	0	2	0	26	1	9	214	14	5	8	323	105.6%
6月	38	6	0	1	0	18	0	8	125	8	0	15	219	83.3%
7月	68	14	0	0	18	52	2	7	89	16	3	25	294	162.4%
8月	38	10	0	0	1	76	0	0	0	16	4	9	154	165.6%
9月	7	1	0	0	0	16	2	14	11	3	0	9	63	286.4%
10月	8	13	0	0	7	16	1	3	207	10	0	32	297	72.6%
11月	11	15	2	0	0	11	4	5	182	23	0	98	351	83.2%
12月	11	13	0	0	0	8	2	19	116	13	0	96	278	96.5%
1月	11	19	0	1	0	11	2	4	32	18	2	37	137	109.6%
2月	22	18	0	1	0	33	9	48	13	12	2	43	201	128.8%
3月	17	13	0	0	0	47	3	3	29	6	0	99	217	75.9%
計	263	155	6	5	36	336	37	121	1,298	164	21	560	3,002	106.6%

## [考察・分析]

**運営**：教職支援センター開設7年目。長期化する新型コロナウイルス感染症の影響により、各種活動に様々な制限がかかるなか、感染症対策を講じた上で、学生が教職支援センターへ直接足を運ぶことができるようになり、学内講座や個別指導を実施することができた。また、昨年度から引き続き既卒生を対象とした教職指導をオンライン形式にて開催した。制限があるなか、質の高い教職指導が展開され、教員採用試験結果や教職課程アンケートの結果は良好であった。2022年度発行のニューズレターNo.10号を記念号として配布した。その他、教職支援センター年報 第6号（2021年度版）のリポジトリ登録を行った。教職関連ボランティアを含む学内における教職関連の活動を教職支援センターにて取りまとめた。また、外部業者による教員採用試験対策模試を4回実施し、うち1回は大雪の影響による交通網のトラブル等を回避するため自宅受験への切り替えを余儀なくされたが、うち3回は対面で実施できた。

**学生利用**：教職支援センター主催各種学内講座は、感染症対策を講じた上で対面で実施された。在学生の受験者に加え卒業生の教員採用試験受験者も32名おり、卒業生の利用も多く見受けられた。全体としては引き続き新型コロナウイルス感染症の影響もあったが、学生の利用は前年度より多かった。

**今後の課題**：教職課程をもつ3学科（健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科）の連携は強化されつつあるなか、教職支援センターが3学科の中心となり、持続可能な運営が課題となる。教科書・書籍や教具の補充など教職支援センター内の環境整備を更に進めていき、それらの書架や教具が有効活用されるよう使用方法等について検討していく。教職志望者に対する支援体制を更に強化し、学生のモチベーションの維持と効果的な教育指導体制を引き続き整えていくことが必要である。

## 教職課程アンケート

Google フォームを利用し教職課程履修4年生に対し以下の内容でWEB アンケートを実施。

### 現行の教職指導体制に関するアンケート

教職支援センター運営委員会

以下の内容は新潟医療福祉大学の教職課程でよりよい教員を育成するために、4年間教職課程を履修したみなさんにアンケートを行うものです。個人の回答を特定するものではありません。思ったこと、感じていることを率直に入力してください。

なお、教員採用試験を受験した、または今後受験する予定の4年生は1～8全ての質問にお答えください。  
教員採用試験を受験せず、今後も受験する予定のない4年生は1～4の質問にお答えください。

1. 新潟医療福祉大学の教職課程は「QOL サポーターとしての教師」として具体的には以下のような教師を育成することを目標として掲げています。以下の内容について、自分自身の現在の姿を評価してください。

1)	児童生徒の人格形成に関する豊かな教養や人間性 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
2)	児童生徒・保護者・地域住民の気持ちに寄り添う豊かな感性 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
3)	専門領域に精通した高度な知識・技能 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
4)	社会の中で自己の可能性を実現する力 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
5)	学校教育の場で求められるチームワークを発揮する力 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
6)	やる気を引き出すコミュニケーション能力 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
7)	教職に対する使命感と最後まで責任を持って職務を遂行できる問題解決力 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない

2. QOL サポーターとしての教師を育成するという教職課程の目標と、教職課程のカリキュラムの構成（授業科目の構成、開講順序）、個々の授業の内容は整合性がとれているかを評価してください。

1)	授業科目の構成、開講順序はQOL サポーターとしての教員を育てるという目的に合っている 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
2)	授業や実習の事前・事後指導の内容はQOL サポーターとしての教員を育てるという目的に合っている 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
3)	授業や実習の事前・事後指導によって、教員として働くための力量が十分に高まった 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
4)	本学の実技・実習系の設備はQOL サポーターとしての教員を育てるという目的を達成するのに十分である 非常に当てはまる・当てはまる・あまり当てはまらない・全く当てはまらない
5)	自由記述（2について何かありましたらお書きください。）

## 3. 教職支援センターの利用についてお答えください。

1)	教職支援センターを利用したことはありますか 頻りに利用した・時々利用した・あまり利用しなかった・利用しなかった
2)	教職支援センターの開室時間は十分でしたか かなり十分であった・十分であった・あまり十分ではなかった・十分でなかった
3)	教職支援センターの学習環境は十分でしたか かなり十分であった・十分であった・あまり十分ではなかった・十分でなかった
4)	自由記述（3について何かありましたらお書きください。）

## 4. 新潟医療福祉大学の教職課程での学びについて評価してください。

1)	新潟医療福祉大学の教職課程の学びについて、総合的に評価してください 非常に満足している・満足している・あまり満足していない・全く満足していない
2)	自由記述（4について何かありましたらお書きください。）

## 【教員採用試験受験経験・受験予定について】

受験経験について教えてください

<input type="radio"/>	1次試験、2次試験とも受験経験あり
<input type="radio"/>	1次試験のみ受験経験あり
<input type="radio"/>	未受験だが今後受験予定あり
<input type="radio"/>	未受験で今後も受験予定なし

※教員採用試験を受けていない方は以上で回答は終わりです。「次へ」をクリックした後、「送信」してください。ご協力いただき、大変ありがとうございました。

## 【教員採用試験を受けた方、今後受ける予定の方は以下もお答えください。】

教員採用試験受験科目を教えてください

<input type="checkbox"/>	中学校教諭（保健体育）／高等学校教諭（保健体育）
<input type="checkbox"/>	小学校教諭
<input type="checkbox"/>	栄養教諭
<input type="checkbox"/>	養護教諭

5. 教員採用試験の合格を目標としての教職課程の授業を評価してください。

1)	一次試験対策として授業や実習の事前・事後指導が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
2)	二次試験対策として授業や実習の事前・事後指導が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
3)	自由記述（5について何かありましたらお書きください。）

6. 教員採用試験の合格を目標として、教職課程の学内教員および教職支援センター教員による講座など授業外の指導を評価してください。

1)	一次試験対策として学内教員および教職支援センター教員による授業外の指導が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
2)	二次試験対策として学内教員および教職支援センター教員による授業外の指導が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
3)	自由記述（6について何かありましたらお書きください。）

7. 教員採用試験の一次試験および二次試験に学生が合格するという観点から、学内で行われていた外部業者の学内講座（東京アカデミー/協同出版）、模擬試験（東京アカデミー/協同出版/時事通信社）を評価してください。

1)	外部業者の学内講座を利用の有無について教えてください 利用したことがある・利用したことがない→〔4〕へ]
2)	一次試験対策として外部業者の学内講座が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
3)	二次試験対策として外部業者の学内講座が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
4)	外部業者の全国公開模試の受験の有無について教えてください 受験したことがある・受験したことがない→〔7〕へ]
5)	一次試験対策として外部業者の模擬試験が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
6)	二次試験対策として外部業者の模擬試験が役に立ちましたか 非常に役に立った・役に立った・あまり役に立たなかった・役に立たなかった・利用しなかった
7)	自由記述（7について何かありましたらお書きください。）

8. 新潟医療福祉大学の教職課程および教職支援センターの支援体制、教員採用試験対策指導等について評価してください。

1)	新潟医療福祉大学の教職課程および教職支援センターの支援体制、教員採用試験対策指導等について評価してください 非常に満足している・満足している・あまり満足していない・まったく満足していない
2)	自由記述（8について何かありましたらお書きください）

ご協力いただき、大変ありがとうございました。

# 教職支援センター刊行物

『教職支援センターニューズレター第10号』2023年3月刊行（新潟医療福祉大学教職支援センター運営委員会編集）

新潟医療福祉大学 教職支援センター

## NEWS LETTER

Niigata University of Health and Welfare  
Teaching Career Support Center

### CONTENTS

01. 巻頭言：教職支援センターのこれまでとこれから
02. 校長経験者が語る「本学教職支援センター」について
03. 卒業生の活躍（拡大版）
04. 2022年度の取組紹介
05. お知らせ／今後の予定
06. あとがき



### 巻頭言

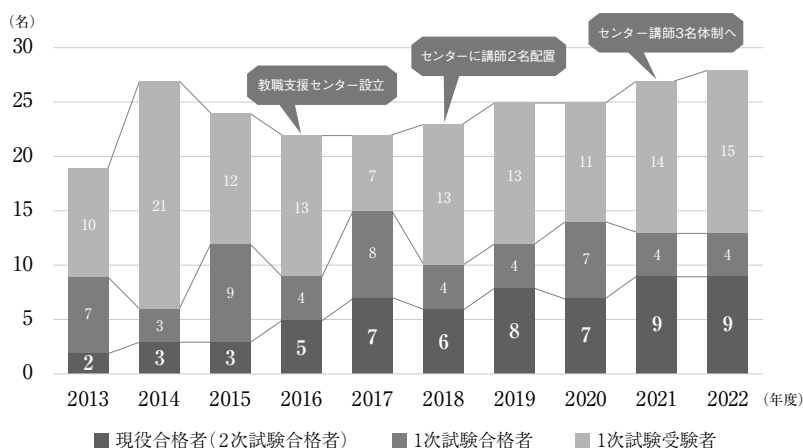
## 教職支援センターの これまでとこれから

教職支援センター長  
吉田 重和  
(健康スポーツ学科)



2016年4月に本学に教職支援センターが設立されてから、早いもので7年が経過しました。また、教職支援センターや教職課程に関する情報をお伝えすべく設立初年度から発行されてきた本ニューズレターも、本号で10号という節目を迎えました。ここを良いタイミングと捉え、本稿では教職支援センターの「これまで」を振り返るとともに、希望を込めて「これから」を綴ってみたいと思います。

まずは「これまで」の成果を確認してみましょう。以下のグラフは、直近10年間の現役生（健康栄養学科・健康スポーツ学科・看護学科4年生）の教員採用試験受験状況の推移を示したものです。2016年度に教職支援センターが設立されて以降、教職に関する情報・状況の共有が進められ、指導体制が質・量ともに拡充されました。これらを細かく紹介する余裕はありませんが、2018年度より経験豊かな実務家教員が講師として教職支援センターに配置され、複数の学内講座が通年で開講されるようになったのはその一例です。筆記試験を中心とした1次試験対策指導、人物試験を中心とした2次試験対策指導が充実した結果、現役合格者数が着実に増加してきています。この点に明らかのように、教職支援センターの「これまで」は、立ち上げ期として非常に充実していたとみることができます。



グラフ：現役生の教員採用試験受験状況の推移

設立以降の充実した時間を経て、教職支援センターの「これから」はどのように描かれるでしょうか。その方向性は、「教職支援センター年報」第1号の巻頭言にある「…教職支援センターは、「教師になりたい！」学生・卒業生がいる限り、その想いを受け止め、夢実現に向かって継続的に支援していきます」に示されています。夢実現に向けた支援の一つとして、教職支援センターでは2021年度より、卒業生を対象とした学内講座を開始しました。時間的・地理的な制約はありますが、一人でも多くの卒業生が「教師になる」夢を実現できるよう、着実に支援の輪を広げていきます。また今後は、同窓会活動を通して、教職に就いた卒業生同士を繋ぐ取り組みも新たにしていきたいと考えています。在学中だけでなく卒業後も教職支援センターを利用でき、様々な機会が教職支援センターにより提供されるということ、皆さん今からぜひ覚えておいてください。

教職支援センターはこれからも、教職を目指す皆さんを支えながら、皆さんとともに前に進んでいきたいと考えています。引き続きどうぞ宜しくお願いいたします。



## ◆校長経験者が語る「本学教職支援センター」について

本学教職支援センターに在室されている杉中宏先生、宮川由美子先生、森光雄先生は小学校や中学校の校長経験者です。今回は、先生方より本学教職支援センターについてお聞きしたインタビュー記事を掲載いたします。3人の先生方より、

**①本学学生の強みと弱み** **②教職支援センターの有効活用の方法** **③これから求められる教員とは**についてお聞きしました。



杉中 宏先生



宮川 由美子先生



森 光雄先生

### 1 本学学生の強みと弱み

**強み** 素直に物事を受け止められるところだと思います。本学の学生は大変素直な方が多いと感じています。素直なことは、全ての活動や学びの基本となるため、大切にしたいと思っています。資格取得を目指す学生が多いため、目標・目的が明確で、全体的に良い方向で学びに向かっている印象があります。そうした面が強みだと感じています。

**弱み** 素直な一方で、様々なところから見聞きした情報をそのまま受け止めてしまうところが少し心配しているところです。学んだことを基に問題意識や課題をもち、学びを広げたり、深めたりするところが弱みと感じます。教員には探求心が必要です。これまでの指導を振り返ったり、改善したりする過程での情報のアップデートは必要不可欠です。そのような意味でも、常に問題意識や課題をもち、学びを広げたり、深めたりすることが大切になります。

**強み** いい意味で骨太なところだと思います。これからの学校現場では、ある程度図太くないとやっていけません。また、「教員を目指す」という目的意識が明確であるところもよいと感じます。講義のスタート時に、私が「これからの人生のほとんどを子どもたちと共に過ごす」ということの覚悟はありますか?」を問うと、全員が「本を」ではなく「あります」と回答しています。これは非常に良いことだと思います。

**弱み** 「活字離れ」が著しいと思います。私は、改めて講義の導入で「最近読んだ本」と「最近気になるニュース」について学生に聞いています。最初はスムーズに回答できない学生もいますが、講義を重ねるにつれて、「本を読んでいるな」「ニュースを調べてきたな」と感じるが増えています。意図的、意識的に活字に触れる機会を増やしてほしいと思います。

**強み** 強みは「最後までやり抜く力」があることだと思います。特に、教採の対策講座や面接練習等での追い込みでは爆発的な力を発揮する学生が多くなります。正規教員として学校現場で活躍している本学の卒業生も校長や同僚から「最後までやり抜く力」等で高い評価を受けている人が多いと聞いています。うれしいですね。

**弱み** 「計画を立てて地道に実行すること」が苦手な学生が多いと思います。見通しを持って計画的に仕事をするのは教員になってからも必要な力ですので、プラン作成能力、スケジュールマネジメント能力等を教採受験を通して身に付けてほしいと願っています。まずは、教採合格をゴールに定め、そのためにいつまでに何をどれくらいやるかなどのプランを立てることから始めましょう。苦手な人は、一度教職支援センターの私たち教員に相談してみてください。その人に合った勉強方法などをアドバイスできます。

### 2 教職支援センターの有効活用の方法

まずは、機会があるごとに来室することが大切だと思います。どんなことでもよいですし、様々な話をに来てください。教職支援センターの教員や職員と積極的にコミュニケーションを取れるような場にしていきたいと思っています。また、勉強の場、教採の情報収集の場、モチベーションを上げる場として活用してもらいたいと思います。私が教職支援センターの理想の姿として考えるのは、学生同士が自主的に模擬授業を見合ったり、グループで教採の勉強したりする様子が日常的に見られるようになることです。そのような環境を皆さんで作っていきましょう。

まずは、足繋ぎ通ってほしいと思います。教職支援センターでは、何かしらの情報を得ることが出来ます。また、その場に居合わせた仲間と情報交換が出来ます。教員はコミュニケーション能力が求められます。センターで、たくさん仲間を作って、頑張ってください。また、事務関係では、担当者が非常にきめ細やかに支援をしてくださいます。メールは落ちなくチェックしてほしいですし、提出物の期限や返信の締切を厳守する等、社会人として当然求められます。こういった力も教職支援センターの活動の中で今のうちに養っておきましょう。

教職支援センターには、教職関係の図書や資料だけでなく、小・中学校の教室と同じような黒板、教卓、生徒用の机・椅子などもあり、教採の模擬授業や集団討論、場面指導、面接などが練習できる環境が整っています。また、指導主事や管理主事経験のある3人の元校長が講師として曜日ごとに在中していますので、同じ相談でも3人がそれぞれに異なった視点から学生に指導・助言をすることが可能です。まずは、昼休みや隙間時間に教職支援センターに気軽に立ち寄り、そこにいる講師や事務局の方に話しかけてみてください。何かいいことがあるかもしれません。お待ちしております。

### 3 これから求められる教員とは

たくさんありますが、特に「授業力」「カリキュラム・マネジメント力」「協働力」「柔軟な対応力」だと思っています。「授業力」は「教員は授業で勝負する」という言葉があるようにやはり授業力は求められると思います。「カリキュラム・マネジメント力」はキャリアによって変わりますが、その根本は子どもたちいかに「わかる」や「できる」を味わわせるかということが大事になるので、教育活動全体を通してそれに向けて改善していくことが必要だと思います。「協働力」はいろいろな場面で「チーム○○」という言葉があります。教育課題も多岐にわたり複雑化しているため、チームで解決していく必要があります。「柔軟な対応力」はその時代や目の前にいる子どもとの実態に合わせて柔軟に対応できる力量が大事だと思います。

校長経験者として「こんな先生がほしい」という観点でお話すると「たくさん子どもたちと触れ合ってくれる」「何事も素直に受け止める柔軟な心を持っている」方だと思います。また、努力をおしまないことも大事だと思います。井村雅代氏(リオ五輪、シンクロコーチ)が「一流の選手だからと言って才能に恵まれているとは限りません。身体的な才能は何とかなるんです。一中略一それよりも大事なのは、何かの壁にぶつかったときに、あきらめずにもっと頑張ろうと素直に思える『心の才能』です。これがなかったら、一流になることはまず無理です。」と述べています。私は、この言葉を受けて、「努力は夢の始まり」と捉えています。努力という言葉は少し古くさいかもしれませんが、忘れてほしくないなとすごく感じるようになりました。

不易と流行という視点から言えば、いろいろとあげられますが、まずは「人間力」だと思います。どんな時代になっても教師にはこの「人間力」が最も大切だと思います。こどもや保護者が「あの先生は信頼できる、何でも話せる、話を聞いてくれる、大好きだ」と思える魅力をもった先生が「人間力」のある先生だと思います。私たちもこの人間力を高めるために自分磨きをしてきましたが、まだまだ不十分です。子どもたちのために自分磨きを続けられる教師はこれからも求められると思います。



## ◆卒業生の活躍 拡大版

現職教員として活躍する卒業生・修了生からのメッセージです。今回は、4名の先生方（健康栄養学科：1名、健康スポーツ学科：2名、看護学科：1名）よりメッセージをいただいています。これから教員を目指す方は、是非参考にしてください。

### message from

夏井 紗野 さん  
(2020年度大学院修了生)

所属：新潟県内小学校  
(学校給食センター在勤) 栄養教諭



#### 1. 教員になって一番嬉しかったこと、一番辛かったこと

給食のできあがる最高の瞬間に「毎日」立ち会うことができること、その魅力を誰よりも伝えられる立場にいることが一番嬉しいです。辛かったことは特にありませんが、食育の授業準備と、給食管理業務と、年度末の会計業務が重なった時にハードだなと感じました。今後の働き方の課題にしています。

#### 2. 今後、こんな教員になりたい 教員としてこんなことをやってみたい

「何かを学ぶ」ことは楽しいだけでは意味がないですが、楽しくなければ続きません。生きている限り、学ぶことは続きます。健康教育はもちろんですが、各教科の学問的な魅力や面白さを引き出せる導線やきっかけになるような給食作り、食育授業などを通して、食の魅力を伝えられる教員になりたいです。また、私自身も人生のどこかで、一度専門機関で「教育」について深く探求してみたいです。

#### 3. 後輩へのメッセージ

私は働いて何年かしてから、栄養教諭として働きたいと思い、教員免許を取るためにもう一度大学で学び直しました。いつでも自分の進みたい道は変更できるし、選び直せるし、学び直せます。安心して今熟中していることを真剣に取り組んでみてください。

### message from

村川 舞 さん  
(2019年度卒業生、  
小学校教員養成特別プログラム3期生)

所属：新潟県内小学校 小学校教諭



#### 1. 教員になって一番嬉しかったこと、一番辛かったこと

子どもたちは本当に素直なので、私の問いかけ、言葉掛け次第で反応が大きく変わります。私の問いかけで早く解きたい！みんなと話してみたい！これはやってみよう！と言ったり、まっすぐに目をキラキラさせたりする瞬間は、とても嬉しいです。ですが、言葉掛けを間違ってしまう、子どもたちのやる気を削いでしまったときは、悔しくて辛くなりました。

#### 2. 今後、こんな教員になりたい 教員としてこんなことをやってみたい

様々な考え方や新しいものが次々に取り入れられる日々です。これからどうなっていくのだろうという不安や心配もあります。ですが、それらに應ずることなく、新しいことに挑戦し、柔軟に取り入れ、活用できる教員になっていきたいと思っています。

#### 3. 後輩へのメッセージ

大学の4年間を大切に過ごしてほしいと思います。どんな仕事に就いたとしても学生生活で学んだことは必ず役に立つと思います。卒業してから「～しておけばよかったな」と思うことがないように、自分がやりたいと思ったことはどんどん挑戦してみてください。

### message from

山田 翔平 さん  
(2016年度卒業生)

所属：新潟県内中学校  
中学校保健体育教諭



#### 1. 教員になって一番嬉しかったこと、一番辛かったこと

一番嬉しかったことは、現在野球部の顧問をしており、10月に行われた県大会で優勝し全国大会出場を決めたことです。いつか県大会で優勝したいという目標を叶えることができて嬉しかったです。このような幸せな経験をさせてくれた選手たちに感謝しています。一番辛かったことは、教員は異動を伴う職業なので、前任校の生徒と別れるときはとても辛かったです。

#### 2. 今後、こんな教員になりたい 教員としてこんなことをやってみたい

今後は生徒や先生方から慕われる教員になれるように何事も手を抜かず1日1日を大切にしていきたいです。私は、保健体育科の教員なので、生徒が体を動かすことに興味をもってもらえるような授業づくりをしていきたいです。

#### 3. 後輩へのメッセージ

教員という仕事は生徒、先生方、保護者などたくさんの人と出会いや別れを経験し、自分自身も成長させることが出来る素敵な職業だと思います。辛いことや苦しいこともあるかもしれませんが、その分のやりがいも感じる事が出来ます。新潟県と一緒に仕事ができることを楽しみにしています！

### message from

大倉 未来 さん  
(2015年度卒業生)

所属：新潟県内中学校 養護教諭



#### 1. 教員になって一番嬉しかったこと、一番辛かったこと

保健室は、けが、病気、相談、雑談など様々な理由で来室する生徒がいます。大変な事例もあれば楽しい時間を過ごすこともあります。その中でも、たくさん関わった子どもたちから卒業式の日に手紙をもらったことがありました。また、明日からも頑張ろうと思いました。大学卒業後、4月からすぐに「先生」と呼ばれ戸惑いました。養護教諭は学校に一人しかいないため、なかなか相談したり、アドバイスをもらったりする相手もいませんでした。その分、同じ地域や同期の養護教諭とたくさん情報交換をして勉強をしました。

#### 2. 今後、こんな教員になりたい 教員としてこんなことをやってみたい

これから、身体の健康だけでなく心の健康にもさらに気遣えるような養護教諭になることを目標としています。子どもによって置かれている背景は様々です。子どもたちはもちろんですが保護者や同僚などからも相談したいと思ってももらえるようにしたいです。

#### 3. 後輩へのメッセージ

子どもたちの心身の健康を一番近くでサポートできるのが養護教諭のいいところです。大学ではたくさんの方の事を吸収して、将来魅力的な先生になってください！

## ◆2022年度の取組紹介

2022年度に教職支援センターで実施されたイベントの一部をご紹介します。この他にも様々な講座やイベントを開催しています。興味のある方は是非ご参加ください。

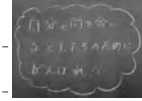
**2023年  
2月21日  
[火]** **出願書類作成指導会**



教員採用試験出願書類作成指導会を実施し、20名の学生が参加しました。講師は脇野哲郎先生にご担当いただきました。指導会では、「教員採用試験で願書が大切な理由」「願書提出までの6つのステップ」「自己申告カード等の書き方のポイント」「自己申告カード等の添削指導の流れ」等についてご指導いただきました。今回は、久しぶりに対面形式での実施で、学生は有意義に学ぶことができました。また、学生同士で積極的に意見交換するような姿も見られました。このような場が少しずつ戻ってきていることも非常に嬉しい光景でした。脇野先生の指導は具体例を用いていたため、より実践的でわかりやすい内容となっていました。参加した学生からも非常に好評でした。いよいよ2023年の教員採用試験の出願書類提出の時期も近づいてきました。この学びを活かして自分をアピールしていきましょう。



**2023年  
3月9日  
[木]** **講師希望者説明会**



第2回講師希望者説明会を実施し、9名の学生が参加しました。講師は杉中宏先生、脇野哲郎先生にご担当いただきました。説明会では、「講師の種類・待遇」「講師採用の現場から」「心構え」等についてご指導いただきました。校長経験者の先生方からのご指導は非常に参考になりました。学生からも「4月から即実践していきたいです」「ご指導いただいたことを活かして頑張ります」等の意見があり、学びが多い場になったのではないかと思います。今回参加した学生の皆さんは、4月から学校現場で教師として働きます。さまざまな経験をしながら成長し、良い教師となれるように頑張ってください。このように教職支援センターでは、教員採用試験の対策のみならず、様々な講座や説明会等を実施しています。



## お知らせ/今後の予定

▶ **教職担当教員による教員採用試験対策 学内講座**  
5月～7月かけ、各種講座を開講中です。4年生を中心に積極的にご参加ください。3年生以下も歓迎します。

曜日	時限	講座	担当教員
月	4限	直前総合演習Ⅳ(保健体育教諭向け)	森先生
火	1限	論文演習Ⅱ	若月先生・久保先生
水	1限	直前総合演習Ⅰ	脇野先生
水	3限	面接演習Ⅱ	宮川先生
木	3限	教育課題演習Ⅱ	杉中先生
金	5限	直前総合演習Ⅱ(栄養教諭向け)	森泉先生
集中講義		直前総合演習Ⅲ(養護教諭向け)	丸山先生

▶ **学習支援センターの利用について**

図書館1Fラーニング・コモンズ内学習支援センターでは一般教養の勉強について相談できます。数学・化学・物理や日本語表現、お礼状の書き方の指導も行っています。お気軽にご相談ください。

▶ **外部業者学内模擬試験**

2024年度向け模擬試験は後期に予定(詳細はメールで案内します)

▶ **教員採用試験関連イベント**

決定次第ご連絡いたします。

▶ **学習ボランティア体験について**

学校でのボランティアに興味のある方は、ご相談ください! [窓口: 脇野先生]

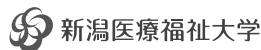


## あとがき

本学教職支援センターニュースレターは2017年12月に創刊され、このたび第10号の発行となりました。これまで教職支援センターを支えていただいたすべての皆さまにこの場を借りて御礼申し上げます。このような節目に本ニュースレターの編集をさせていただいたことに大きな喜びを感じております。

個人的に本記念号は、教職支援センターのこれまでの振り返りや今後の在り方を考える良い機会となりました。特に、教職支援センターに在学中の3人の先生方のインタビューを通して、今後の課題やこれからの学生指導について考えることができました。さらに、卒業生が学校現場で活躍している姿を見ることで、非常に嬉しく感じるとともに、在学生の指導に関する使命感を再認識しました。これを機に、さらに本学教職支援センターの活動の発信を進めて参りたいと思います。

(健康スポーツ学科 高田大輔)



発行 新潟医療福祉大学 教職支援センター運営委員会  
〒950-3198 新潟県新潟市北区島見町1398番地



Niigata University of Health and Welfare  
Teaching Career Support Center  
2023年3月31日発行

お問い合わせ

✉ E-mail : kyoshoku@nuhw.ac.jp

🌐 WEB : https://www.nuhw.ac.jp/teaching\_career\_support/

新潟医療福祉大学 教職支援センター

検索



## 『新潟医療福祉大学教職支援センター年報』刊行規程

新潟医療福祉大学 教職支援センター

- 第1条 新潟医療福祉大学教職支援センター（以下、教職支援センターと記載）は、『新潟医療福祉大学教職支援センター年報』（以下、年報と記載）を原則として年1回刊行する。
- 第2条 年報の編集は、教職支援センター運営委員会の議を経て教職支援センター長が任命した企画・研究部会によって行う。
- 第3条 年報は、他誌において発表済みの研究論文の転載（原則として20,000文字前後）、研究ノート（研究論文にまで至らない研究成果などを8,000文字程度でまとめたもの）、教育実践報告、教職課程および教職支援センターの活動報告、書評などで構成される。
- 第4条 研究論文は発表済のものに限り、企画・研究部会の査読は行わない。
- 第5条 年報への投稿は、新潟医療福祉大学の教職員、大学院生・学部学生、および企画・研究部会が認めた者に許される。
- 第6条 年報の発行部数は200部程度とし、発行部数は別に定める。
- 第7条 年報に掲載される、第3条に定めた研究論文を除く内容の著作権の扱いは、以下の通りとする。  
（1）著作権は、著者に帰属するものとする。  
（2）著作権者は、複製権・公衆送信権等、出版やオンラインでの公開・配信について、新潟医療福祉大学教職支援センターに著作権上の許諾を与えるものとする。
- 第8条 この規程に定めるもののほか、年報刊行に必要な事項は教職支援センター運営委員会が定めるものとする。
- 第9条 この規程の改廃は、教職支援センター運営委員会の議を経て、教職支援センター長が行う。

### 附 則

この規程は、2017年11月21日から施行する。

## 執筆担当者一覧

吉田 重和	健康科学部	健康スポーツ学科	教授 (教職課程長／教職支援センター長 ※2022年度)
森泉 哲也	健康科学部	健康栄養学科	教授
渡辺 優奈	健康科学部	健康栄養学科	助教 (2022年9月退職, 現 千葉県立保健医療大学 健康科学部)
片山 直幸	健康科学部	健康栄養学科	助教
脇野 哲郎	健康科学部	健康スポーツ学科	教授 (現 教職課程長／現 教職支援センター長)
若月 弘久	健康科学部	健康スポーツ学科	准教授
久保 晃	健康科学部	健康スポーツ学科	准教授
佐藤 裕紀	健康科学部	健康スポーツ学科	講師
杵渕 洋美	健康科学部	健康スポーツ学科	講師
高田 大輔	健康科学部	健康スポーツ学科	助教
針谷美智子	健康科学部	健康スポーツ学科	助教 (現 健康科学部 健康スポーツ学科 講師)
上田 純平	健康科学部	健康スポーツ学科	助教
丸山 幸恵	看護学部	看護学科	講師
小林 房代	看護学部	看護学科	助教 (現 健康科学部 健康栄養学科 准教授)

石井 杏奈	健康科学部	健康栄養学科	
清水 瑤羅	健康科学部	健康栄養学科	
木戸浦涼葉	健康科学部	健康栄養学科	
久保田涼香	健康科学部	健康栄養学科	
小林 乃愛	健康科学部	健康スポーツ学科	
高橋 和希	健康科学部	健康スポーツ学科	
田中 優麻	健康科学部	健康スポーツ学科	
若井 潤	健康科学部	健康スポーツ学科	
川下 希恵	健康科学部	健康スポーツ学科	
庭山 蒼太	健康科学部	健康スポーツ学科	
山下 真緒	健康科学部	健康スポーツ学科	
谷井 翔	健康科学部	健康スポーツ学科	
遠藤 睦実	看護学部	看護学科	
吉田 柚理	看護学部	看護学科	
池上 悠	看護学部	看護学科	卒業生

## 編集委員一覧

高田 大輔	教職支援センター運営委員会	企画・研究部会
脇野 哲郎	教職支援センター運営委員会	企画・研究部会
菅原 直実	学務部 教務課／教職支援センター	
阿部つばさ	学務部 教務課／教職支援センター	

## 編集後記

『新潟医療福祉大学教職支援センター年報』第7号をお届けいたします。本年報には、教職課程に関わる教職員の共同研究の成果である研究ノート、各学科で行われている実習や授業、特徴的な取組の紹介、各種実習や教員採用試験を振り返る学生の声、本学教職課程にまつわる各種データなどを掲載いたしました。また、2022年度より教職課程を有するすべての大学に教職課程の自己点検・評価が義務化されたことを受け、本学でも教職課程の自己点検・評価報告書を作成いたしました。その報告書も今号より掲載することとなりました。本号を手にとられた皆さまより、各記事に対しご批正を賜れば幸甚に存じます。

本号の発行にあたり、ご協力をいただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(編集委員 高田 大輔)

新潟医療福祉大学教職支援センター年報 第7号 [2022年度版]

発行日 2023年9月25日

編集・発行 新潟医療福祉大学 教職支援センター運営委員会

〒950-3198 新潟県新潟市北区島見町1398番地

TEL 025-257-4455 (代)

FAX 025-257-4558

印刷 株式会社 ウィザップ

ISSN 2433-7803

